淨土

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十一年三月廿日印刷納本　昭和十一年四月一日發行

第二卷　第四號

四月號

法然上人鑽仰會發行

法然上人語抄

信仰の珠玉！　浩瀚なる上人遺文中より、現代生活に最も適切なるものを選んだ句々金玉の聖句！現代日本人の聖典！

藤井實應編
菊半裁版　一四四頁
クロース裝函入
定價　卅四錢
送料共

新刊發賣!!

手頃なポケット型、裝訂も確りしたものですから、仕事の合間、電車、自動車の中で手輕に取出して讀める。心靜かなる時、惱める時、隨時隨所に讀めて心の糧となり生活の指針となる。

敬虔な編者が一字一拜の誠を捧げ、嚴密な校訂を經てなつたもの。配列にも、編輯にも新機軸を開き、活字も九ポイント總ふり假名付であるから誰にも讀める！

勤め人も商人も勞働者も、そのポケットに懷中に必ず一本を蓄へて信仰の眞髓に接して正しい生活の確立に資して下さい。

◇發行所　法然上人鑽仰會◇

信仰讀本

増補改訂版

中村辨康著

四六版八〇頁 總ふり假名付
定價 二十二錢 送料共

邪教の迷夢より醒めよ！正しい軌道の上に！

邪教が跋扈するのは民衆生活の深刻化を物語るものであるが、同時にそれは正しい信仰の光が遮られてゐることを示してゐる。凡ての迷蒙から己れを解放し、生活を確立するためには己れの信仰を正しい軌道の上にのせなければならない。

今回法然上人鑽仰會は信仰を求めて、しかも良師を得さる人々のために、この名著の増補改訂版を出版し、正しく、力強き信仰への扉を打開く。『淨土』誌上の著者の名講義の愛讀者は是非一讀せねばならない名篇である。

内容

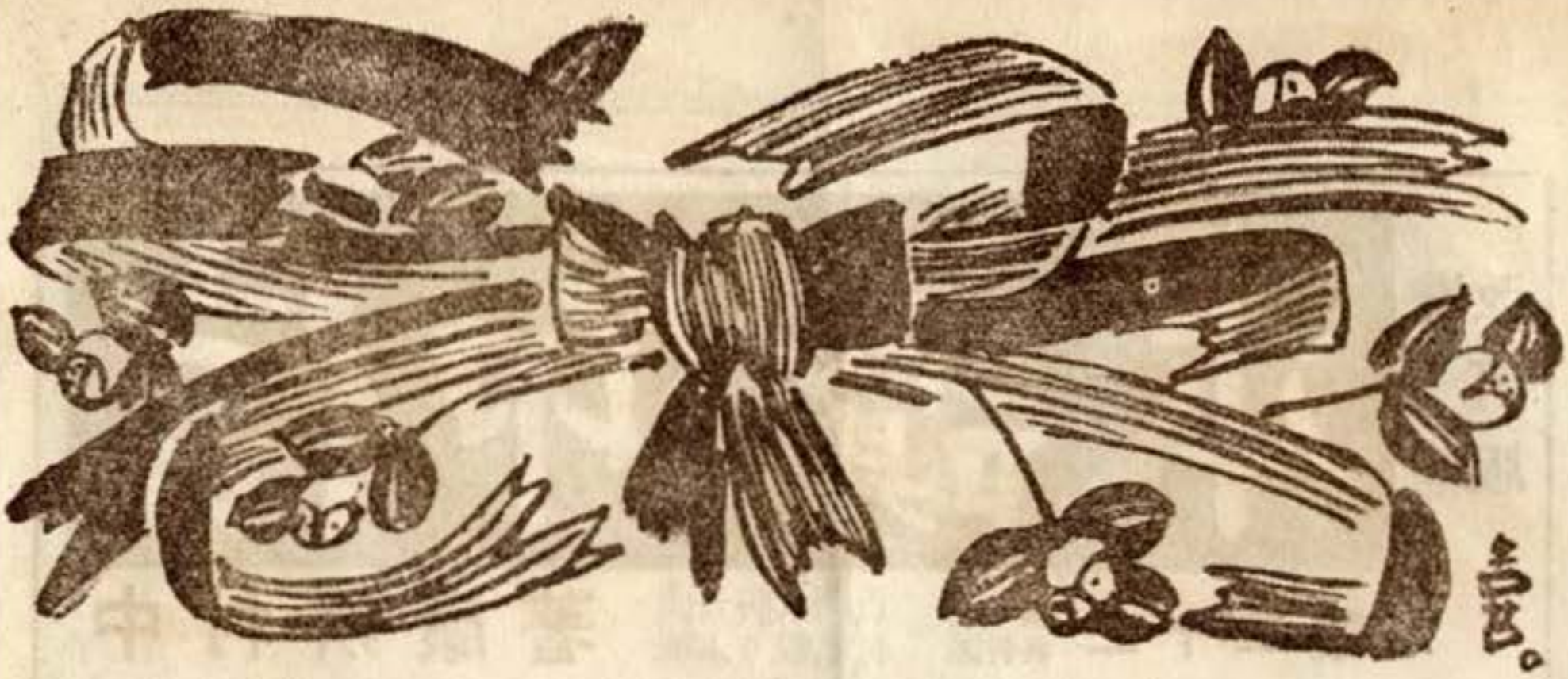
第一章 悟りと救ひ
第二章 宗教と人間の望み
第三章 信仰する心持
第四章 信仰の本尊
第五章 信仰を得る迄

法然上人

大正大學教授 大野法道著 四六判七〇頁 定價 送料共 拾七錢

法然上人に關する文獻は古來少しとしなかつたが、いづれも難解に過ぎるか、浩瀚に失するかして、萬人に適する文字を得なかつた恨みがある。篤學の著者が研磨して簡潔にして要を得たる一本にしたるこの簡潔上人に接する思ひあらしめ、その嫋々たる餘韻は讀む者を法悦の彼方にひき込まずにはおかない。

◆發行所 法然上人鑽仰會◆



◇淨土 第二卷第四號 四月號 目次◇

・表紙……日本旅行協會
・扉・目次カット……青柳喜兵衛

說苑 花祭り……文學博士 高楠順次郎……（二）

宗祖を偲ぶ 「春」と法然上人……文學博士 矢吹慶輝……（九）

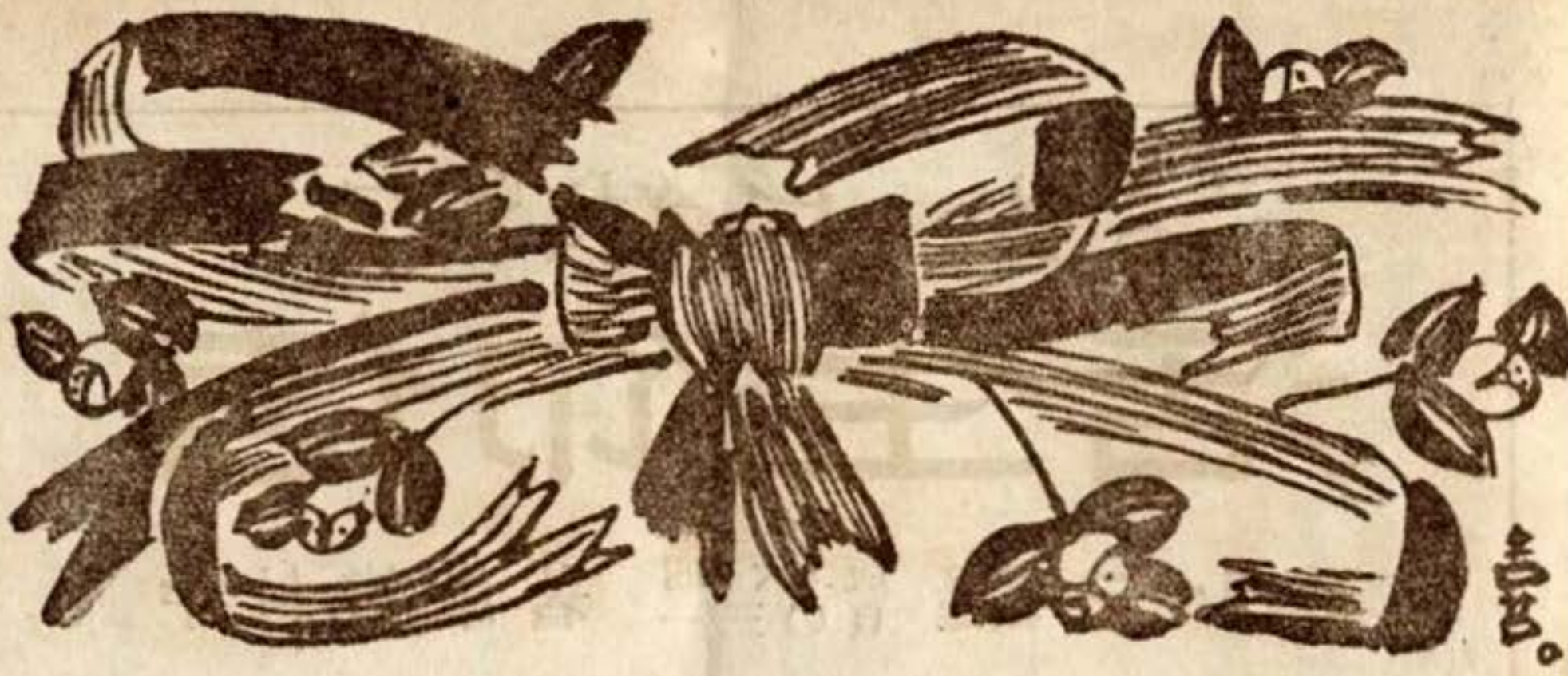
修養講話 身を捧げゆく……眞野正順……（一三）
―香を献げる心（第二）―

隨想 無病長生富貴修養の食物……醫學博士 二木謙三……（二五）

三來夜話 佛に由つて強し……梅原眞隆……（二六）
佛緣無窮……大島徹水……（二八）

趣味讀物
迦毗羅王家の二婦人……岩野喜久代……（三〇）
灌佛會と習俗……代田重雄……（三〇）
影法師を見つめながら……吉水辨道……（三六）

日本名僧譚 畫僧月僊……江藤澂英……（三四）



知恩院門跡 岩井大僧正の生立……本誌記者（三四）

◇稀代の怪力武士……（二五）
◇信仰相談……中村辨康（六〇）
◇處世川柳……編輯部選 清水對岳坊畫（三三）

特輯 人生の荒波を超えて

(1) 青年時代を憶ふ……坂本嘉治馬（四三）
—一人一業で進む—
(2) 母の病ひを機縁として……光原修（四五）
—醫學博士吉原りゆう子女史—
(3) 藝道ひとすぢ……福田勝路（四九）
—雲國の生んだ舞姫オリエ・津坂—
(4) 世界的提琴製作家……瀧川一郎（四一）
—宮本金八氏の奮闘記—

阿彌陀經講義 正しい信仰……中村辨康（七三）

歌壇……興謝野晶子選（七一）
俳壇……（三九）
編輯後記……（八〇）

趣味談 蓮生問答……岡本綺堂（二八）

大衆小說 遣唐船異聞（吉田貫三郎畫）……小島健三（六三）

法然上人の
信仰生活

中村辨康著　四一六版　一三〇頁　定價送料共　三十四錢

これぞ光明！　時代の悩みを一身に背負ひ、精魂をつからしめて、求めに求めた巨人が求道生活の跡！

現代日本人が擧つて求めてゐるものは現實の生活に確りと根を張つた正しい信仰である。それがこゝにある。宗教を特權から解放して正しく民衆の上に齎らした巨大無双なる聖、我らが祖師法然上人の辿り給ひし信仰の道程こそ、現代人の求める。この書には、上人が萬人と共に惱み求められた求道、信仰の御生活を軸とし、それを廻る時代の種々相を描いて、何人にも納得の行くやう新切丁寧に說かれてある。讀んで得られよ！　正しい信仰を！

次　目

第一　求道生活　一第一期求道生活——求道の動機、恩讐の彼方へ、善提寺での生活、上洛の道すがら。二第二期の求道生活——叡山の出家生活、功德院の學問生活。三第三期の求道生活——讀書三昧の生活、叡空上人との接觸。四第四期の求道生活——碩學歷訪の旅。五第五期の求道生活——再び讀書生活へ。

第二　信仰生活　一入信時代の新生活——强い自己反省、萬人を包む人間反省、開宗の根底。二開宗時代の生活　山を下つて京の町へ。三專修念佛の生活——信仰を萬人の胸へ、集つて來るあらゆる階級、偉大なる人格の力、大原勝林院の信仰問答、全佛教の再認識。四迫害受難の生活——三十年氣が付かなかつた恨み、具體化して來た迫害、弟子の罪を負ふて、逆緣を順緣と見る、死生を超へた信仰の力、配所から再び京へ、死後まで續けられた迫害、宗教の極致。法然上人年表

◇發行所　法然上人讃仰會◇

淨土

四月號

たとひ餘事をいとなむとも
念佛を申し〳〵これをすると
思ひをなせ
餘事をしし
念佛すとは思ふべからず

法然上人法語抄一七〇

花祭り

文學博士　高楠順次郎

花祭の藝術化は、まだ容易にものにならないやうである。若し刀筆に上るとするならば、これが文筆に上らないことはない。要は、花祭が藝化され得るか否かと云ふ問題に歸一するのである。

先づ花祭に關する資料を審かにし、その藝術化し得べき方面を考案してみやう。

花祭の藝術化は、勿論三方面に於て行はるべきである。

一　佛誕生前における天上の光景

第一は花祭の文藝化である。併し、文藝としての花祭の描寫は容易の業ではあるまいと思ふ。

佛は釋迦如來として印度に顯るべき身を以て、先づ都率天の內院に菩薩として位して居られた。梵天　帝釋など多くの神々を集めて會議を開き、何時、何れの處に、何れの家に生るべきやを評議された。

第二は花祭の美術化である。佛の誕生を繪畫に顯して石の美術としたのはサンチーにもある。

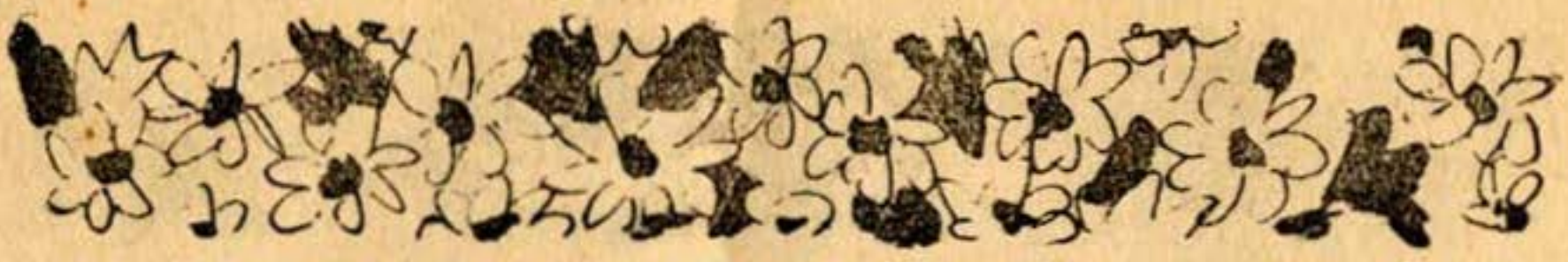
第三は花祭の劇化である。これは誕生が自然の光景であるだけ、隨分困難な業であらうと信ずる。

この三方面に於て、それ〴〵の藝術家が、各々その特技を發揮して、佛誕生の場面を藝術となすことに一段の努力を拂はんことを希望して止まないのである。

花祭の藝術化は至難の業には違ひないが、若しこれが劇となるとすれば繪畫にもなり、彫刻にもなるわけである。

二　摩耶夫人　夢の光景

天上の會議に於て選ばれたルンビニ皇后は、雨期近き夏の夜、紅燈の下涼しき、寢室に眠りに就かれ、宮女は葉扇を以て皇后を扇ぎつゝありたるに、皇后は何事にか驚ける模樣であつたが、驟かに微笑せらるゝ如く見えたから、宮女は皇后を呼び起した。后は目を醒まされ今、天の一方より五頭の白象が安らかに降り來りて、我に近づくよと見、



且つ驚き、且つ喜びし一夢を見たと仰せあり。それより身重となれた。

三　太子の誕生

胎内五位の生長は順調に進み、摩耶夫人の生國天臂城に近き離宮、後にルンビニ皇后の村と名づけらるゝ處の御苑に身を養ひたまふ。

印度の風俗に從ひ日々の洗浴を爲さんとて、園の西南隅の蓮池に至り、池畔の廻廊の石段から池の中に降り立ち、水に入り洗浴したまふ。その時忽ち産氣づきたまひ、急き水を出で北方産殿に向ひたまふ。漸く二十歩を進みたまひしも、もはや歩行に耐へず、路畔に花咲き滿てる無憂樹の枝を捉えたまひし時、右の脇より太子生れ出でたまふ。これに梵天は白氈布と以て太子を受け、雌雄の大象(或は大龍)來りて、温涼の水を湛え、太子に灌ぎ沐浴せしむ。太子は靜かに壇上に降り立ちたまひ、東西南北に向つて各七歩づゝ進み中央に還りて、右の手にて天を指し、左の手は地を指し、高聲に宣言して、

天上天下。唯我獨尊。三界皆苦。我當レ安レ之。

と言はれた。これを『四方七歩』の宣言と名ける。

四　ルンビニ皇后の薨去

大摩耶夫人は、產後の肥立悪しく、七日の間、御惱みありて、醫藥功なく遂に薨去あらせらる。佛を生みたまひし不思議の靈力を偲び、摩訶摩耶(大幻力)夫人と諡せられたものであらう。薨後、夫人は忉利天界に止住せられた。佛は母の爲に三ケ月天上に昇りて說法されたと傳ふ。

五　阿私陀仙人の預言

當時　雪山に住みし阿私陀仙人は、太子の誕生を知り弟子那羅陀仙を伴ひ、王宮に參じ、太子の相好を拜せんと言上す。父淨飯大王は殊の外喜びて太子の容貌を相せしむ。仙人は太子を見てその瑞相に驚き、

太子世に在さば轉輪聖王となりて五天を治めたまはん、若し世を捨てたまはゞ法王として四民を救ひたまはんと云いて、祝福の辭を述べ、潜かに涙を流して悲んだ。王に「何故に涙を流すか」と、問いたまふ。仙人は「我、年已に老い、太子の說法を聞くに至らず、故に、悲しみに耐えず」と申上げた。太子は後に自己の說法を『轉法輪』と名けられた。阿難が佛の葬法を尋ねた時にも、轉輪聖王の葬法を以て葬れと仰せありしを見れば、佛自身も精神界の轉輪聖王を以て自任せられたものゝやうである。

上に示した五項目は、「花祭」に關する資料であるが、尚これに連關して諸般の注意すべき事實がある。これを一通り列擧して見やう。

六　古彫刻に見ゆる表現法

托胎　摩耶夫人の横臥せるに、上空より白象の降り來たる彫刻〔南傳大藏經第二十八卷、小部經典六2、3〕

降誕　摩耶夫人が無憂樹の枝を捉へ、右の手を擧げたまふ時、右の脇から太子生れ、一人白布を以て太子を受け、一人は夫人の體を支えつゝある犍陀羅彫刻〔同上4〕尚、佛音三藏の誕生傳說は、上示の說話よりは、相當に差異があるから注意を要する。

灌浴　太子誕生の太子の像なくして描寫したものがある。摩耶夫人、中央の蓮華の上に立ち、左右より雌雄の象、鼻より水を吐き夫人の頭上に灌く。龍象も亦蓮華の上に立つて居る。蓮華は賢瓶〔黃金の水瓶に恒河の水を容れたるもの〕より生え、花の開敷せるもの三輪、これに夫人と龍象とを立たしめ、更に、三輪の末敷の蓮があある。これはバルフートの古彫刻であるから佛像がないのである。夫人の頭上に水を灌くのも、實は生れた太子に灌く意味であるが、佛像を示さないから夫人に灌ぎかけて居る。或は、夫人の左手に末敷蓮を持つて居るのが太子であるかも知れない。佛像なき佛傳には、何時も單に一輪の蓮華を以て誕生の佛を表してある。〔筆者著『人文の基礎としての佛教』供養相第二雙龍灌頂圖〕

七　『花祭』の花

古代――阿育王時代から二百年ばかりの間――は佛傳を彫刻しても、曾て佛の像を畫かない。卽ち、無佛像の藝術時代である。但し、これは小乘佛教に限ることである。佛は涅槃に入り不可見相に入られた。これを形容に顯はし彫畫に示すのは不法だと云ふ、極めて形式的の考方から起つたことである。これが西曆紀元年代頃から起つた犍陀羅美術となると、自由に佛像を描寫し、有佛像の佛傳が顯はれて來る。大乘の理想主義が顯はれて、信者自身の理想で佛の相好を畫き、在世の佛の實相や、涅槃後の不可見相などには頓着なく、佛の儼容を畫いたからである。

蓮華　誕生佛は、無佛像の時代に於ては單に蓮華を以て示してある。一輪の蓮華が壇上に乘つて居るのは誕生の佛で、決して蓮華の飾りではないのである。この意味で古代に於ける「花祭」の花は、蓮華であつたに相違ない。我國にて花御堂を「野蓮華」の花にて飾るのもその意味であらう。これは夫人が、蓮の池に浴せられし時生れ給ひし事實より見て、極めて自然である。佛の不思議の誕生を蓮華で表はすから、凡夫の佛と成るのは一層不思議であるとして、西方極樂に生るゝ九品の往生を蓮華にしたものである。

無憂華　無憂樹の花の下に誕生ありしと云ふことは、多

分佛普三藏の『本生話』の序文から始まつたものであらうと思ふ。佛普がこの序文を著譯したのは、西紀元四二〇年頃である。殆ど同じ時代に印度に旅行した、晋の法顯三藏は稍精しく藍毗尼園のことを書いて居るが、單に「華樹」と云ふのみで無憂樹とはしてない。それが玄奘三藏となると「無憂樹」の枯木があるとしてある。出產には無憂華の名は極めて適切であるから、これを特に記するやうになつたものであらう。

八　右脇よりの誕生

婆羅門教の『吠陀』經典に依れば、造物主の神が人間を造る時、造物主の頭から生れたのが婆羅門族、脇より生れたのが王族、胎から生れたのが農商民族、足から生れたのが奴隷族だと云ふ。これは先住印度民を奴隷とする口實を經文で裏付けたものであるが、印度では確定した傳說であるから、印度人は「穢身は王族でない」と云ふに相違ない。殆ど裸形の印度婦人では、花の下で右の手を擧げた時、右の脇から生れるのは自然であるが、裸形を忌む支那へ來ると禁物であるから、摩耶門の石窟の彫刻では、夫人の右の袖の中から太子が首を出して居られる。百濟の聖明王が獻じたと云ふ宮中御物の摩耶夫人も、その袖の中から佛が出生せられて居る勢が看取さるゝ。佛陀耶夫人雖產の爲に醫師が切開を行ひ、脇から取出したのであらうと言つたものがある。さう固執しては佛傳は分らなくなる。

九　雙龍と雙象

梵語では、「龍」と、「象」とは同じ文字で、「那伽」と云ふのである。優れた學匠のことを「龍象」と云ふのもこの字で、「優者」と云ふ意もあるのである。併し、根元は雙象であることは申すまでもない。六牙の白象として托胎した佛であるから、父母の象が水を灌くのは極めて自然である。印度でも双龍としたこともあるやうであるが、殊に象の居ない支那に移つてからは、双龍水を吐くとあるは是れ亦極めて自然である。花御堂に双龍を造るのも是れが爲である。

十　四方七歩の宣言

四方に向つて七歩づゝ歩まれ、還つて天と地とを指されたのは、六方に向つて宣言せられたのである。殊にその七歩と云ふのは、二十八宿の月の宿りを示したもので、一月の時間を示したものである。六方處は空間を示し、四七歩は二十八宿の時間を示し、四方に向つて宣言せられ、且水遠に向つて宣言せらるゝ意味がこの四方七歩の宣言である。これにも異說があつて單に七歩としたのもある。若し七歩とすればこれは一週間を意味したので、同じく時間に向つての宣言である。

三來夜話

佛緣無窮

……坂根彌兵衞翁（三）……

增上寺法主　大島徹水

蔭の力

明治二十一年のことである。その頃は翁も壯年の働き盛りに達し、店は益々隆運に赴いてゐた。——相變ず翁の日課の第一頁を飾る佛閣への朝詣で。その朝詣で毎に、最近翁の心を重苦しい悲しみで壓するものが出來たのであつた。總本山知恩院の衰微がそれである。

當時の知恩院は莫大な寺僧のため、某銀行から差押へをうけた。そして院寺務所には事務員一人として踏み止まる者がないといふ哀れな有樣だつた。その善後策のため、はじめて院大廣間で寄合ひを行うた人々は、俗間の信徒有志達（翁はその中の一人である）であつたが、食事時に至つて米屋、豆腐屋、その他の商人すべてが現金商ひによらなければ品物を入れぬといふ事實を知つて、一同は今更のやうに驚きあやしんだ。「これが苟くも一宗の總本山と呼ばれる寺院の現實の姿であらうか？」——寄合ひが終つて、呆然とした心で山門に歩み出た翁の眼にグッと映つたものは、そこの門柱に貼りつけられてゐた競賣札だつた。

「あゝ、元祖樣に對して濟まぬ　濟まぬ——」遂に耐へかねた翁は、暗然落涙したのである。

そのとき、翁の傍らにゐた知人の某は、その翁の衷心からの悲慨の情に動かされ、

「よろしい、こんな紙は私が破りませう。しかし破れば私は牢役に服さねばなりませんから、家の面倒はよろしくお賴みします。」

かう云ひ捨てて、直ちにその貼札を剝がしてしまつたのである。そこへ偶然時の判事が

來合せたが、判事は翁達の信仰の至情に感じてか、その違法行爲を眼にして別に詮議もせず、誰かのいたづらぐらゐに濟ませて取調べせずに通りすぎた。

翁の知恩院復興の意氣は、それから愈々燃え上つて行つた。文字通り寢食を忘れた翁の盡力はこゝに始まつた。同志十人、固く手を取つて信徒、有力者間を說きまはつたのである。翁達の本山恢興の熱意が如何に眞摯なものであつたかは、或信徒が翁に次のやうに語つたといふことからも裏づけ出來るであらう。

「元祖樣の遺跡たる本山を絕やしてはならない。それに比べれば私どもの家など問題でないわけです。たとへ私の家がそのためにつぶれやうとも、本山のためにはよろこんで出來る限りお盡しいたしませう。」

翁はかうして自ら陣頭に立つて働きまはつたのであるが、しかし翁は自己を表面に出すことをいつも恐れてゐた。自分が主になつて仕事をするのではない、自分はたゞ如來のお力で働かして戴いてゐる――この點にも翁の面目の一部があらはれてゐる。だから本山で開かれる信徒集會の席上などでは、翁は大抵人々の背後にかくれて、人々に禮を云ひつつひとり靜かに恢興の一日も早きを念ずるといつた風だつた。寡言實行、所謂蔭の力を身を以て示してゐたのである。隨つて信徒間で世話人をつくつて知恩院一切の會計切盛にも、翁は勿論その中の一人に加はつてゐたが、表向きの役割を辭退した。けれども自らの發言が必須の場合には、翁は斷固ゆるぎない信念を披歷した。――知恩院の財政建直しに目鼻がついて來た頃、會計一切を本山側に移しては、といふことで信徒間に異論が涌いた。その時翁は、「本山のものは本山にお返ししよう。」と主張して、素直に讓步した。その代りとして、記念のため本山から華頂講の設立を認めてもらつたのである。現存の華頂講は實に翁の世話で生まれたものであるが、知恩院擁護のため尙力强いものであるかは、爰に贅言を要せぬであらう。

大島僧正

この華頂講成立については、翁とともに知恩院復興に努力した山田上人（清淨華院法主）が、翁を目して、あれこそ眞の信者の働きであるとつねに感心せられてゐた。上人が清淨華院建立の際にもこの因緣で翁はその世話人になつた。

鹿谷法然院、北野轉法輪寺、等の復舊事業のときもみなさうであつたが、翁の世話の仕方は、前述のやうにどこまでも自分といふものを出さず、寺院側の意の通りに動いた點に

誰も眞似の出來ない特徴をもつてゐる。法然院は坂根家代々の歸依寺であつた關係上、翁も絶えず參詣して世話をしてゐたのであつたが、翁のその無私の態度に却つて法然院側からあらゆる點を翁に任せきりといふ風になつたのである。殊に轉法輪寺の場合は、淨土宗前管長山下現有上人の住せられた頃には門内の鐘樓の鐘まで賣りに出したと云ふくらゐの荒廢ぶりで殆ど手のつけやうがないほどになつてゐた。そして本尊だけを維持すれば悔ないと精進せられてゐた山下上人の許に走せ參じて、翁は心からなる奉仕をつゞけたのである。上人の御食事の世話から堂宇の修繕、財政の面倒に至るまで一切に亘つて心を碎いた。現に坂根家の佛間を飾る上人の夥しい遺墨は、當時の上人の感謝の紀念品にほかならない。

功德は多勢で積む

然しかうした奇特の信仰者にも身内の不幸はいつ訪れるか分らない。

翁には彌太郎といふ一子があつた。この父にしてこの子ありの例に洩れずまことによく出來た息子であつた。孝行で頭腦が優れ、その頃京都で一つしかなかつた中學校でも拔群の成績をのこしてゐた。のみならず父の感化で幼少の頃から信心篤く、寺詣りもすゝんで行つた。ところがふしぎなことに、寺院で說教のある場合などは、聽衆に交つてぢつと耳を傾けてゐるよりも寧ろ本堂の側廊に立つたまま、境内で戯れる兒供達を制すといふやうに、生得のやさしい心根をもつてゐたのである。明治二十八年、京都博覽會が開催された折、書記の役を勤めてその仕事振りを大いに認められ、將來の大成を人々に見込まれたのであつたが、間もなく若い身空を病床に横へねばならなくなつた。下京の本光院の一室を借りうけ姉上に懇に介抱されながら、阿彌陀經讀誦、念佛相續の靜かな病める日々を送つてゐたがつひに大往生を遂げたのであつた。……

翁はこの量り難い逆緣に逢うて、自失するところなく益々如來の慈悲を信じつつ、その志を增して行つたのである。關通上人の緣から安樂寺及び圓通寺の世話、東山の西光寺に二百人の同勢より成る合衆念佛會の發起等がつづいてなされた。

また翁は度たび高野に詣でてゐたが、高野にある法然上人の墓の荒ぶれた樣に心を暗くし、有志を募つてその修繕を成し遂げてゐる。

「よし自分一人で出來ることであつても、いいことには多勢を誘つて當らなければならない。」これが翁の日頃のモットーであつた。一つの事業に要する費用の大部分を自分一個で出資しうるとも、僅かの部分を志ある人々に殘して、多勢發起の事業とするといふのである。

「功德はみんなで積むものだ。」

翁は口癖のやうに云つてゐた。（つゞく）

「春」と法然上人

文學博士　矢吹慶輝

(一)

法然上人は今茲昭和十一年を距る八百四年前に降誕されたが上人の一生涯中、その大事件の多くは春に起つた。先づその誕生が長承二年四月七日で卯の花の咲く頃であつた。『傳法繪』(善導寺藏)にも『法然聖人繪』(川崎家藏)にも、美作地方の田植舞ひの圖が描かれてゐるのが春にふさはしい叙景である。それから入滅が建暦二年の春まだ淺き一月二十五日であり、日本の宗教史上極めて重大な事件であつた、淨土宗の創開が、承安五年春三月、花の國日本の彌生の盛りであつた。

「氣候れては風、新柳の髪を梳り、氷消えては波、蒼苔の髭を洗ひ」、河には剣る處、水嵩を増して、「春水四澤に滿つ」る春景色は、何となく、佛教を日本民衆のものとした、いはゆる民間佛教の開拓者、圓光大師法然上人の圓滿なる人格を象徴してゐる。

上人が九歳で父、時國に死別したのが、三月十九日（或は十三日、秘傳抄）で、上人をして他日、日本佛教の改革者としての使命を果さしめた遺言のあつたのも春であつたし、十五歳で

初めて都に上り、途上、攝政忠通に遇はれたのが久安三年二月十三日であつたし、開宗後濃州櫻ヶ池で元の師匠、皇圓阿闍梨に法施されたのも治承元年（四十五歳）の春であつた（翌誕三〇）。大原談義で南北の碩學數十人に對し、淨土開宗の立教宣言をなされたのは文治二年（五十四歳）の秋であつたが、それはこの年の春、顯眞が上人を坂本に請じて、その教義を問うたのに由來したものだし、俊乘坊の請ひによりて東大寺で三部經を講ぜられ、南都で開宗宣言をなされたのも建久元年（五十八歳）の春であつたし、後白河法皇の御臨終の善知識として召されたのが建久三年（六十歳）二月廿六日であつたし、三昧發得と選擇集の述作とは建久九年（六十六歳）の春であつたし、關白兼實が上人を拜して落飾して圓證となつたのが建仁二年（七十歳）一月末であつたし、住蓮安樂の死刑に處せられたのが承元元年（七十五歳）二月九日で、同二十八日土佐に配流となり三月十六日に配處に赴かれたが、それも春の出來事であつた。入滅が一月であつたがため、元祿十年の圓光大師の勅諡以後、五十年毎に賜はつた加諡は皆また春であつた。

（二）

上人が八十年の生涯中、その開宗は人生の初秋にも譬ふべき四十三歳の壯年期であつたが、上人にも少青年期の春があつた。人生の春たる少年時代から青年時代までの經歷は、九歳で父に死別し、十五歳で叡山に登り、十六歳で三大部を學習し、十八歳で西塔黒谷に遁世し、二十四歳以後南都、醍醐、御室に諸宗の學匠を歷訪されたことが判然してゐるが、諸傳に青年僧法然房源空の求道の熱意と苦慮と一大決心とを物語つてゐるものが少くない。中でも十八歳で黒谷に退き叡空の室に投じた時「我幼稚の昔より、成人の今に至るまで、父の遺言忘れ難くして、とこしなへに隱遁の心ふかき由」を述べられた中にもその眞摯さがありありとあらはれてゐる。この時叡空は「少年にしてはやく出離の心をおこせり。まことにこれ法然道理のひじりなり」と感嘆して、法然房と名を改めさしたことは周知の事である。「われ聖教を見ざる日なし、木曾の冠者、花洛に亂入の時、唯一日聖教を見ざりき」とあるのは、木曾義仲が治承四年に砥波山に平家を破りて京に亂入したのが、壽永二年七月で、上人五十一歳の時であつたから、この述懷は五十餘歳後であつたらうが、その青壯年時代に「智者」と讃められ「智惠第一」と稱へられながらも、名譽や利慾以上に眞の道にいそしまんとして「よろづの智者に求め、諸の學者にとぶらひしに、教ふるに人もなく、しめすに善もなし」の苦悶に苦悶を積まれた血みどろの心の姿が窺はれる。上人は和歌に秀でられたので、今も『夫木抄』や『續千歳集』や『續後拾遺集』などにその詠歌が散見して

ゐるが、中に「かりそめの色のゆかりの戀にだに、あふには身をもおしみやはする」との一首は、勿論、信佛の心の到らぬことを策勵されたものだが、上人にも青春期がなかつた筈がない。だから上人の教へは壯年老年の人は勿論、血に燃ゆる青年期の人々にも熱火の傳道が試みられたのである。果せるかな、上人の教團には若人が頗る多かつた。時代の青年に、胸底からの共鳴りを感ぜしめた人間法然を看過してはならぬ。そこには汲めども盡きぬ全佛教史の「何處へ往く」の撰擇の方針が示されてゐた。

(三)

元久元年の七箇條起請文（二尊院文書）に署名してゐるのが信空以下二百人であり、上人の門下或は弟子分で略ぼその名の判つてゐるのが凡そ三百人程ある。その內、信空は上人よりも十三だけ年下で、上人の弟子となつたのは三十四歳の時であつたが、弱冠にして夙に上人に歸依した。文筆に長ぜるがため進士入道と呼ばれ、撰擇集述作の際の執筆者で、上人よりも二十歳年下の眞觀房感西は四十八で歿したが、上人に師事したのが十九歳の時であつた。平重盛の孫、師盛の子、勢觀房源智は十三歳で上人の弟子となり、常隨給仕十八年であつた。淨土宗第二祖鎭西上人は三十六歳で宗祖の門下となつたが、二十九歳で既に油山の學頭であつた。九品寺流祖　聲明房長西は十九歳で上人の門下となり、西山派祖、善慧上人（證空）は十四歳で上人に師事し、證空は上人四十四歳の時に生れた。道遍（澁屋七郎）は秩父の一族で二十五歳で弟子となり常隨給仕數年に及んだ。

高倉天皇が無位無官の上人から戒を受けさせられたことは史上稀有のことであつたが、時に御歳十六歳であらせられた。凡そ上人の傳記から詳細にかうした史蹟を捜ることは他日に讓り、終りに唯だ一つ本三位中將平重衡の心事を附記する。重衡は文治元年六月、廿九歳で、奈良佛敵のために木津川で斬られたが、その前年の壽永三年二月、一の谷で捕虜となり、入洛して上人に謁し、その教化を受けたことは勅傳その他で炳かである。重衡は奈良に渡される前、一時鎌倉に迎へられて頼朝から好遇された。一日頼朝が侍女千手及び工藤祐經を遣はし酒肴を饋つて慰めた時、五常樂を聽いては、これ後生樂だといひ、皇聖樂を奏してはこれ往生樂だといつた。夜、閨にして宴を罷めてから千手を相手に、「燭は暗し數行虞氏の淚、夜は深し四面楚歌の聲」の一曲を朗詠したのも哀れだが、奈良で斬られる時も近邊から阿彌陀佛像を迎へて、緣の繩を手にしながら稱名の中に首を延べて討たれた。三十に滿たぬ平家の壯年武士が上人の教へに歸依した心境は同時に時代の若人の心持であつたであらう。

身を捧げゆく

——香を献げる心（第二）——

眞野正順

「念々に戒と定との香を焚燒して」

(一) 定の香

靜かな林の中などにゐて、じつと目をつぶつて、微かな水の滴る音を聽いてゐますと、我れ知らず、心は無念無想となつて、何やら知らぬ深いもの、中に落ちてゆくやうな氣がしてきます。朝まだき閑かな室に坐つて、一爐に立ちのぼる香の煙を前にして、じつと頭を垂れてゐる時に、おのづから滲渡つてくる清らかな氣

持も、それに似てゐます。かう云ふ心の境地を佛教では「定」と申します。

人生のさまざまな經驗をくぐりぬけて來た人は、何時もかう言ふやうです。

「本當の仕事にとりかゝる時には、心の亂れが一番禁物だ。先づ雜念を去つて心はじつと鎭められてゐなければならぬ」

これは、人生の深い經驗の中から出て來たほんとうの言葉でせう。たとへばあの深山の、湖の小波も立てず澄み湛えられた靜かな姿のやうに、この自分の精神が一處に集注され切つた後にこそはじめて躍然として、たとへば岩ばしる瀧津瀨の如き、壯絕なる活動に移ることが出來る。それが人間の生命のもつた性質です。人生を眞に生きる爲に、人は屢々己れを空しうすることが大切です。偈文に「定の香を焚燃す」とあるところの意味は、まづこの事です。然しながらたゞ夫れだけではない。

○

まことに善く充實して、この一生を生きて行きたいと希ふこゝろは、誰しも皆な一樣に聽くところのものでせう。この自分の一歩々々があやまたず、常に僞りならぬものを踏み、顧みて、ふたゝび悔ゆることのない充實した生活を、この身の上に遂げてゆきたい。

それは私共の胸に、絕えず聽くところの切なる願です。それ故、私達は、屢々發奮して、自己を改造しようと足掻きます。この何時か昏つて來てしまつた自己をゆり動かし、わが眞實と思ふ道に、躍然として馬首を立て直してゆくために、屢々發奮し、屢々奮起し、努力するのであります。

然しながら、この樣々の努力は、果してよく其望むが如く遂げられて行くものであらうか。

顧みて見ますと、今日に到る間、私共は、幾度か、發奮して自己に鞭打ち、新たなる生活に躍り入らんと企てた事であらうか。然しながら、今にして、其跡を思へば、企圖の多くは、果敢なくも自身の上に崩れ落ち、そこには、たゞ嘆かはしき舊き宿習のまゝの自己のふたゝび横はるを見出すに終つてゐるのではなかつたでせうか。

眞實の道を胸に畫き、こゝに斷乎として新らしく生れ更らんと決意したはじめは、誰れでも、その肅然たる決意の中に一種の爽快味を覺え、乾坤ともに新らたに、こゝに新らしき自己が、誕生してくる喜ばしさを覺えます。然しながら、やがて、日も過ぎ月も過ぎ、若干の時間が流れ落ちてゆく間に、いつか初めの感激は薄らぎ、興奮も消えて、何時知らず、はじめの惡癖は——たとへば、薄暗い燈座の上に、あちこち、かつて睡りし蠶兒が白い頭を

もたげて來るやうに——次第にめざめ來て、再び凡墮なる舊來の自己に立ちかへつてしまふ。誠に言ふに易くして、遂ぐるに難きものは、自己の改造です。

然も、たま〳〵決意剛くして、企てた如き改造を自己の上に遂げ得たと思はれる人にしかも、今度は、何かしら、妙に硬ばつたやうな人格に變形して、その爲すことに、冷たい理の角が立ち、常に、何か、切迫つまつたやうな情の潤ひの乏しい人に變つてくる。云はゞ、理屈の板を背負つたやうな人となつて、他人に對しても、また、自分に對しても、絶えずその本然の自然の情と軋みあつてゐるやうな生活が現はれてくる。どうも、本當に、素直に自然に生れ更つて來ることがない。無理をすれば、ねじけてゆく。

○

深く考へて見ますと、私共がしば〳〵犯すこの失敗は、思へばむしろ、當然のことであつた樣です。かゝる自己改造の試みの中に、私達は、いつも、こゝにある「自分」といふ考へをしつかり中心に保ち、それに依つて、自分の改造を企てゝゐます。佛教によると、誤はまづこゝに其の第一の原因を横たへてゐるのであつたのです。

眞に生きることは、確かに人間の最も大切な大道であります。然しながら、それはたゞ不用意に、直ちにこの自己を中心として生きようとする事によつては、斷じて實現することはありませぬ。なぜならば——前講にも述べましたやうに——かく企てる時人は「自己」と思つて、自己ならぬ「自己の灰骸」を摑んで出發してくるからです。こゝに自己と思ふ「自分」は、實は眞に生きつゝある眞實の自分ではない。それは、眞實の生命が燃え殘して行つた灰の跡であります。みづから「自分」と思つてゐる自分は自分ではない。灰である。過去の自分が此處に堆く殘して行つた灰の集積である。眞の自己は目には見えない。

燃えつゝある焰の一定の形のないやうに、こゝに眞に生きつゝある自分の當體もまた一定の姿はない。姿と定めずして、然も、綿々として休む間もなく燃え續きつゝ、こゝに其痕を殘してゆく。これが、私共の生命の姿。

ですから、人は屢々自己の當體を把えんとして、却て自己の過去を摑みます。灰骸を摑みます。何か形を摑まないと氣が濟まぬからでせう。それ故、今こゝに眞に生きんとして立ち上るにつけても、人はしば〳〵自分の灰骸を握つて立上ります。そして、後生大事にそれを護りながら、搔まぜたり、引伸したりする。然し、灰はいくら搔廻しても火とはならない。そのやうに、この自ら思ふ自分は、いくら引廻して見ても、本當に其全體をあげ

てはげしく急轉回するやうな爽然たる飛躍が現はれて來る筈がありません。燻ぶつた火の灰を、火箸で掻けば、一時はパッと燃え上る時もあります。然しそれは一時の輝きであつて、やがて再び消えて行かねばなりません。新らたに更生せんとする人もまた、自己の灰を掻まぜてゐる限り、ぐる〳〵と廻つて、結局ふたゝび同じ所に歸つて來ねばなりません。

まことの生命を獲るが爲には、この自己を中心としてはならない。眞に生きんが爲には、ちやうど、あの香の火の、絶えず、白い灰をふり落して行くやうに、この目前の「我」をふり捨てゝ行かねばなりません。灰はふり捨てられてこそ、火は新らしく燃え熾る。人は己れに死してこそ、はじめて、眞に生きることが出來るのです。

法然上人は、生涯のあひだ、繰返し「愚に還れ」と說かれました。云ふ迄もなく上人は、其知識の該博、頭腦の明徹を以て、遠く南都北嶺にわたつて「智慧第一」の譽れを一世にほしいまゝにした方でありました。かゝる明敏な學才を以て刻苦の末、遂に到達せられた人生眞實の道は、計らずもこの「還愚」の一道にあつたのです。

「愚に還る」には、この現在の自分に聚まつてゐる外的な一切のものを捨てゝ、まつたく赤兒のごとき、何物も持たぬ、純白謙虛な心に還つてゆく事です。萬卷の書を讀研して獲た知識も、さまざまの境地をくゞり脫けて來た豐富な經驗も、營々として汗に塗れて積み上げた財富も、おもへば、眞の自己にとつては、外部から附着した外物にすぎない。かゝるものに就て自己を見るは誤である。かゝるものに自己を見てゐる間は、まことの自己は却てたゞ萎縮し衰弱してゆくであらう。自己はかゝる處に存しない。眞實の生命はむしろそれを踏んで、立つてゐるのである。「還愚」によつて純乎、白木に似たる淸白なる自己に、絶えず還つてくること、それが、更生の唯一眞諦であるのです。また生命の眞道であるのです。

かくの如くして、ふたゝび淸白、空の如き眞生命にかつた時、そこに初めて人は生命のありのまゝなる玲瓏無礙の自在な姿に接し得るでありませう。生命は白き焰のごとく、其姿はない。姿なくて然も確々として、この己れの上に今現に燃えてゐるのです。

こゝに到ると、人は俄然として生命の景狀がこゝに一變してくるのを見るでせう。己が生命は、たゞに自分の上に燃えてゐるばかりでなく、また廣く、所緣ある一切の人々の上にも、燃えてゐる。おのれに燃える生命は、眞にはこの己れならず、また他の一切の人々に燃えて、然も全く同じき自分の生命であつた事を感ずるでありませう。おのれの生命と他の生命と、それが「誠」の窓を

以て互に相看るとき、それは全く同じものであります。さればこそ、至誠を通じては、人々互ひに、五體を投げて互に相嘆き、相感激するのです。

眞の生命は、こだわつて、この獨りなる我にのみあるところのものではない。あまねく一切の空間を通じ時間を通じ、一切處において滿ちて全く同じなのでありませう。人は生命に沈潛すること深ければ深いだけに、その及ぶや聞く、その底やいよ〳〵深いものと感ずるのみであります。

大いなる生命、こゝに相分れて、汝となり、我となる。「自己」とは、むしろ、かゝる大生命の現はれる機緣であり、端緒であるしかない。機緣たがひに相觸るれば、そこに漣を畫いて遠く彼の岸に及ぶ。それ故にこそ一切は「緣起」である。私共の生命とは、たゞ緣起の漣のおこす一つの小さな波でしかない。

されば、まことに生きることの眞諦は、この局少なる自己の灰骸を擲つて、この大いなる生命に突入し同化して、たゞ躍々として生きることの外はない。

大いなる生命の深源。それは「佛」であります。さればこそ、この一身を空に擲つて、ひたすら、たゞ佛へと歸入するそこに、生命をさながらに生命のまゝに生かす眞道が現はれる。ひたすら「佛を念ずる」こと、それはこの外の何事でもない。たゞひたすら我身の全部をあげて、たゞ佛にまかせて行く生活。「己れ」といふものが、すつかり空しくなつて、たゞ天地にみなぎりきたる巨いなる佛の力が溢れるまでに、この小さき自身の意に充ち滿つる生活。そこには、もう己れは無い、たゞある所のものは、こゝにうねりきたる巨いなる生命の大洋の波ばかり。

——この時、自分は全く巨いなる波のうねりに呑まれ無くなつてしまつた筈であるのに、こゝに忽然として、自分は澄み切つて新らしく、爽々しき新生の姿を以て生れ更つてくる。純乎玲瓏として張り滿ちたる精力の自分として、こゝに輝く結晶の姿を現はしてくる。自分は、こゝに初めて、眞實生命の自分に還つたからであります。

「念々に定の香を焚燒して」。そこに語られる深い意味は、すなはちそれは念々に絶えず、大いなる御佛の中に沒入し、そこに生き更つてゆく、この生命道の眞諦と云つてゐるに外なりませぬ。

(二) 戒の香

これは、以上の如く、大いなる御佛の光に沒入して、生命の眞諦に觸れた後の、現生活の規準を示した偈文です。

法然上人の御行狀を拜見しますと、上人は知識を捨て持戒を捨てあらゆる教界の因習形式とすべて一切の自己の計らひを擲つて空白、愚に近き眞純の己れに還つて、ひたすら念佛の生活に沒入せられました。こゝには最早僧も俗もない。たゞ佛光に任せたまの一素人の生活以外には何物もありませんでした。さうではありながら、他面、上人はその一生を通じて、僧の形をとつておられました。さうして、佛の教へ給ふ道德に、出來得るかぎり從ひ行くやうに、努められて行かれました。

この事は、しば〳〵後者の人々の疑謗の種となつております。まつたく自力の生活を捨て、御佛の力に任せ切つた生活であるならば、「戒」を守り道德を積んで、自己を築きあげて行く事は不用な譯であらう。自己の全部を佛に任せながら、一方に於て、戒なぞを守つてをるのは、自力をたのむ賢聖の振舞にまだ未練が殘つてゐるからではないか。これに較べると、かの親鸞上人は全く、「戒」を捨て切つて、一俗人の生活に歸つてしまはれたが、これは更に徹底した行動と云はねばならない。親鸞こそ、百尺竿頭一歩を進めた宗教改革者である、と。

この批評は、一寸聞きますと、確かに一面の道理を含んでゐるかのやうに、私共の耳に響きます。然しながら實は、これは、たゞ「一面の理」であつて、まだ、人生の「全面の眞實」を見た者の深い判斷ではなかつたのです。

議論は拔きにしませう。たゞ事實だけを擧げませう。かうして、一面甚だ徹底したやうに見えた親鸞上人の流れが、その後どんな結果をひき出して來たか、その事實だけを見ませう。

潔く戒を捨て、全く無戒の一俗人になる事を提唱しました親鸞上人の流れは、其後、時を經ると共に、だん〳〵大勢になり一つ團體を形成するやうになりましたが、するとこゝに一つの容易ならぬ問題にブツかる事になりました。それはかうです。人が或る集團を形成するやうになりますと、必ずや、その人達の生活を指導してゆくやうな、現實生活の規範といふものが必要となつて參ります。

これは人間社會として、絶對避ける事の出來ないことであります。この人達も、いくら後生の信心は堅まつたと云つても、さてこの日々の現實生活をなげやりにしておく譯には行かない。何かそれを規則づける規準が無ければならぬ。ところが、この人達は佛教の道德は絶對に擲げ捨てることを其揚言する特色としてゐます。いま目前に何等かの規準の必要が迫つて參りましても、今更ふたゝび、佛教の道德を取り上げる事は出來ない。そこでこゝに

誠に餘儀ない必要に迫られて、遂如上人に至りまして「仁義禮智信」を取り上げて、それを教徒の服膺すべき道徳とする事になりました。然しながら、仁義禮智信は、云ふ迄もなく、儒教の道徳であります。こゝに計らずも、儒教の道徳が、あたかも木に竹がつがれるやうに、佛教信仰にくつつけられる奇觀を呈して來ました。

もとより、この自己の全體をあげて捧げまつる信念と、この自分の「一歩々々の現れ」である日々の生活とは、切つても切れぬ不可離の關係があります。信仰がたゞ心だけで、この實生活に現れて來ないやうなものであるならば、それは空の信仰と申さねばなりません。わが全體とあげての眞の信仰であるならば、それが眞直ぐとこの實際生活に現はれて來なければならぬ筈です。

そして、その道徳は、道徳ならば何でも善いと云ふ譯にはなりません。佛教の精神を實現するためには、また、それに相應した道徳が組立てられて來ねばなりません。なせならば、それは一方から云へば、佛教の精神をこの社會生活の中に實現してゆく道であるからであり、他方から云へば、この道徳は、人がこれを遵守して行く事によつて自ら、佛教の精神を自分に養ひ、次第に佛教の理想に近づいて行く道であるからです。

それ故、佛教には佛教の道徳、儒教にはまた儒教の道徳があります。たとひ形に似たところがあつても、互にその目指すところの精神を異にしてをります。それ故「信仰は是れを取るが、道徳は隣家から借りる」さう云ふ譯には參りません。米國の憲法は、たとひ多少善い處があつても、その僞とつて、すぐ日本の憲法にする事は出來ません。

こゝに、一見徹底に見えて實は「全體的眞實」を踏まへて立つてゐられる法然上人の深い意味が感ぜられます。上人は大いなる佛の光の中に突入するために、一度びは、知識を捨て、戒を捨て、一切をかなぐり捨てゝ己れを空うされつゝも、翻つて既に佛光の中に喜び生くる身となつた後は、その現實生活の一歩々々を佛の教へ給ふ道徳に出來得るかぎり近づけて少しでも實現して行かうとせられました。

信仰は、たゞ己が心の中に喜んでゐるだけならば、それは未だ眞實の信仰ではありません。それは「觀念の念佛」です。まことに輝く佛の生命に喜ぶ自分ならば、その心は、己が日々の動作の中に滲らかに現れ出されて來ねばなりません。

すでに「自己」を全くかなぐり捨て、眞に佛の大生命に任せ奉つたものであるならば、それからの自分は、佛の教へ給ふ生活の道に一歩々々運ばせられてゆくものでなければなりません。たとひ嶮難なる古道には堪へ難き身であるとしても、然も、その出來

得る程度において、一歩々々精神をこの身の生活に實踐してゆくのでなくてはならない。さうであつてこそ、はじめて其人は佛の中に眞に身を任せ切つた人といふ事が出來るのでありましやう。

信仰は、さし降る、御佛の光の中に、汲めども盡きぬ法悦の潮の中に感謝して生きてゆくことでありますけれど、然しながら、この感謝は、やがてこゝに一轉して、この辱じけなき恩德の中にこの身を投げ、御佛の爲めにこの一生の全部を捧げてゆく心となつて來なければなりません。

我身こゝに在つて、蕩搖と今や搖れくる輝ける御力をうけて、ひたすら、只に喜んでゐるだけであるならば、それは誠に、佛の御光の中に入り得たものと云へない。むしろこの拙なき宿習の身をも投げて、たゞ、此の光のために、捧げ盡すといふ獻身が成立つたとき、はじめて、おれは、已れならず、其の生命の中に入りまことの生命と成り切つたものと云ふ事が出來ませう。かくて已れは光り滿つる生命そのものと二つならず、たゞ一如の大生命となり終つて、こゝに、信仰は成就し、はじめの眼目たる眞實一如の生命に生くることが實現するのです。

それは、やがて、頭上に輝き滿つる大生命に生かされながら、この一生の身命のもつ所の一刻一刻を捧げて、かの壯嚴なる佛の世界をこの社會の上に築き上げて行かうとする努力の外ありません。

こゝに同じき生命の分與——親しき同胞のつくる此社會を高邁なる基源に基いてより高く推進せしめゆく聖なる努力、それを通じて佛教徒の溢るゝ法悦は、はじめて、その具體的結晶をとる。かくて、信念の極致は、やがてこの社會の爲に眞に獻身してゆく事と一致し、仰いで輝く佛國土に生き人事を求むる心は、やがてこの實社會に淨土を建立してゆく努力となつて現れ、信仰と現實とは全くこゝに一致してくるのであります。

偈文の最後

『十方三世の佛に供養したてまつる』

の意味は卽ちこれに外ありませぬ。

迦毗羅王家の二婦人（二）

——摩訶波闍波提と耶須陀羅——

岩野　喜久代

（四）

愛子を奪はれて王宮の奥に悲歎の朝夕を送つてゐた摩訶波闍波提と耶須陀羅は、其後釋尊のみ教を聽聞することが重るにつれて、目の前を蔽ふてゐた痴愚の闇が一枚づゝ剝れて行くのを覺えるやうになりました。

ことに波闍波提を驚嘆させたことは、あの人一倍人間的欲求の強い熱情家のわが子難陀が佛のみ法を受けてからは、よく王宮の欲を抑へ、克己修業に專心してゐるいぢらしくも尊い姿でした。

逢ふ度に難陀の面には崇高な精神的要素が增えて參りました。以前惡情に燃えた熱つぽい眼は今秋の水のやうに淸らかに澄み渡り、やるせない思ひに震へた官能的な赤い脣は固く引き締つて、意志の强固を充分示すやうになりました。

波闍波提は我子の僧形を見ると、寂しい大王の心地を察して思はず不覺の涙に暮れるのでしたが又一面には崇高な精神の世界に晏如としてゐる難陀を通して益々み法の道へ心を澄ませるやうになりました。

この思ひは耶須陀羅とても同じことでして、二人は佛の道に參入してよく五戒を守り、四諦十二因緣の教へをも理解して、人生に大きな希望を見出すやうになりました。

かうして信仰が深まるにつれて波闍波提は佛に對する恭敬の想ひに堪へ切れなくなりました。

灌佛會と習俗

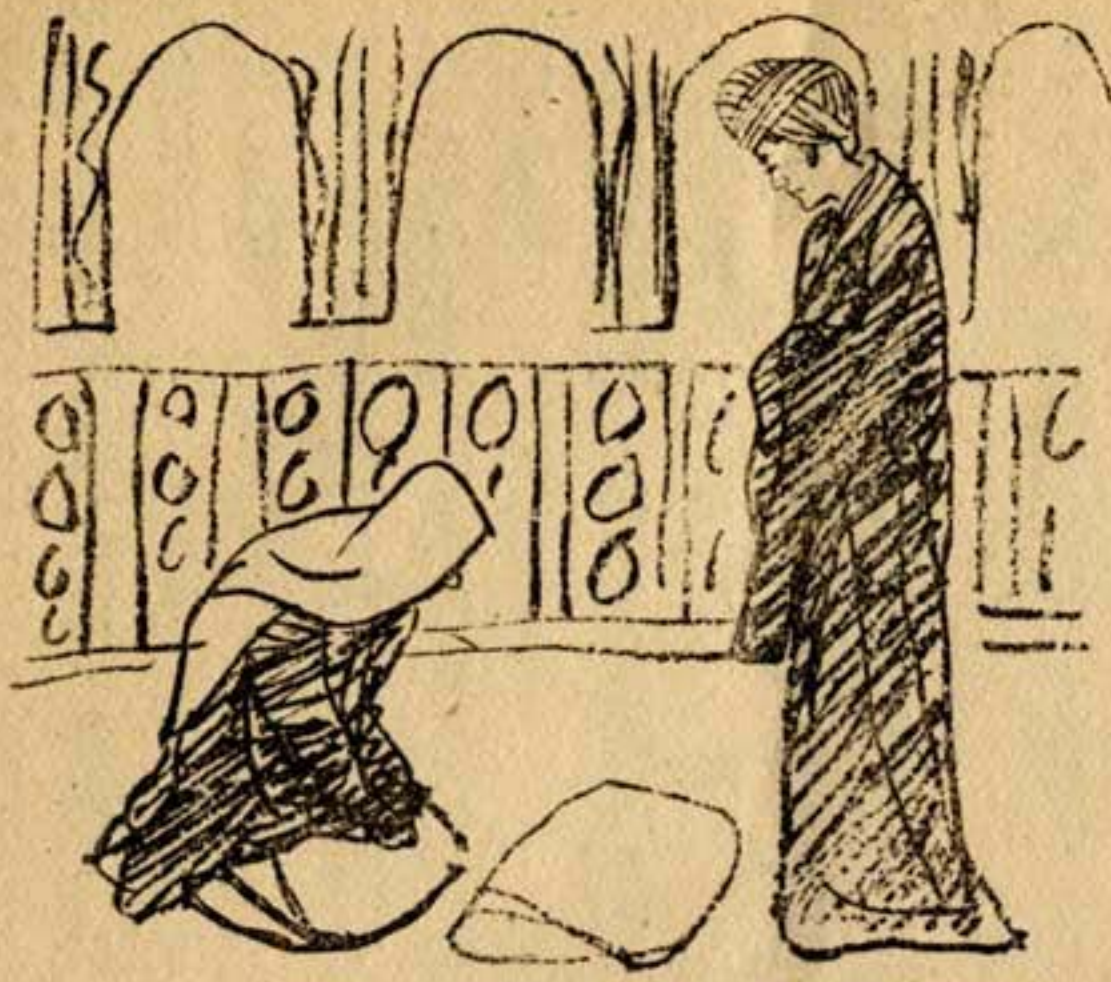
代田　重雄

お釋迦さまのお生れになつた事をお祭りする、四月八日の花祭りは、年と共に盛大になつて來ます。宗教情操の種々問題にされつゝある今日、まことに結構な事と思ひます。希くば、この花祭りの年中行事が、一部の宗教團體や、子供達の事のみとは思はず、一般の家庭の人々に於かれても、自分達の子供の頃、甘茶

或時波闍波提は自ら絲を取り布に織り上げた衣を捧げて、世尊の前にひざまづきました。

「世尊よ、これは私が心をこめて織り上げて作つた衣で御座います。世尊の御衣料にして戴きたくて持つて參りました。どうぞ御身におつけ下さいませ。世尊が御用ひ下さいますならば私の喜びはこれに過ぎたものはございません」

佛はしづかにおさとしになりました。



「世の中に布施の功德ほど大きいものはない。貪らず慳まずよく人に施すのは難いことだ。そなたの供養はまことに忝い。しかしこの衣は私に用ひることは出來ぬ。僧伽への供養は私すべきものではない。そなたが僧伽へ供養することは、とりもなほさず自分に供養して呉れたことと同じことであるから用ひなくても滿足するやうに」

ところが波闍波提の心はその衣をどうしても世尊につけて戴きたいのでした。世尊は自分が着たも同じだと仰しやいましたが、何としても、心に承知が出來ず押通し二度もお願ひ申し上げました。世尊はまたおことはりなさいました。傍に侍してゐた阿難は波闍波提の一途に思ひつめたこの純情に動かされて、世尊にお取なし申しました。

「世尊、波闍波提夫人は大王のお妃で、世尊に取つては養育の大恩のあるお方でゐらせられます。今心をつくして御供養なさるお志を憐んで、どうか夫人の捧げる衣を世尊のおん身におつけ遊ばしますやうに。」

を貰ひにくゞつた懷しいお寺の門を想ひ出して、何等か宗教的意義ある四月八日の一日として頂きたく思ひます。

德川時代の灌佛會の繪圖を見ますと、寺院の花御堂の周圍に群つた男女の子供達が、臍のあたりまで裾を卷いて、誕生佛に甘茶をそゝいだり、自分の器に入れりしてゐる。すると、お堂の下には、又大勢の大人が各々竹製の小さな桶を子供達の方へ突き出して、微笑みながら、甘茶を貰はうとしてゐます。これなどは實に、和やかな、微笑ましい、灌佛會に相應しいのどかな圖であると思ひます。大人も、子供も、無心に一つのものに溶け合ひ、麗らかにかゞやく花御堂の下に集つて甘茶に興ずるこの繪圖は、宗教的年中行事を傳へる當時の繪圖のうちでは他の類例を見ない唯一なものであらうと

阿難がお取り成をしましたので世尊も漸く夫人の志を御入れになつてその捧げる衣を御受けになりました。

（五）

淨飯大王は九十七の高齢を保ち、釋尊や難陀や一族の人々の手厚い看護の中に、圓な大往生を遂げました。

以前から出家の願ひを持つてゐた波闍波提は、今は大王も世に無い人になつたので、同じこころの耶須陀羅や一族の婦人たちと、城外尼拘盧陀樹園に在す佛の下に詣でて只管女人出家の御許しを願ふのでした。

ところが再三のお願ひにも拘らず世尊はどうしてもお許しになりません。婦人たちは止むを得ず一旦は引き下りました。

當時比丘の教團でさへ頻りに外道の迫害を受け或は內部から分裂を計つたりする者などもあつて統制の困難な時、社會的にまだ訓練されてゐない女人に出家を許し、その教團を保護し誘掖扶導することは、比丘たちに取つて大きな重荷であつた事でせう。

又女人に出家を許せば待ちかまへたやうに僧伽に入つて來る耶須陀羅の上に、世人が世尊に關聯して關心を必ず持つだらうといふ點にも深甚なる考慮を拂はれたことでせう。

やがて世尊は吠舍離城外の大林の中に移り住まはれました。迦毘羅城から吠舍離までは可なり遠い旅程がありますが、

或朝阿難は大講堂の入口にすゝり泣く女人の聲に驚かされました。何事かと出て見ますと、そこに摩訶波闍波提や耶須陀羅を始め多くの釋迦族の婦人たちが、髮を切り之を纏ふて立つて居りました。阿難は驚いて

「これは大王のお妃樣では御座いませぬか。お年を召されたお身で遙い途をはるばる此處までお出で遊したのは、何事か起つたので御座いますか」

と優しく尋ねますと、波闍波提は泣きながら

「尊者よ、私たちは出家の望をどうしても捨てられません。和やかな灌佛會の情景は、今日ではおそらく見ることは出來ないでありませう。この點から思ふに、私は、現今よりも當時の方が遙かに、灌佛會といふものが一般的に行はれ、家庭的でさへあつたやうに思はれるのであります。

灌佛會が家庭から漸次忘れられた一つの原因を、私は四月八日に行はれた民間の習俗の亡びた一事に見るのであります。

今日では殆んど、四月八日の習俗は無くなつてしまつたやうですが、昔はさま〴〵な事が行はれました。

先づ在家にては新茶を煮て佛に供じ、卯の花をさゝげ、又戸外に卯の花を挿したやうな事が、東都歲事記といふ本に見えてをります。

四月を卯月と云ふのは、舊曆の四月の頃は卯の花が盛りであるので、思はれます。

ることが出來なくて、佛の御あとを慕つてこゝまで參りました。どうぞ世尊に出家の御許しを賜いて下さい。」

と申します。

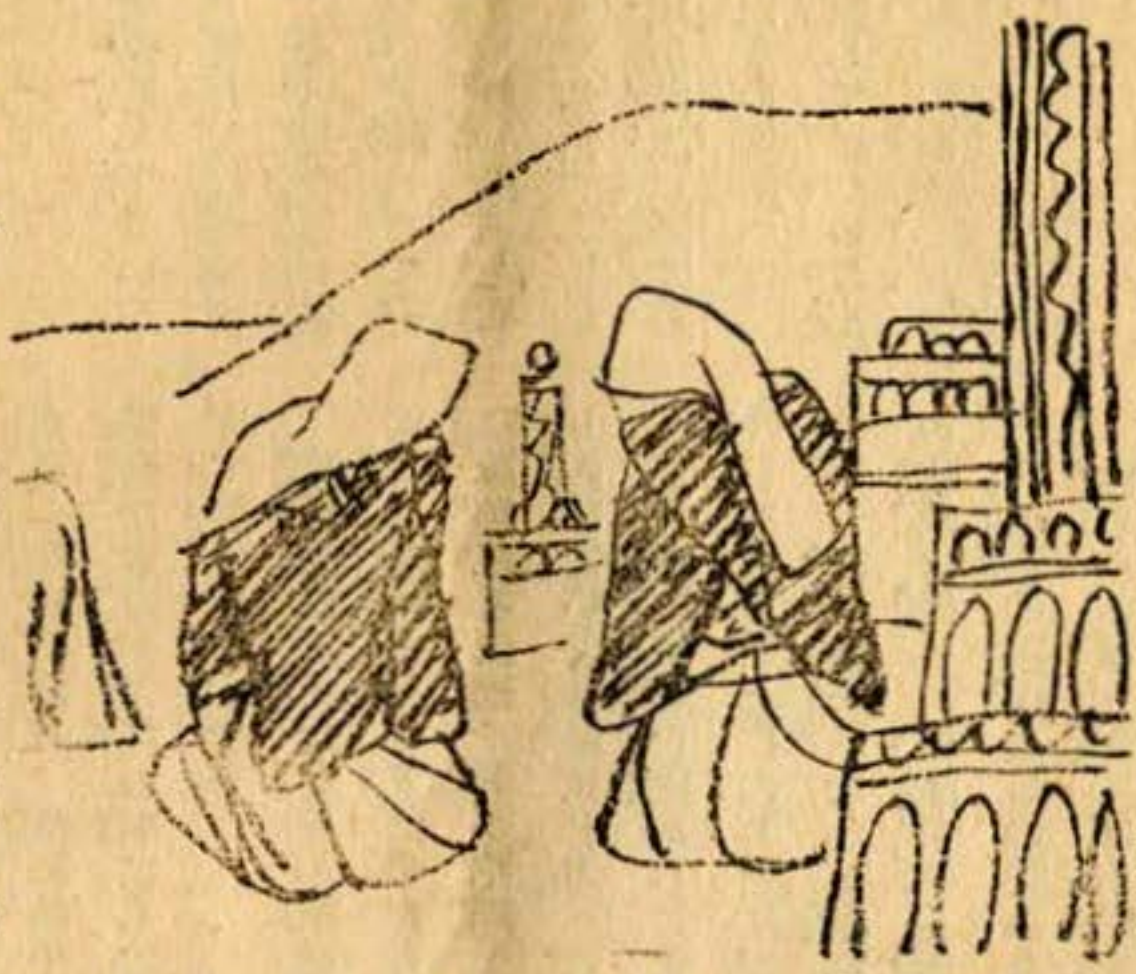
「それは困りました。世尊は迦毗羅でもはつきり女人の出家は許さぬと仰せになつてゐられるのですから、今更申上げても到底お聽き入れにはなりますまい。」

「尊者よ、私たちは道を求める爲にはどんな苦勞も厭はない固い決心で來たので御座います。尊者は世尊の最もお氣に入りの方です。尊者からもう一度私たちの爲に女人の出家をお願ひして下さい。」

阿難は生來氣だての優しい人でしたから、老いた波闍波提や貞節を守つて齡すでに六十を越えた耶須陀羅の、涙と塵に塗れた姿を見ると同情に堪へなくなりました。そこで婦人たちを戸外に待たせて世尊のもとに參りました。世尊は御足を拜してひざまづく阿難におだやかな慈眼をお注ぎになりました。

「阿難よ、何を尋ねるのか」

「世尊、只今戸口にはる〳〵迦毗羅から世尊のみあとを慕つて、大王の夫人が多くの婦人たちと來て居られます。そのおいたはしいお姿を拜しますと、お氣の毒で堪りません。どうぞあの婦人たちの出家の願ひをおきき屆け下さいますやうに」



「阿難よ、婦人の出家を許すことは出來ぬ、そなたもまたそのやうに取りなしてはならぬ。」

「世尊、それでは婦人は出家しても智惠も進まず法を聞いても覺りを開くことが出來ないのでございうつたものです。しかしこの卯の花を戸外に挿した風習も、嘉永六年の近世風俗志に、

「近世江戸今日卯の花を賣れども門戸に挾むを見ず專ら佛前に供するのみ」とあるのを見ますと、既に當時に至つてこの習俗の廢れた事が知れます。

四月八日の面白い習俗としては、この日お寺から貰つて來た甘茶を墨にすり「千早振る卯月八日は吉日よ神さけ蟲の成敗ぞする」と紙に書いて門の壁に逆に貼つて置くと蚯を生ぜず、毒蟲を除くと云はれて、これは江戸、京都、大阪等では盛んに行はれたらしいやうです。筆者の知人の家の老寄で、つひ先頃までこれを行つてゐたのを聞きましたが、めづらしい事だと思ひます。

又　花くそ餅と云つて、お佛壇にお餅をそなへました。しかしそれは

ざいませうか。それ故お許しにならないので御座いませうか。」

「いやいや、さやうの事はない。婦人も男子と等しく、み法を聞けば覺りを開くことが出來る。」

「それではどうぞ婦人の出家を御許し下さい。殊に波闍波提夫人は世尊に取りましては御養育の大功のある方で御座います。その切なるお望みをかなへて差上げるのは正しいと存じます。」

世尊はそこで婦人たちが八敬法を遵守するなら出家を許してもよいと仰せになりました。

八敬法と申しますのは、比丘尼が比丘に對する禮儀作法を八つの條目にまとめたもので例へば、

法臘百歳の尼でも、比丘に對しては其の日出家したばかりの者にでも座を立つて恭禮しなくてはならぬ。

と云ふのや

比丘尼は絶對に比丘の罪を擧げることも、批難することも許さぬ

といふやうに、一見男尊女卑の思想の甚だしいやうに見えるものばかりであります。併しこの敬法を文字通り見て、佛教は女人を蔑視する宗教であるやうに淺解する人は、釋尊のほんとうのお心持ちをよく味はつてゐないものだと思ひます。佛はつきり女子も男子と等しく正覺を開くことが出來ると仰せになり、後に弟子たちの優れた人々を賞揚なさるお言葉の中にも、比丘尼の名を澤山擧げて居られます。

體力的に無力な女子が家庭を離れて男子に任して道を修めて行く上に、自らの身を保護し他の干犯を免れるには、柔よく剛を制するこの八敬法より外にないと世尊はお考へになつたのです。

又女子の出家を認めることによつて教團な複雜性を加へることになります、單純な組織は强固ですが、複雜多岐になると壞れ易くなります。教團の統制を保ち、組織を早く崩壞させない爲にもこの八敬法は重要なものでありました。

世尊の八敬を保てば出家を許すとのお言葉を、阿難は婦人たちに傳へました。

摩訶波闍波提は涙を流して喜んで

「私ども女人は生涯この八敬法を寶の如く頸に抱いて背くことはございません。」

年中行事大成といふ本に述べてあるところを見ますと、花くそ餅ではなく、花供御餅が正しいとあります。花くそは、おそらく、花供御の轉訛であると考えられます。ものゝ本に依ると、昔大阪地方では二月十五日の涅槃會にそなへる團子のことを花くそ餅と云つたそうです。

戸外の行事としては、前記卯の花を門戸に挿した他、ペン〳〵草と云ふのを採つて來て、五七莖を絲を以つて束ね、逆に行燈に吊して蟲除の呪とするなどの事を行はれました。

大阪地方では四月八日家毎に、竿の先へ躑躅花を結びつけて屋上に建て、釋尊に奉り、これを花の塔と稱し、京都では卯の花を竿の先につけて奉つたといふやうな事も先の東都歳事記に見えてをります。

市井の方へ眼を轉じて見ますと、

と固く誓を立て、出家を許されました。この時波闍波提につき従つた耶須陀羅を初め多數の釋迦族の婦人たちも皆八敬法を戴いて出家いたしました。

かくて成立した比丘尼の教團は其後よく戒を保つて、比丘の教團、優婆塞の教團、優婆夷の教團と共に四衆相寄り相助けて、永く正法を傳へることに勵みました。波闍波提と耶須陀羅とは佛の近親であるいふ俗縁ばかりでなく、佛陀の弟子として最初の比丘尼として、忘れることの出來ない婦人であります。（をはり）　**吉田貫三郎畫**

稀代の怪力武士

その昔宇治左府公の隨身に小幡の公春と云ふ人があつた。腕力人にすぐれ身丈の石を輕々と持ち上げた。或時主の左府公が非常に怒つて公春を自ら打ちひしがうと云ふ事件がもちあがつた。公春は主のをおさへつゝ。

「もし拙者を打ち玉ふならば却つて御手を損ひませう。」と云つた。

左府公は無禮なる一言にます〳〵憤怒の情おさへがたく、

「然らば目前において汝の力業の程を見せてみよ。」とおつしやつた。

その言葉も終らぬうちに公春はウヲーッとうなり聲を上げると馳け出し、中庭の足に觸れる木と云はず庭石と云はず蹴散らし、中門の塀に兩手をかけると、それを前後にゆり動かした。塀は波をくつたやうに地響きを立てゝ搖れ出した。そのまゝに捨ておけば門もろ共は塀はうち倒れるであらう。

左府公はその腕力の程に舌を巻き、思はず公春を許し、怒りもどこへやら、かへつてその力業を讃へたと云ふ。

顯人坊主と云つて、お粗末な黒の衣に輪袈裟を懸けた乞食坊主が、花御堂に擬した岡持の中に誕生佛を入れ、それを市中の在家へ持ち廻つて、僅かづゝのお鳥目を貰つた事なども舊記に見えてをります。和やかな風景の中に、これはまことにいぎたなく、あはたゞしいものでありましたでせうが、これも當時の灌佛會の賑やかな市中の一點景であつたにちがひありません。

思ふに、昔は灌佛會に附隨して種々な習俗の一般に行はれてゐた事が知れます。

四月八日、野も、山も、花咲き鳥歌ふのどかな季節に行はれる花祭り私は、花祭りが寺院の獨占でなかつた、あの德川時代の灌佛會の和やかな繪圖を見て、泌々と昔の事が懷しく思はれてなりません。

佛に由つて強し

梅原眞隆

（一）

法然上人は淨土教の獨立を成就せられて、「たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべし」といふ專修念佛の大義を開顯せられました。

この專修念佛といふことは當時の全教界を根本的に驚倒せしめ憤激せしめた。法然上人はこの專修のために彈壓と迫害をうけられたのでありました。

何となればこの專修念佛の宣示は全教界に對する致命的な打擊を與ふるほど深刻な批判を孕んでゐたからであります。即ち、この專修念佛には三重の淘汰が裏付けられてありました。第一重には聖道門を擱き、第二重には雜行を拋ち、第三重には助業を傍にすることによつて專修の大道が開顯せらるゝのでありました。「本願の念佛はひとりたちをさして、すけをさゝぬなり」、かくて「たゞ念佛して」救はるゝ淨土教が人生最後の歸結として開顯せられたのでありました。

日蓮上人の四個格言の折伏におどろくまへに、この法然上人の凭閉擱拋の淘汰におどろかなくてはなりませぬ。否な日蓮上人をしてかくの如き雄叫びをなさしめたものは法然上人の刺戟によることを認めなくてはなりませぬ。

生命の伸びるには批判を要する、否な批判なくして生命の伸展はない。近頃の教界にいろ〳〵の宗教も擡頭するけれども、何等の批判がないから生命を示さない。また、既成の宗教も之の形骸は保持されても、まことの生命をあらはさないのはこの批判を忘れたからであらう。誹謗は戒めなくてはならぬ、けれども批判はあくまで曇つてはならないのである。法然上人の門流を汲む日本の念佛行者は、法然上人の批判的精神を嗣ぐことを忘れてはなりませぬ。法然上人の念佛は純にして嚴かな批判によつて法界をよこさまに斷ちきつた

のでありました。

（二）

さて、かゝる嚴かにして力強い批判的精神はいかなところに根ざすのであらうか、これは身命財をうち忘れて正法を攝受せられた法然上人の人格に支持されたことはいふまでもありませぬ。

さらに、注意すべきことは、之の批判的精神は法藏因位の本誓に隨順せられたことであります。專修念佛を仰信せられたのは「順彼佛願故」の樣子によるものでありました。「順彼佛願」の釋文を視つめて涙せられた上人の信心を窺ふべきであります。

佛願に隨順することは、佛願は誓約せられた念佛を修することであるが、しかも、この念佛を誓約せられたことには佛の深い選擇が根基となつてゐるのであります。「選擇本願」といふことが上人の深き體驗であつた。法藏菩薩の「選擇本願」が法然上人の「專修念佛」として、地上に開譯せられ、こゝに一切群生のための大道がまどかに光闡せられたのであります。

人生をあげて彈壓を加へ、社會をあげて排斥を加ふるとも、佛の捨てしめたまふを捨て、佛の取らしめたまふを取ること、換言すれば佛願の選擇意志を傳持することによつて、法然上人の信心は確固にして不動なるものとして徹底したのであります。隨譯佛願といふ眞の佛弟子の風格こそ、この老畏の批判者として一世を震動せしめられたのであります。

かの配所におもむかるゝとき、お弟子たちが世間の機嫌を氣づかつて上人に專修念佛の道破を遠慮あらせらるゝやうに諫めたとき、上人は至誠のいろをあらはして、「汝經釋の文をみずや、われたとひ死刑におこなはるとも、この事いはずばあるべからず」と斷言し「なんぢ世間の機嫌を口にかりて經釋の素意をかくすべきや」と彈呵せられました。これ、佛願に隨順して選擇の素意を卒直に實踐せられたのでありました。

上人は強くあらせられた。この強くあらせられたことは、毫も地上の我執や我慢によつて支へられた所爲ではなくて、ひとへに佛によつて強くあらせられたのでありました。

殊に現代においては、攝受正法の爲めに強き人格を要請してゐます。そして、その強き人格は「佛に由つて強く、法に依つて強き」人格であらねばなりませぬ。

換言すれば、法然上人のごとき強さを嗣ぐべきであります。（終）

松浦一先生著　發行所　傳通院傳通會館

生きる力

一部送料共　金二十錢
四六判七十一頁　美本

明哲にして繼細なる著者が、眞に『生きる力』としての宗教を諄々として說けるもの。近代人必讀の快著！

◇本誌讀者のため、便宜上、特にお取次致します。御入用の方は卷末に入れてある振替用紙で、直接本會宛お申込下さい。

蓮生問答

岡本綺堂

客。 君、甚だ突然だが、蓮生坊について少しく語つてくれないか。

主人。 蓮生坊……熊谷直實のことか。

客。 さうだ。その熊谷の蓮生坊について、雜誌の「淨土」に書きたいのだが……。

主人。 併し「淨土」に書くのでは、熊谷陣屋の物語といふわけにも行くまい。さうなると、僕の領分内では無さゝうだな。

客。 まあ、なんでもいゝから知つてゐるだけを話してくれ給へ。一體この人の苗字はクマガヤと云ふのかね、或はクマガヤといふのかな。

主人。 クマガヤが正しいのだ。現に信越線に乘つて見たまへ。ステーションの揭示にも「くまがや」と書いてある。併し一般には「くまがる」と云ひ慣はしてゐるから、こゝでも熊谷で話すことにしよう。

客。 そこで、その熊谷直實の身許は……。

主人。 一口にいへば坂東武者、詳しく云へば武州熊谷の住人、私の黨の旗頭さ。但し熊谷が旗頭になつたのではない。その父の次郎太夫直貞といふ人が旗頭になつたので、熊谷は二代目を受け繼いだのだ。

客。 さうすると、父の直貞も偉かつたのだな。

主人。 偉かつたか何うだか知らないが、勇士であつたには相違ない。なにしろ十六歲で旗頭になつたのだから……。それには斯ういふ話がある。直貞の父は盛方と云つて、京都で北面の武士を勤めてゐたが、なにかの罪があつて死刑におこなはれた。そのとき

忰の直貞はまだ幼少であつたが、忠義の乳母が彼を扶けて關東に下り、武州熊谷の親戚小澤氏を頼つて、そこに身を寄せることになつた。そんなわけであるから、次郎太夫直貞は子どもの時から苦勞して育つたらしい。さうして、十六歳まで生長すると、ここに一つの事件が起つた。

今日の人は嘘だと思ふかも知れないが、その頃の熊谷邊には秩父の山傳ひに熊や狼が屢々襲つて來た。熊谷といふ地名も熊が出るからだと云ふことだ。そのうちに一匹の大熊があらはれて、人畜を害することおびたゞしい。流石の坂東武者もこれには持餘して、若しこの熊を退治した者があれば、その人を私の黨の旗頭に推薦すると云ふことになつた。私の黨といふのは、京都の政府から公然認められてゐるのでなく、自分たちが勝手に黨を組んでゐるもので、文字通りの私の黨であるのだ。併しその地方では勢力のあること云ふまでもない。

そこで、次郎大夫直貞は弓矢と三日分の兵糧をたづさへて、山又山を駈けまはつた末に、その大熊をたうとう射仆してしまつた。さうなると、最初の約束だから仕方がない。私の黨の連中は當年わづかに十六歳の直貞を旗頭と仰ぐことになつたと云ふ次第だ。

客。 なるほど熊谷の父たるに恥ぢない勇士だね。一の谷で熊谷に討たれた敦盛も十六歳、おなじ十六歳でも格段の相違だ。

主人。 そこが坂東武者と平家の公達の相違だらう。さういふわけで、直貞は一躍して旗頭になつたのだが、不幸にして早死をした。それでも二人の子があつて、長男が直正、次男が直實、この長男もまた早死をしたので、次男の次郎直實が二代目の旗頭の權利を繼承することになつた。まあざつと斯んなものだな。熊谷については色々の話もあるが、人間一生のことを云つてゐたら際限がない。一足飛びに源平一の谷の合戰に移らうか。

客。 一の谷の合戰で、熊谷と敦盛の組討はあまりにも有名過ぎるが、そのときに熊谷の乘つてゐた馬は權太栗毛といふのだね。

主人。 さうだ。熊谷が都へ攻めのぼる時に、良い馬がない。そこで、馬飼の權太を奥州へ走らせた。權太は方々の馬市をさがして、結局三春の馬市で栗毛の馬を買つて來た。それが名馬であつたので、熊谷も大層よろこんで、その馬に權太の名を冠らせて、權太栗毛と呼ばせた。權太は卑しい馬飼に過ぎなかつたが、これが爲に名を後世に傳へる事になつたのだ。

客。 熊谷の發心は敦盛を討つた爲だといふ。それは間違ひに相違ないが、やはり普通一般にはさう信じられてゐるらしい。それには「一谷嫩軍記」の淨瑠璃が大いに手傳つてゐる。あの淨瑠璃の「花の盛りの敦盛を討つて無常を悟りしか」の文句が餘り人口に膾炙

して仕舞つたので、今更どうにも仕様がないやうだね。

主人。 いや、「嫩軍記」の淨瑠璃ばかりでなく、現に「源平盛衰記」にも、熊谷は敦盛を討つた後、大將の許しを受けて敦盛の首、鎧、兜、笛のたぐひを父の經盛の許へ送り屆けたと書いてある。さうして前には「それよりして熊谷はいよ〳〵發心の思ひ出で來つゝ、後には軍もせざりけり」と云ひ、後には「穢土の習をかなしみて、遁ればやと思ひけるが、西國の軍鎭まりて、黑谷の法然房に參りつゝ、髻を切り、蓮生と名を附けて、終に世をこそ背きけれ」と云ひ、熊谷の發心は敦盛最期の爲であるやうに、二個所までも叮嚀に書いてあるのだから、昔の人がそれを信ずるのも無理はない。今日は兎もあれ、昔は「平家物語」や「源平盛衰記」のたぐゐも正史と認められてゐたのだから、それが立派な證據になつたわけでもあるのさ。

客。 熊谷が剃髮の動機は、久下直光と領分の境界爭ひに負けた爲だね。

主人。 熊谷と久下とは親類關係でありながら、色々の事情で昔から仲が惡い。そのうちに地境の爭論が起つて、結局鎌倉まで持出して、頼朝の前で對決と云ふことになつたが、久下はなか〳〵如才なく運動して、あらかじめ梶原を賣收してゐる。おまけに本人も辯者である。熊谷は正直一方で、且は吶辯である。軍は上手だが、議論は下手である。總ての條件が不利に出來てゐるので、相手にドシ〳〵云ひ負かされて、形勢甚だ危くなつたので、熊谷の憤怒は爆發した。彼は問答無益と叫んで、證據の文書を庭先へ叩き付けて、頼朝の前を起つたかと思ふと、西の侍所へ駈け込んで直ぐに髮を切つてしまつた。頼朝もおどろいて取鎭めようとしたが、熊谷は肯かない。そこから馬を飛ばせて伊豆山へ赴き、更に京都へ上つて黑谷へ參り着き、法然上人の御弟子となつて蓮生と號す。これが本當の剃髮の由來だが、兎かく實錄は面白くないもので、領分爭ひの喧嘩よりも、敦盛を討つて無常を悟つたといふ方が詩的でもあり、劇的でもあり、嘘と知りつゝ其方を信用したくなるのが人情かも知れないよ。

客。 出家してからも色々の話が傳はつてゐるやうだね。

主人。 就中、有名なのは鉈捨の藪だらう。藪は京都の呂川の北にある。呂川は音無しの瀧の下流で、川は南北に分れ、南を呂川といひ、北を律川と云ふのだ。法然上人が彼の大原問答に向ふ時、その供をして來た蓮生坊の樣子が怪しいので、上人が途中で詮議すると、果して彼は袖の下に鉈を隱し持つてゐた。なんの爲だと訊くと、萬一けふの法論にあなたが負けるやうな事があつたらば、相手の坊主共をぶち殺す積りだと云ふのだ。何處まで行つても、熊谷は熊谷らしい所が面白い。いや、面白いと云つてはゐられな

い。上人に叱られ、諭されて、彼は遂にその兇器を路ばたの藪へ抛り込んだ。その故蹟が後世まで「鉈捨の藪」として知られてゐるのだ。

客。蕪村の句に「追剝を弟子に剃りけり秋の旅」といふのがあるね。これも蓮生坊のことを詠んだのだと云ふが……。

主人。むゝ。蓮生坊が關東へ下る途中で、二人の盜賊に出逢つた。勿論、熊谷とは知らないから、唯の旅僧だと思つて剃ぎにかゝると、迚もかなはない。賊は頭をかゝへて謝まり閉口すると、蓮生坊は彼等を諭して、おまへ達も食ふに困るから盜賊を働くのだらう、心を入れ換へておれの弟子になれといふので、二人の賊も發心して、即座にあたまを剃り丸め、蓮生坊の弟子になつたと傳へられてゐる。蕪村の句はそれを詠んだのだらう。

客。蓮生坊は自分の死期をあらかじめ知つてゐたと云ふではないか。

主人。蓮生坊は承元二年九月十四日の往生だが、死ぬ二三日前から自分の知人のところを訪けまはつて、蓮生坊は十四日に死ぬから、多年の好みに念佛を申してくれと觸れて歩いた。そこで當日の朝から多數の僧俗があつまると、蓮生坊は本堂の阿彌陀佛のまへに端坐して、頻りに念佛を唱へてゐたが、そのまゝ往生してしまつたと云ふのだ。今日の醫學上では、さういふのを一種の自己暗示だと解釋するやうだが、昔の信心者には往々さういふ例があつたらしい。

熊谷直實法體像（山城國東山熊谷金戒光明寺藏）

客。蓮生坊には何とかいふ歌があるね。

主人。蓮生坊の歌として有名なのは「いにしへの鎧にかへし紙衣、風の射る矢も透らざりけり」と云ふのだ。果して本人の自作だかどうだか知らないが、武士の悟りと云つたやうな哀れさが流露して、良い歌のやうに思はれるな。

客。 その歌で思ひ出したが、蓮生坊に關する俳句があるかね。

主人。 勿論、本人自作の俳句はないが、熊谷や蓮生坊を詠んだ句は隨分あるやうだ。誰にも知られてゐるのは、

熊谷も果は坊主や芥子の花　也有
蓮生や花をも憂しと捨る身の　惟中

正岡子規の類題を見ると、熊谷をよみ込んだ古句が澤山ある。その中から少し拾ひ出してみると、

熊谷や柳を剃りて櫻花　風舟
熊谷も衣や墨に染櫻　喜永
引つ組むや熊谷敦盛花見酒　正家
熊谷や飲んでおさへて兒櫻　友夕
蓮生や襷でかゝる納豆汁　合爪
散りて櫻同じ襷の蓮生坊　吉重

客。 そこで芝居の方では……。

主人。 熊谷敦盛といへば誰でも知つてゐるが、その割に芝居にはなつてゐない。なんと云つても謠曲の「敦盛」が元祖で、それから淨瑠璃や芝居も生まれて來たらしいが、芝居で代表的なものは「須磨都源平躑躅」と「一谷嫩軍記」だらう。前者は普通に扇屋熊谷といひ、後者は陣屋の熊谷といふ。敦盛が御影堂の折子になつて忍んでゐる處へ、熊谷が深編笠で尋ねて來て、一の谷の戰ひを約束して別れるのが扇屋熊谷。須磨の浦の組討から陣屋の物語になるのが陣屋の熊谷。殊に後者は舞臺の上でも屢々繰返され、單に淨瑠璃としても語られるので、最もよく知られてゐる。

そのほかに「蓮生物語」といふのがある。これは陣屋の熊谷の改作で、玉織姫が尼となつてゐる庵室へ、蓮生坊が宿りを求めに來て、こゝで組討の物語をするといふ筋だが、陣屋に比べると寂しいので、餘りに上演されない。近頃で熊谷をかいた戲曲は、山本有三君の「蓮生坊」と、僕の「熊谷出陣」と、先づそんなものだらう。

客。 いや、有難う。もうこの位で澤山だ。

主人。 その上に訊かれては僕も困る。蓮生問答はこゝらで切上げて、紅茶の一杯も飲むかな。

客。 それがよからう。

★　★　★　★　★

處世川柳

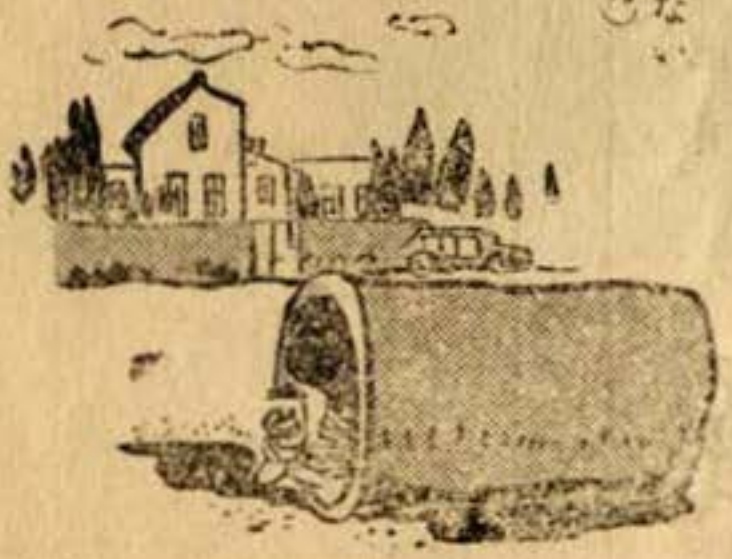
編輯部選
清水對岳坊畫

言ひ抜けるすべもあるのに妻は詫び
（耿陽）

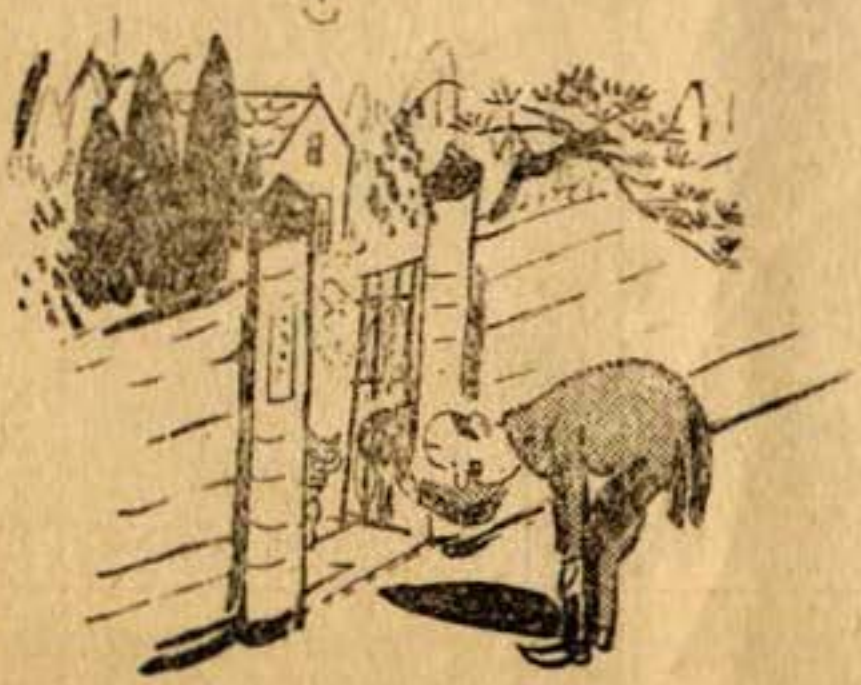
斷髪でわけのわからぬ年にする
（力好）

人形へ言はれない事ぶひきかせ
（秀）

二と二では四だが世間はさうでない
（笹ん坊）



神様を又取りかへて願を掛け
（苦味平）



提灯が消えて座頭に手を引かれ
（古川柳）

今日を築くまで

◇——岩井大僧正の生立——◇

本誌記者——

（一）

明治二十二年、東京の上野の森にも、はや秋が寂しくしのび寄つて來た九月の或る日の事であつた。

ピアノやヴアイオリンの音が初秋の樹々の間を縫つて、靜かに流れて來る音樂學校の校庭で、二三人の學生がブラリ〳〵と歩き乍ら、聲高らかに話し合つてゐた。

「變つた學生が入學したね」

「ア、、あの坊主のことか。破れ衣にヴアイオリンを抱いてゐる所は、一寸、風變りな景物だね」

一でも、服裝が異樣なだけあつて、ものすごい勉強ぶりだ」

授業が終つたのか、教室から學生がゾロゾロと溢れ出て來た。その中に、木綿の汚ない破れ衣に身を包んだ僧形の一學生が交つてゐた。手にはヴアイオリンを提げてゐる。

噂の主人公だ。學生達は當時の坊さんを輕蔑する俗風からか、この異樣な服裝の學生に白眼を投げかけて通り過ぎる。併し、その僧形の學生は白眼の中を、何の悪びれもせず、堂々の歩をとつて、物靜かに音樂學校の坂を下つて行つた。

古風な服裝のお坊さんと、近代的な音樂學校。而も學生達の輕蔑視の中に、事もあらうに汚ない衣で通學するこの主人公。何か理由がありさうだ。

當人は何かきつと期する所があつて通學してゐるに違ひない。そう云へば、初秋の淡い日影を宿した彼の沈默の顏には、他の學生に見られないきつい決心の相が現はれてゐた。靜かに坂を降つて行つた後姿にも、人をひく眞面目さが見てとられた。

岩井大僧正の近影

これこそ誰あらう。今ぞ時めく、浄土宗の管長、百萬の信者より慈父と尊ばれる岩井大僧正猊下の若かりし時代の姿である。

どうして、こんな學校に入學せられたのか？　岩井大僧正猊下の幼青年時代には、幾多の曲折が波のうねりの如くさかまいてゐたのであつた。

（二）

岩井大僧正は文久三年五月二十七日に、福岡縣粕屋郡山田村大字猪野の安河内市三郎氏の次男として呱々の聲を擧げられた。

實家は餘り裕福でもなかつたので、十三四歳の頃に、同縣の朝倉郡甘木町の藥種問屋の主人稲永氏から懇望されるまゝに、同家に奉公された。

稲永氏は信仰に厚く、先祖の毎月の命日には必ず檀那寺の浄土寺に供物を届ける事を忘れなかつた。お使ひ役は大抵、この小僧さんの役目であつた。毎月三四回も使ひにやらされた事であるから、自然にお寺の人達とも親しむやうになつた。殊に寺には同年輩位の小僧がゐて、恰好の話相手悪戯相手であつたから、尚更に寺の雰圍氣を愛するやうになられたのである。

浄土寺のこの小僧は、後年、猊下と一諸に浄土宗の學校に學び、浄土宗學界の一異彩と仰がれた東漸海と云ふ學僧の事である。

この兩小僧が後には九州の佛教界に重きをなすに至つたのも奇縁であるが、それにもまして偶然なのは、これから四五年後には同じ學校で共に佛教を學んだ事であつた。——と云ふのは、猊下は既に藥種問屋の小僧の時から、その才能の凡ならざる事を示されてゐたが、福岡市の成道寺の住職岩井境譽師は、この非凡な才能を惜しまれて、特に岩井家へ入籍するように懇請されたそうして遂にその望は果たされ、明治十一年四月の八日には、成道寺に於て得度式が擧げられ、三界の導師としての第一歩を踏み出されたのである。勿論、浄土宗の學校に入學せられたのはその後の事で

ある。

入寺されてからの生活は云ふ迄もなく嚴格そのもので、既に人々の注目の的であつた。更に京都へと遊學の旅に出られ、知恩院山内の淨土宗大學林に籍を置いて、佛教を學ぶと共に、淨土宗の信仰を深められて行つた。

この頃の猊下の私生活は貧そのものであつた。師僧の岩井氏も金がないので、思ふだけの學資も送れなかつた。極度にきりつめた生活は頗る悲慘なものであつた。

併し、この貧にもめげず、信仰の火は心の中に燃えさかつた。そして、信仰の火が燃えれば燃える程、佛教不振の事實は鞭となつて心をさいなんだ。

「どうかして現代の人々に佛教を理解させたい。」

この一念だけが心中に渦巻いた。

「布教！　傳道！　さうだ。これのみが、佛教の興隆に殘された唯一の道だ」

瀰然と開かれた光明の道。

「そうだ、自分が受けた廣大な佛恩に酬ゆる道は布教あるのみだ。現代人に佛教の眞諦を教へ、衰へた佛教を復興させよう。これ許りは自分の身命を賭しても成しとげねばならぬ。」

愛宗護法の念に燃えたつ猊下は胸底深く自己の進むべき路を嚴然として定められた。

進路が確定した。それだけに猊下の布教に就ての研究は、人の日をそばだたしめる程の熱烈なものであつた。總らゆる講演會には云はずもがな、さゝやかな法話の席にすら列して、研究に餘念がなかつた。ノートをとる、話し方を研究する、精魂を傾けての勉強だ。

又、當時、壯な勢で全國に擴がつてゆくキリスト教の狀態を見られるや、キリスト教の傳道法には勝れたものがあると看破せられて、キリスト教の布教、並に教義を研究する爲に、キリスト教の教會に頻繁に出入せられた。

「岩井はキリスト教に轉向した。怪しからん奴ぢや」

餘り頻繁に教會に出入せられるので、こんな噂が遂に當時の學友の間からさへ洩れ始めた。勿論それは誤解であつた。幾多の勢が酬ひられて、辯才はこの頃とみに上達し、名聲は一時に上つた、それと同時に猊下と親しいキリスト教の教會では、その非凡な辯才に惚れこんでキリスト教轉向を進めた事もあつたが、頑として退けられた。

「キリスト教に入れば、生活の保證をする。」

猊下の苦しい生活狀態を知つてゐる牧師達は、金で釣らうとした事も度々であつた。併し、護法の念に燃ゆるこの先覺者は微動

だもしなかつた。

學友の怨嗟の聲と教會の懇請の聲との中に立つて、若き富樓那は巍然として、自己の信ずる處に勇往邁進せられた。大阪市の居留地にある英和學舍に英語を學ばれたのも、この頃の事である。

當時は佛教とキリスト教とが互に爭つた時代であつたから、教會に頻繁に出入せられるのを見て、學友達が怒つたのも無理はなかつた。胸底深く藏せられてゐた大望を知る事が出來なかつたのだ。

自己の強い信仰を持つてゐる人は、他の宗教を知れば知る程、益々自己の信仰を深めてゆくものだ。他の宗教を知らずして何の自己の宗教の價値が判らう。キリスト教を知るに從つて、猊下の阿彌陀佛信仰は益々固つて行つた。と共にキリスト教の嶄新な傳道法をも會得されてしまつた。

（三）

併し、猊下の學究心は此處に止まらなかつた。更に學者の多い東京に出て益々智を磨き辯を練らんことを決心された。だが、先立つものは學資。今の貧乏狀態では東京遊學は到底おぼつかない。はやる心を抑へて、憾まれる日が重つて行つた。

この折、大學林の先生であつた當代の學匠黒田眞洞氏が、これを見かねて、東京小石川の善光寺住職本多圓隨氏に萬事を依頼された。本多氏も猊下の英才を惜しまれて、欣然として快諾せられた。

飛立つ喜を抑へて出京せられたのは明治十九年であつた。本多氏は自分の兼務寺の小石川最久院を與へられた。猊下はこゝで自炊をしながら、哲學館等に通つて益々學問に精進せられると共に、その餘暇には壯に在家に行つて布教に專念せられた。辨才はかくして益々磨かれて行つた。更にキリスト教研究も相變らず續けられた。

學問と辯才とは益々向上してゆくのに、貧乏許りは猊下の身にまとひついて離れなかつた。燒芋で飢を凌がれる時すらあつた。善光寺の飯たきに女の風をする啞の男があつたが、猊下を見乍ら、指で輪を作り、鼻をつまんでは、手を壯に振つて變な顔をする事が度々あつた。これは、

「あれは金がなくて駄目だ〳〵」

の意味であつたが、猊下はそれを見る度に、その當時、善光寺の小僧さんであつた本多淨嚴氏と呵々大笑されるのであつた。

それから、二年の後に深く決する所があつて普樂學校に入學せられたのである。

——キリスト教の傳道法を研究すると、普樂が非常に布教の助けとなつてゐる。素晴らしい勢でキリスト教が若い人々に喰入つ

て行くのは、あの讃美歌があるからだ。音樂は人の心を和やかにする、人の心を宗教的にする。佛教にはこの新らしい西洋音樂がない、どうしても現代人を佛教に引き入れるには西洋音樂が必要だ——

から決心されたから、貧乏な中から破れ衣に身を包んで敢然として音樂學校に通學されたのであつた。護法に燃ゆる心には人の白眼視などは問題ではなかつたのだ。

（四）

かくして布教の爲には總らゆる努力を拂つて、傍目もふらず精進せられて來た。

一度講演される爲には原稿を丁寧に作り、こゝで聽衆に感動を與へやうと思はれる箇所を定められる、だが實際講演してみると、聽衆はその所で感動しない。かうして、この感動させる所を代へる事、五六度に及ばれる事は度々であつた。

また、どんな下手な說教師の法話でも最後迄聞かれては、ノートをとられた。そして云はれるには、

「どんな下手な布教師でも、必ず感心すべき所はあるものだ。」

當代第一の巧者にして、この心がけがあるのだ。だからこそ、どんな老人でも、青年でも猊下の說教を一度聞くや、感極つてしまう。この稀な辯才と博識こそ、長い間の苦心の賜であらう。

苦心もやがて酬ひられる時が來た。この數々の苦心によつて練られた辯才は樂日の認むる所となり、明治二十七年十月二十七日には、日野管長より日清戰役外征軍慰問使に任ぜられ、同年十一月十五日には大本營の從軍許可を得て、滿洲の戰野に親しく慰問布教をせられた。流れる如き辯と燃ゆるが如き信仰の火は、幾多の戰士を激勵せしめ、桂太郎大將の懇篤なる感謝狀を得られた。

更に明治三十年には、野上管長の命により、管長代理堀尾大僧正の御代說として岡本貫玉氏等と朝鮮に布教をせられた。これまた非常な成績を上げて歸國された。

× ×

これから、猊下は全國至る所に感動の法宴をくりひろげられ、幾多の人々に法然上人の貴い淨土教を宣布せられ、信仰の生活に引き入れられた。猊下の御導きで信仰生活に入り、更生した人は全國に數知れずあつて、法悅にむせんでゐるのである。

遂に、昭和七年二月には、大本山清淨華院の法主に御就任になり、更に昭和九年の春には大本山增上寺の御法主に御上任、續いて同年の十一月には、單宗一致の推選にて、淨土宗管長知恩院門跡になられたのである。

現に七十四歲の御老齡もいとはず、百萬の信者の爲に、御親教に席の暖まる暇もなき御多忙ぶりである。

影法師を見つめながら

吉水辨道

陽があたつて一面に明るい障子に、雨滴れの落ちる影が映る、昨日降つた淡雪が今日の春日に溶けて落るのだ。ぢつと見てゐると、此の動く影繪に、私はかぎりない面白味を感じて來た。何といふ單調な、而も亦何といふ意味深い水墨畫であらう。

一滴一滴、雨滴れは絶え間もなく重なり落ちる。そんなにも先を急がずともといひたい位爭ひ落ちてゐる。然し今私の眼に映ずるのは明り障子に描かれた水墨畫なのだ、此の水墨畫によつて實體を想像してゐるに過ぎないのだ。

恰度人生の事實と、之れに對する我々の眼とが此處によく映し出されてゐる。

我々の眼は、生きた實體を見ることより、實體の跡、もしくは實體の影法師を見ることによつて、かへつて眼の働いた實感を持つものだ。

——實體は恐ろしい、例へば爛々たる太陽のやうだ。之れをまともに見ると眼がくらむ。人は人生の事實を直視すべくあまりにも心臆いのを常とする。それだから事實の前にはつい眼を蔽ふ。そして實體の跡を見ることによつて人生を考へ得るとし、或はその影法師を見ることによつて實體を讀み得るものと思つてゐる。

★

お堂の緣の一部が腐朽して來て、子僧達がうつかり乘ると、ミリ〳〵つ、と音がする。子僧達は其の度にびつくりして飛び退り、胸撫でおろすのを常とする。然し誰一人其の事をいひ出す者もない。住職の老僧までが、知

大衆俳壇

○　岩田諦眞
人の身の達者いはれな春の雪

○　同
鶯のいつも初音の淨土かな

○　同
短夜や木魚次第にせわしなき

○　木村彌五郎
雪解の雫とほどし軒の夜半

○　飯塚八代比
夕告る鐘ひろこりぬ花の里

○　同
花や散煩惱具足をかこたるゝ

○　關谷秀峰
雨傘に溫さ見られつ床の梅

○　同
おぼろ夜や艸の包ひの長堤

○　三野輪精二
春の雨經よ陀羅尼と流るめり

○　同

つてか知らずでか、今の内に修繕すればよいものを、默つて知らん顔をしてゐる。近頃はもう誰も其の附近へ寄りつくものがない。さはらぬ神に祟なし、とでもいふのか、然しながら何れは誰かゞ踏み拔いて怪我でもしてから表汰沙になるのだらう。

甲の家と乙の家との境に松の大木が一本、亭々と聳えて常盤の綠を誇つてゐる。いつの時代に誰が植ゑたものか、甲家でも知らず、乙家でも覺えない。只時々、甲家の人達は、何でもあの木は自家の先祖が植ゑたものだらうと話し合ふ、併しその話の證據があるわけではない。乙家でも亦同樣に、ことによるとあの大木は自分達の祖先が、境木か何かのために植ゑたものだらうと語り合ふ、だが兩家とも此のことを表面へ持ち出すことを恐れてかつて一度だつて話し出したことはない。

賢坊は、生來の甘好きのため、近頃とうとう蟲齒を一本作つて了つた。見ると齒の中央が黑くなつてゐる、冷い水や熱いお湯が時々しみるらしく、思ひ出したやうに、齒醫者へ行かうかなア、といつてゐる。然しいざ出かけようといふ時分にはいつか痛みを忘れて、同時に齒醫者行も忘れて了ふ。當人が元氣に飛び跳ねてゐるため親達もついそれなりになつて了ふのが常である。

★

眞實にふれて、眞相を直視する、それはどんなに恐ろしいことだらう。其のくせ人間は皆心から眞實を求めてゐるのではあるが……

眞實を求めるためには、むしろ人間は、まだ起りもしない事實をあゝだらう恁うだらうと、取り越し苦勞さへするのではないか。

一體世の中の眞實といふものは、およそ人間の豫期に反するものだ。それといふのも、人間は皆我慾の固りみたいなものだから、何事もすべて我慾から割り出して計算する。そしていつも其處にとんでもない誤算のあるのを實は氣づかないのだ。恐らく此の誤算が生む痛さが恐ろしいのではあるまいか。

我慾をすてろ、さすれば一切は思ひのまゝになる、然う教へられ然う肯けても、此の我

大佛花吹雪にもゆたかなり

○　内海眞瑞

ほのふする炭火も淡し雪の暮

○　同

恐しき夢さまされの吹雪かな

○　市橋義一

念佛の聲のぬるさや春の宵

○　福島孝治郎

加茂川や土手の雪こそ不時の花

○　同

成道日春つれ〴〵に手を合す

○　畠平與四郎

念佛や朝霧ともに心澄む

○　荒眞佐子

行かひに袖振る緣や慈善鍋

○　藤原耕人

淡雪やまいらでおけぬ寺の門

○　同

梅咲くや草の家靜ほの明り

○　佐藤眸子

春麗ら舟あちこちと艪の輕さ

○　郁芳隨潤

宮の松鷗落ちて海洋々

慾をすてることの出来ないのがそも〳〵人間だといひたい位の人間だ。

それだから、眞實といふものを頂上としていつも、上る苦勞か、下る惱みかにあえいでゐることになる。

——凡人と達人との相違は、前者は眞實を正受しないで、只取り越し苦勞するのと、後者は眞實を正受する代り、一切をあるがまゝに委せるのとの相違相とも考へられる。

○

中庭に、南天の一株があつてことしは特に房々した赤い實をつけた。時々バサ〳〵といふ妙な音がすると思つたら、いつ見付けたか鵯が二羽、こつそりやつて來ては啄んでゐる。まあよいわ、鵯達に御馳走してやれ、と思つて追ひもせず、そつと自分の飼鳥でも迎へる心地で見てゐると、妙なもので何となく可愛くなつて來るものだ。だが朝から晩まで此の一株にとりついてゐることとて、流石の南天の實もいつか殘り少なになつて來た。今まで赤い實が唯一つ淋しい中庭の飾りであつたのが、忽ちなくならうとするのに、聊か驚きに似た後悔も出て、急に鵯を追ひはじめた。白い糸を張り廻したり、子供の百連發を持ち出したり、相當の苦心が入るやうになつた。然し鵯は人をすつかり莫迦にし切つて、追つてもろくに逃げもせず朝、まだ寢てゐる内にどん〳〵やつて來ては啄んでゆく。さうなると此の鳥が憎くなつた。はてはがまん出來ないで幾度か鳥銃で打たうかとさへ思ふやうになつた。だが其の内に南天の實が一つ殘らず啄まれて了つていつか鵯も來なくなつてしまつた。かつて可愛かつたことも、又憎くかつたことも、萬事は淡い春の夢のやうに消えていつた。

鏡のやうな山中の湖面に、サッと山風が吹き下ろして、忽ち千波萬波となり、さうかと思ふといつの間にか白雲悠々と湖面を渡る靜けさにかへり、或は陽が輝き、暮れば星がのぞき、絶えず何事かゞ繰り返へされて面もそばから〳〵忘れられてゆく。

だが然し、人間の心は其の度其の度に、痛み、おの〳〵き、ふるへるのだ。

我慾といはれる人間の迷情は、此の我れと我が禍の痛さに恐れながら、なほも其處に眞實の面を覆ふ手が働く……。

眞實をまともに受けよ。

影繪の障子を開いて實相を直視せよ。

三成と桃

或る時毛利家から秀吉公に桃を獻上したことがあつた。十月の頃だと云ふに、色合と云ひ熟し具合と云ひ盛りの時分のものと少しも變りがなかつた。然し之を取繕がれた石田三成は

『實に見事な桃ではある。だが、今時節に當らぬものであるから、若し御前に參らせて、御覽でも當つては、毛利殿の聞へも惡からう。何によらず、時節のものを召上るが一番よろしい。』

と云つて、これを返した。三成の鎭重な態度には皆感じた。

人生の荒波を超えて

特輯讀物

人生の荒波を超えふ

青年時代を憶ひ出して……

—一人一業で進む—

富山房主　坂本嘉治馬

青年時代を語れといふ御註文であるが、只今老齢となつても、氣持だけは若い頃と別段變つてゐないから、特に青年時代と銘うつて老年時代から區別するやうな時期は私一個にだけは見當らない。しかも強ひて青年時代と申し上げれば出版業を創めた明治十九年前後のことでもあらうか。

明治初年鄉國土佐で少年時代を過した私は、當時土佐の青年達の間に流行した「脫走」者の一人として東京に出て來た。拾七歳の年少の時である。脫走とは、

「男子立レ志出二鄉關一學若不レ成死不レ還」

と傲語して、近親にも計らず故舊へも告げず、ばり出版業を創めた明治十九年前後のことでもあらうか。

明治初年鄉國土佐で少年時代を過した私は、當時土佐の青年達の間に流行した「脫走」者の一人として東京に出て來た。拾七歳の年少の時である。脫走とは、

「男子立レ志出二鄉關一學若不レ成死不レ還」

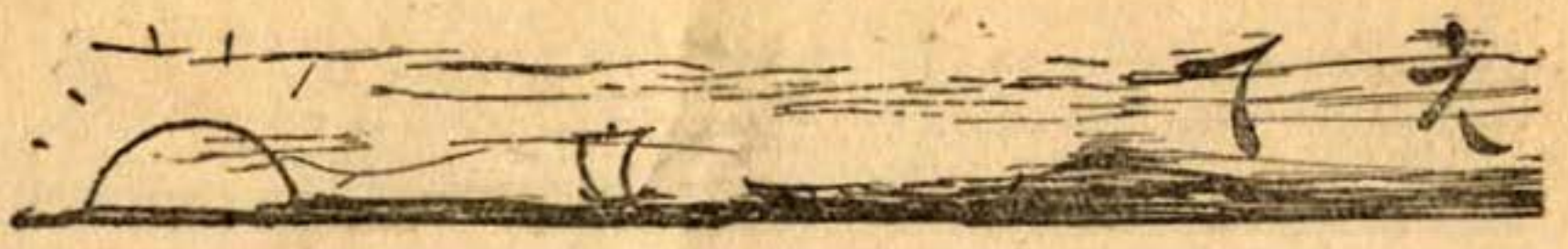
と傲語して、近親にも計らず故舊へも告げず、ばり出版業を創めた明治十九年前後のことでもあらうか。

世界的の提琴製作家

宮本金八氏

—その奮闘記—

明治維新以來　西洋音樂は日進月歩して、今日ではもはや西洋の先進諸國と肩を並べるやうになつた。作曲者　指揮者、音樂家、何れも世界的人物を生んでゐ



に肖らうとして青年達がしきりとこの脱走を試みた。私もこの脱走組の一人であつたのである。

脱走して東京に着くと、亡父が北越戰爭後命の大恩人として、お世話になつたその頃會計檢査官であつた酒井融先生の門をお訪ねして教導團に入團したき旨をお願ひした。陸軍大將は當時の少年の夢であつたのである。しばらく酒井家に起居してゐる内、その頃大隈侯の幃幄に參じて、改進黨を起したり、今の早稻田大學の前身たる東京專門學校を創めたりして俊英の名高かつた鄉國の先輩小野梓先生が新に出版書肆東京館を創めるので店員が一人入用であるといふ。學問もさることながら、出版業に從事して天下國家に裨益するのも男兒の本懷ではないかと勸められるまゝに東洋館に入つたのが、私が出版業者としての第一歩であつたのである。

坂本嘉治馬氏

東洋館は小野先生の雅號を館名とした書肆であつたが、その創業趣意書にもある通り「頃日自ラ奮ツテ此書舖ヲ初メ、大ニ其業ノ完備ヲ謀リ、聊カ文化ヲ開進スルノ媒助タラシメントス、乃チ約ヲ龍動・巴黎・伯林・新約克ノ書肆ニ結ビ、泰西ノ名士ノ新書ヲ舶載シ、本邦負望ノ名家ト議シ、頻リニ政治法律哲學史乘ノ新篇ヲ開版シ以テ廣ク之を江湖ニ鬻ギ、夫ノ講學讀書ノ人士ヲシテ机上良書多ク篋底善書滿ツルノ感アラシメント」

するを眼目とする先生の高遠の理想を擔つた氣宇高邁な書店であつたのである。このため先生自ら館頭に立ち、館員を指揮して計算に原稿に書籍買入に自ら當られてはゐたが、何に致せ政治・法律・教育と多方面に活動された御多忙の身とて、おのづから店の仕事は入館二年足らざる若年の私の責任となり、特に御病氣になられてる。

だが　人々はこれ等の輝しい名は知つてゐても、その土臺とも云ふべき樂器製作者の名は餘りにも忘れてはゐないか。だから世界の提琴家から稀に見る名人として激賞されつゝあるヴァイオリン製作者が日本にゐると云へば一驚するだらう。日本の樂器製作の技術を考へれば、驚くのも無理はないが……

系統だつたヴァイオリン製作の技術は勿論のこと、一人の製作者もゐなかつたこの日本に、世界的なヴァイオリンを作り出して、世界の樂壇人をアット云はせた人こそ誰あらう、こゝに紹介する宮本金八氏である。

オルガンの木工より身を起す

人生の荒浪を超えて

からは、横濱の外國商館に原書の購入や、出版販賣折衝等は一切の私の仕事であつたのである。

ところが明治十九年一月不治の痼疾によつて小野先生が突如御他界なされたゝめ東洋館は閉店の止むなきに至り、私は全く途方に暮れざるを得なかつた。しかし偶然とはいへ一度圖書出版に足を踏入れたのであるから、これを一生の天職として生涯を働き拔かうと決心し、先生の御危篤を報ずるため初めて先生の義兄日本鐵道會社々長小野義眞翁に拜顏したのを機緣に、洋館を閉すると共に義眞翁をお訪ねして、金二百圓の御出資をお願ひした。

最初義眞翁は出版業が商賣として成り立たないとて仲々に御承諾いたゞけなかつたが、一日壹圓內外の利益があれば、私の商賣は成立つて行くといふ數字上の計算と、私の熱意とをお汲みくだすつてか、二百圓の御出資を快諾され、忘れもしない、明治十九年の三月一日、今から回顧すれば五拾年前の本月本日、神田裏神保町九番地に家賃三圓二十錢の古長屋の一店屋を借り受けて最初の當山房書店を始めたのである。

店頭裝飾に七十圓ばかりを費し、古本の賣買原書の取次販賣を開始し、東洋館の事業を繼承して未刊の天野爲之先生の原稿「經濟原論」の出版を試みて見たのである。ところがこの本が實によく賣れた。當時經濟原論といへば惡く外國の原書に倚つてゐたものであつたが、邦語で經濟原論が勉學できるといふ所から時流に投じたのか、またゝく間に二版三版十數版を重ねて當山房最初の出版は見事に成功したのである。かくして私の出版業としての人生の處女航海は始められたのであるが、當時二十歲

當山房新屋

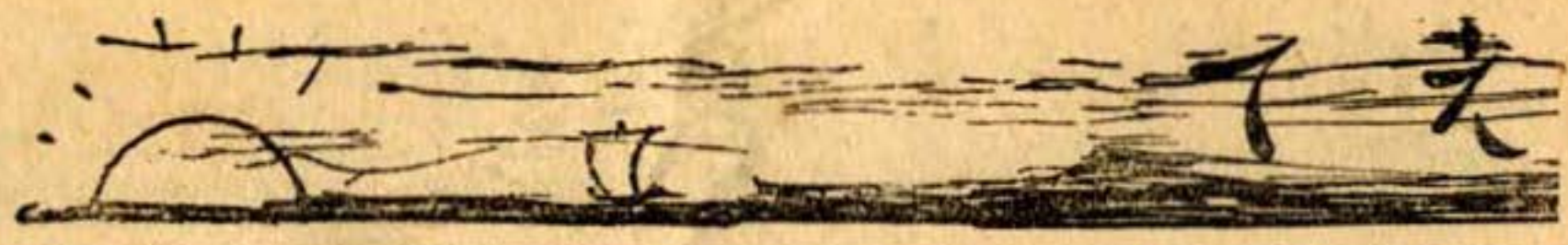
世界的な天才提琴作家、宮本金八氏は愛知縣濱松市の生れである。

濱松市は日本の樂器の町と云はれる程ピアノ、オルガンの製作の盛んな町であるが、宮本氏も町の多くの青年と一諸に濱松の日本樂器會社に木工として入社した。明治三十一年、青年の野望燃える二十一の春であつた。

入社當時から仕事熱心で樂器製作を生涯の天職と定め、一生懸命にオルガンの木工として精進の生活を續けて行つた。

明治四十三年には日本樂器會社の支店が東京に出來たが、それと共に宮本氏は東京支店に廻された。

東京の支店では專らピアノの製作に專念した。傍



の青年、一日の生活費が五拾錢で事足りたのであるから、今から憶へば隔世の感なきを得ない。

それから五十年、及ばずながら出版の一業に從事して今日に至つてゐるが、たまゆらも忘れないことは小野先生の遺訓「益世報効」と、一人一業の精神とである。

一人一業といふ私の標語は別に大して發明とはいへないであらうが、元來私は愚直であるから、寢ても醒めても自分の事業のみを考へてゐて、自分の業務以外には手を出す餘裕もなく、それをしないことに自誡してゐる。多才多藝の士ならば多方面に活動し、それはその人の實力・力量によつて効を收めても行かうが、私にはそれが出來ぬし、それをしない方針としてゐる。そしてともかく一人が一業に捧身の熱意を捧げてやり通せば、上根にせよ下根にせよ、その根氣から何かの收穫を得られないことはないと固く信じてゐる。

私は佛教のことは深く存知てゐないが、一宗一派の開祖、祖師といはれる人達はどんな艱苦に遭つても自分の信ずる教條のために不惜身命の精神を以て當り、これを貫くに、不退轉の努力をもつてしたであらうことは想像される。商人道からすれば、これは一人一業の精神と合致するわけである。信仰の道も商賣の道もその根本には、一脈相通ずる所があるのであらう。

母の病を機緣として

—醫學博士吉原リユウ子女史—

光原修

「お母さん、私は必ず女醫になつて、お母さんのやうに病んでゐる方々のために一生を捧げます！」

女學校を卒業したとき、「女は女らしく二三年目もふらない精進は、グン〳〵と技を向上さして行つたが、その早さには同僚も驚く許りであつた。

この頃、宮本氏の仕事熱心は評判となつて、ヴァイオリンの修繕を賴まれるようになつた。

「ヴァイオリンは全然手がけた事もありませんから……」

と始は斷つたが、

「貴方を信賴して賴むのですから、どうかなほして下さい」

と無理に托されてしまつた。ヴァイオリンはオルガンやピアノと違つて、一人でコツ〳〵研究も出來たが、何しろ今迄日本になかつた技術だから、その苦心は並大低ではなかつた。教へてもらう先生もなく、學

人生の荒波を越えて

家事の手傳ひをして結婚したらどう？』といふ周圍の意見を押切つて、自ら進んで東京女師醫專に入學手續きをとつた女史の心の中は、たゞひたすらにかういふ思ひで一杯だつたのだ。

『家事の手傳ひはいたします。しかし結婚のまへに自分の勉強をし遂げさせて戴きます。』

芝公園の兄の住職する寺院に寄寓してゐた女史は、兄だけに自分の確固たる信念を吐露して勇躍醫專に通ひはじめた。事實、女史は新しく家の人となつた嫂を助けて朝の拭き掃除は勿論、學校から戻ると奥の一間に永年中風を病んで臥つたきりの母の看病を一手に引受けてやつた。そして夜は一時、二時まで机に向つて學課の復習に餘念なかつた。——近くの增上寺の梵鐘が、公園の靜かな空氣をふるはせて響いて來る。すると女史はいつも思ふのだつた。

『あの鐘の音は確かに人の心を和げる。そのやうに人の肉體を癒すことが自分に出來る日が早く來ればいゝ……』

＊

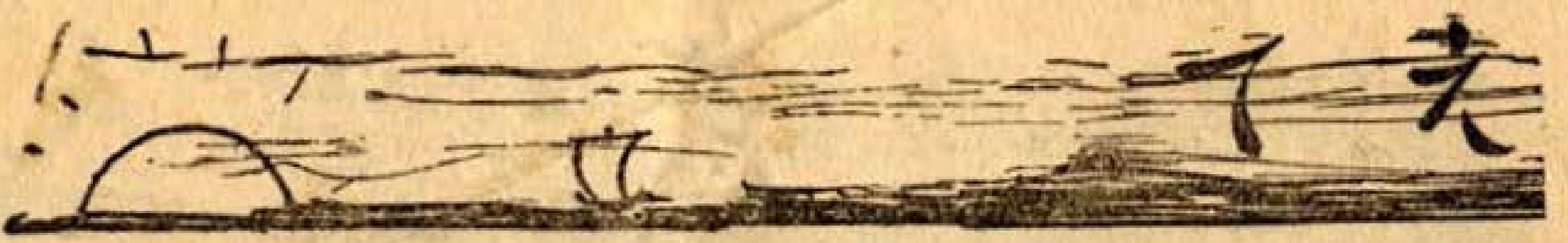
女史は自分の歩む路から側目も振らずに年を重ねた。東京女子醫專を拔群の成績で卒業すると、校長吉岡彌生女史の推薦で、暫く慈惠病院に勤務する身になつた。しかしその間に、吉岡校長をはじめ、女史の英才を知る人々によつて幾度か海外留學の話が交されてゐた。しかし人々の考へる留學を實現するには、女史一家の經濟事情が許さなかつた。そして最後に、女史の兄上がかつて布教に行つてゐたハワイの地に、淨土宗留學生の名目でまづ渡ることになつたのである。

大正十一年の十月、女史二十四歳の秋。女史はホノルルに到着すると、立川眞教師の開教院に荷を解いた。そして翌日から開業醫試驗を目差して、傍ら語學研究のためにと外人のドクトルについて猛勉強を開始した。當時ハワイには邦人の醫院を開くものはなく、邦人の凡ては出產に至るまで殆ど外人醫の手をうけてゐたのである。ハワイに働く邦人の人口に比して、衞生方面のこの不備、不經濟。女史はこのことを痛感して、一身を犧牲にしても邦人衞生のために盡す決心をした。が、ハワイではアメリカの開業すらない。總べて獨創だ。

併し、頼れた以上はどんな苦心を拂つてもなしとげねばならない。多少不安ながら、固い決心の下に、ヴァイオリンの板をはがした。木の質から、構造と綿密に研究を始めた。かうして始のヴァイオリンはどうにかして修繕をしたが、これから彼の許には次々とヴァイオリンが持ちこまれるようになつた

修繕の數が增すにつれて、宮本氏の研究も愈々深まつて行つた。比較研究も出來て、確實な自信がついて來た。依頼者には默つて加工してみた事もあつた。そしてその成績如何によつては更に研究を續けた。

この頃から宮本氏は一切



ドイツ留學中の吉原リユウ子女史

業醫免狀を持たなければならない！しかも當時は、排日案通過の囂々たるさ中だつた。日本人と云へば誰かの容赦なく白眼視する。女史は一度、二度、三度と受驗した。が、どうしてもパスしない。

或時、女史は試驗の採點法のあまりに不當なのを憤つて、教へをうけた某試驗官のドクトルの許を訪れて自分の點數を詳しくきいた。するとそのドクトルは『まあ、まあ』と云つたまま顏を反した。然し女史があまりに追及するので、彼は採點表を調べる風を裝ひながら、

『兎に角、全體の課目で一點だけ不足してゐます。』

と答へて、さつさと席を立つてしまつた。女史は泣いて口惜しがつたが、どうすることも出來なかつた。

＊

女性がこの世に一人立ちすることの難しさ！女史はそれをしみじく味つたのかもしれない。けれども壓しつけられ踏みにじられても、最後まで屈服するものか、といふ信念の力が女史にあつた。

ハワイの三年。女史は各地の淨土宗開教院を廻りながら、自己の研究の傍ら、日本語學校の教師、開教師の手傳ひ、等々によつてだんだん自己の信仰を培養して行つた。そして愈々自己の信念を强固にして行つた。

しかしその間に、女史の胸を片時も離れない母の死亡通知がもたらせられた。

『切角 志を立てて外國に來たものの、母ゆゑにと思つたことも昨日の夢……いつそこのまま歸らうか？』

母の死によつて、孤獨な冷たい海外生活が改

をあげてヴァイオリンに沒頭した。誰が何を云はふと、默々としてヴァイオリンの研究に從事した。先生も參考書もない全くの闇の世界の中で、明け暮れ、木の質や構造の研究に餘念がなかつた。宮本氏のこの苦心は、一歩一歩闇の世界を開拓し始めた。

製作の第一步

だが、今迄通つて來た苦心の道も、ヴァイオリンの修繕に止つてゐたので、まだ宮本氏の心の中にはヴァイオリンを自分で作らうとする氣はなかつた。

たゞヴァイオリンの表板の松は北海道の天鹽產のえぞ松が歐洲のアルプス產の松と程ど同質であること、又、裏板のもみぢ材は日本產が歐洲產より上等であ

人生の荒波を超えて

めて呪はしい氣がして來た。そしてひとり涙に暮れながら、何度歸國の感傷に誘はれたかしれなかつた。

だが開教區で一身を忘れて默々と働いてゐる開教師達の尊い姿。（おまへの一度や二度の不運が生活のどれほどの部分を損うたといふのだ？失敗と不幸を重ねて後に、はじめて生きる力が分つて來るのではないか！）女史はその師達がさう自分をさとすやうに見えて來るのだつた。

＊

女史は三年間のハワイ生活で僅かに貯へ得た旅費をもつて米國に戻り、ロスアンゼルスの佐山學順師を賴つて行つた。そして南加大學の醫學部に學び卒業した。が、この地でも開業醫の資格が得られなかつた。そこで邦人の多く働いてゐるアリゾナに移つて受驗したところ、たよの一回で通過したのである。女史の念願はかなへられた。その地で開業すると、文字通り獻身的に邦人衞生のために働いて働き拔いた！

排日、迫害、の米國の世論の中にも、人種を超えた魂の交驩は存在する。時のアリゾナ洲知事は、女史の頭腦と眞摯な働きを見込んで自ら奬勵金を提出し、女史を獨逸に遊學せしめたのであつた。ハイデルベルク大學の三年間。歸朝の土產に亡き母への餞として更に獨逸に留ること一年、遂にドクトルメヂチーネの榮冠をかち得て九年振りに祖國の土を踏んだのは昭和六年の七月であつた。そして東北帝大醫學部に一年間籍を置いて、遂に我國醫學博士の稱號を乘取つた。

＊

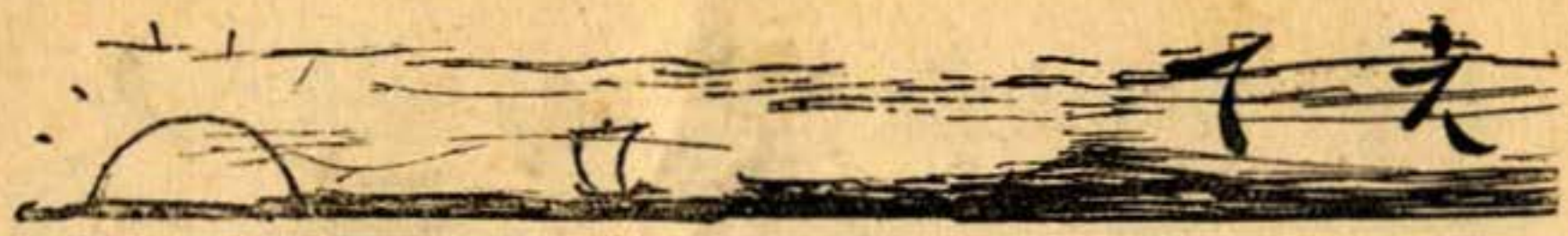
女史の歸朝後間もなく綠山勝友婦人會が女史歡迎會を開いた。女史は海外に渡るまへからその婦人會の一員だつた關係をもつてゐたのである。その席上で女史はしみじみと夫のやうに挨拶の言葉を述べるのであつた。

『私が出發の際に皆さまから送られましたこのお珠數。（女史は手を揭げてそれを示した）このお珠數のお蔭で私は無事に勤めを果させていたのです。女ひとりの辛い淋しい異鄕の空で、永い間勉强をし通すことの出來たのは、私の力からではない、みんな如來さまのお慈悲が

る事を發見したが、製作に必要な道具が全く自己流であつたから、製作の自信がなかつたのだ。この道具も貴い血の出るような苦心の作品であつたが、いゝか惡いかを證明してくれる人がなかつたから、不安でたまらなかつた。

この時、偶然にもエドワード、ヘロン、アレンのヴアイオリン製作に關する著書を手に入れた。精讀してもらつて讀むと、驚いてしまつた。——この書に出てゐる製作道具は全く自分が今迄使用してゐるのと同型だ。寸法迄違はぬ物ですらある。——

この書物こそ宮本氏を一新せしめた。今迄の不安もけし飛んでしまつて。急に自信が湧いて來た。



させて下すつたのです。私はどんなときもこのお珠數を繰りながら佛を念じ、自己の心を明るみに持出してゐました……』

そしんでゐる。

二年前に芝田村町にさゝやかな醫院を開き、助手も使はずに現在默々と女史は濟生の道にい

藝道ひとすぢ

—雪國の生んだ舞姫オリエ・津坂—

福田勝路

『添田さんて方、ほんとに淋しさうね。』

『いつもひとりぼつちよ。』

『お父樣がいらつしやらないのですつて。おかはいさうね。』

こゝは小石川東洋女學校の校庭の一隅。クラスの連中が休み時間に三人寄ると、いつも云ひ合せたやうに噂するひとりがあつた。

彼女の名は添田よし美。クラスきつての溫順しい、ダンマリヤだつた。彼女は別に意識して友達仲間からかけ離れた態度を取つてゐるわけではなかつたが、さういふ自己の孤獨をどうすることも出來ないのであつた。

＊

添田よし美は東北秋田の片田舍に生をうけた。寒い北國の冬は十月の聲をきくと訪れて來る。十一月に入るともう雪がふりはじめる。赤々と粗朶の燃えさかる爐端を親子三人が圍んで、幾晩も幾晩も聽いた雪の粒子の微妙な音。幼ないよし美の胸は、あの幽かな音いろの中に、何かしら幸福な夢が圓んでゐるのを感じるので

丁度この時、日本樂器社にもヴァイオリン製作の機運が動いて、宮本氏にヴァイオリンの試作を命じた。

好機來たれりと飛び立つ心で仕事にかゝつた。會社から歸宅後、一人部屋に閉ぢこもつて、コツ〳〵樂しみながら……。處女作、第二作と次々に作つて行つた。然し滿足な作品はなか〳〵出來ない。

お客の毀れたヴァイオリンを修繕しては、更に綿密な研究を重ねた。

かうして會社の餘暇に仕事を續けてゐたが、餘暇の時間ではどうしても研究が不充分になり勝ちであつた。

『どうも專心に製作にかゝらねば駄目だ。』

と會社を圓滿退社する

人生の荒波を越えて

オリエ・津坂

あつた。——しかし愉しい搖籃の唄聲は長くつづかない。現實は冬の夜空のやうに冷たい。彼女が八つになつたとき、父は家庭の事情で滿洲へ單身出かけて行つた。殘された母と娘は離れがたい故鄕に思ひをのこして上京する身となつた。

親戚の援助で不自由ながらもやつと母子の住居は落着いたけれど、何もかも目新しい都會の小學校に通ふやうになつた彼女の心に、だんだん巢喰うて來たものは片親がそばにゐない淋しさだつた。

『お父さんは今頃どうしていらつしやるか知ら？』

母親と二人きり、質素な夕餉の膳をかこんで、ともすればよし美の喉をついて出る言葉はそれだつた。

『えゝ、今に立派になつて戻つて來ますよ。でもすからそのときお父さまに恥かしくないやうにしつかり勉強して置きなさいよ。』

母親は靜かに娘をいたはりながら云ひきかせるのだつた。

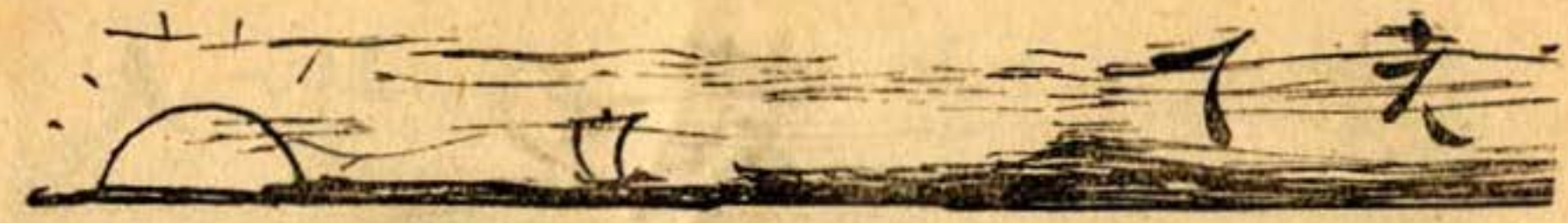
小學校から女學校へ。——年に似合はぬ落著いた子だといふのが、周圍の者達の彼女への評判だつた。母親はこの一人の娘を信じきつてはゐたけれど、事を決心した。そして遂に大正八年十二月、愈々ヴアイオリン製作に專注する爲に退社してしまつた。

遂に世界的製作家に

以來、ます〳〵研究に製作に餘念がなかつたが、苦心の第一號は大正九年六月に完成した。見事な逸品であつた。それから今日迄に約八十の作品が完成された。

日本に訪れた世界の名提琴家、例へば、エルマン、ヂンバリスト、ハイフエッツ等も、宮本氏製作のヴアイオリンには一驚して行つた。彼等は、

『日本製』のヴイオリンなんかは使用に耐えるものか。と厭な顏をして始は宮本氏製作のヴアイオリンを手にするが、一度、その音を



その娘のすくすくのびゆく姿のどこかに、弱々しい悲しげな影のあるのを見る氣がして、どうかして彼女の心を引き立たせたいものと腐心してゐた。學校から戻ると家事の手傳ひ、それから默々と好きな讀書。

『少しは氣晴しに活動寫眞でも見て歩いたらどう？』

そのたびに彼女は、

『いゝのよ、私のことは私が分つてゐるから心配なさらなくていゝわ、お母さん。』

さう母親に言葉を返した。

『でも何か思つてることがあるのだつたら、どしどし母さんに打明けて朗かになりなさいよ。』

『えゝ、でもいまは默つてゐたいわ、私はひとりで靜かに自分の足許を見つめてゐたいの、大丈夫よ。』

彼女はやさしい母親に心配かけまいと勢一杯の答へをするのだつたが、しかし彼女の弱々しい姿形の中に、その大きな瞳だけが不釣合の輝きを示したのを、母親ですら未だ氣づかなかつた。

*

昭和四年、今の松竹少女歌劇團の前身、松竹樂劇部が女生徒を募集した。添田よし美は自己のスタートをはつきり見極めた。

だが彼女の入部希望を耳にした親戚の人々は悉く反對の聲を大きくした。『墮落のはじまり』『親戚の面汚し』等々の罵言が嵐のやうに渦巻いたのであつた。恩ある人々への義理と自己の進路への情熱の間の深い深い溝。彼女は考へて考へぬいた。が、自己の意志は微動だにしなかつた。彼女は泣いて母親に訴へた。その娘の眞摯な氣もちに、つひに母親は彼女の希望を抱き締めてやつたのだ。

『お母さんさへ味方なら、たとひ世間全體を敵にまはしてもかまはない。』

彼女のどこからそんな強い言葉が出たのかしらない。彼女の信念は金鐵のやうに強固だつた。

そして女學校四年を拋つて、藝術の道にとび

聞くと、急に笑顏になり、

『こんな立派なものが出來るとは夢にも思はなかつた』

と讃歎おく能はざるものがあつた。はては自參のヴァイオリンの修繕を賴む始末である。かくてヴァイオリンの音と共に、今ではヴァイオリンの名は世界に喧傳され、遠く外國からわざ〳〵もとめに來る人すらある。

和四年の秋に來朝したロシヤの名提琴家ホリス・ラス氏は日本滯在の殘り少ない日數をも惜しまず、宮本氏製作の四十二號のヴァイオリンを得んが爲に宮本金八氏の許に日參した。一度彈いた四十二號の澄んだ音と落着いたニスの色とは、一時もホリス・ラス氏の心

人生の荒波を越えて

込んだのだ。添田よし美は津坂織枝となつた。

＊

しかし試練の路は荊棘の路だつた。折から公演の『新宿行進曲』に初舞臺してからの彼女は、いつもいつもほんの端役。十歳くらゐのとき、二ヶ月許り習つた日本舞踊が役立つて僅かにその方に役らしい役を得るのみであつた。同時に入つた人達が追々華やかな光を放つて行く中に、ひとり彼女だけはこの一線上を彷徨してゐた。

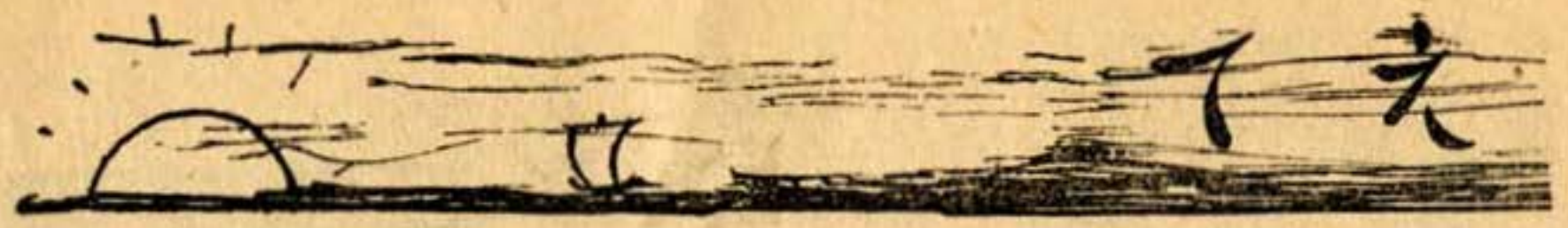
彼女は屈しなかつた。藝術も所詮は宗教のやうに、最後の丘こそ望みなのだ。彼女はこの丘目指して、蔭に日向に涙ぐましい努力をつづけた。

入部してから足掛け四年、昭和八年に入つてやうやく彼女の名前は世間に擴まつて來た。その年の夏、ターキー水の江と共に主役を演じてゐた『夏の夜の夢』公演の中途、いや彼女は代役を三田綱代にまかせ、大阪松竹樂劇部から去らなかつた。どんな條件を持ち出しても手に入れたいと、日參したのであつたが、滯在少い日數で遂にその望を達する事が出來なかつた。斷ち難い名器への情熱を手紙に殘して、淋しく日本を去つたのである。

オリエ・津坂の舞臺姿(右側)

×　×

系統だつたヴァイオリン製作の技術もなく、製作家もゐなかつた日本に、か樣な名人が輩出して、世界各國の名提琴家から驚がれるのは驚くべき事である。勿論、天分にもよらうが、よく獨立獨歩、自己の志を押し通した計り知れない努力こそ、宮本氏の聲價を高めしめたものである。名聲は一朝にしては上らない。不屈不撓の精神、云ひしれ



當るはずのオリエは？——然し彼女は冷靜だつた。彼女は自分の信ずる歩みを運んだまでである。

『私には私の考へもありますから。』

あわたゞしい周圍をよそ目に見ながら、歸京後の彼女は默々と家に閉ち籠つて中立狀態をつゞけた。

爭議が終つて、樂劇部は松竹少女歌劇團と名稱も新しくなり、第一回公演『アベック・モア』の蓋を開けるに至つた。時にターキー水の江は謹愼を命ぜられ、替つてオリエ津坂が第一線に乘出して來た。と同時に、心ないファンの多數は彼女に非難の聲を浴せた。

『ヘン、利巧ぶつて爭議に加はらず、ひとりで得をしてゐるよ！』等々。

彼女は脣を噛んで舞臺に出た。そして觀客の白い眼を浴び、嘲笑を受けて、踊つた。熱演した。彼女は暗い舞臺裏で何度泣いた事であらうか。然し自分の心も知らず罵り廻るファンを恨む氣には到底なれなかつた。

自分が足りないのだ、自分の努力が！誠意

*

つひに彼女の舞臺精進は酬いられた。いまや松竹といふ一つの世界の中だけではなく、オリエ津坂の存在はレヴュー界全體にとつてなくてならないものとなつた。

父を失つて現在母一人子一人、何かにつけて淋しさの滲く毎日ではあるけれど、彼女の心境は圓滿そのもののやうに、嬉かに藝術の道を邁進してゐる。

この年も彼女母子に幸多かれと祈る次第である。

ぬ苦心、これこそ宮本氏が歩いて來た偉い人生である。（濱川一郎）

下級社員から 三井の筆頭總務に

名にし負ふ天下の大富豪三井王國の一翼である三井物産の筆頭常務となつた井上治兵衞氏は文字通り人生の荒波をくゞり抜けた人である。學歷と云へば僅かに京都市立の商業を出たのみで、父には早く別れ、誰一人知つた人もなく、三井の下級社員から振り出した。「人が十時間働くなら俺は十二時間十三時間働かう」これが井上氏の處世術であつた。遂にこの仕事の誠心誠意は、怒濤の如く身邊に渦巻いた人生の荒波を見事に乘り切つたのである。

畫僧月僊

江藤澂英

はしがき

脫俗高風で近時頗にその名聲が謳歌憧憬せられてゐる。

傳記

尾張名古屋、櫻町に丹下屋といふ味噌商があつた。そこの主人丹下八左衞門の一子として、寛保元年に呱々の聲をあげた月僊は、七歳の時、その頃一世の高僧として名高かつた、名古屋圓輪寺の關通上人の許に遣られて出家得度をしたが、十餘歳にして笈を負うて江戸に赴き、增上寺の學寮に落着いて專ら研學に精進した。研學の傍、その稿料で寺門の復興を立派になし遂げた、寂照寺の中興開山に月僊上人といふ人がある。月僊上人といふよりも、一般には乞食月僊といふ通り名で知られてゐるが、淨土宗では緣山寶松院の忍海上人や、京都報恩寺の古鵬上人と並び稱される所謂三畫僧の一人で、その一生涯が頗る善行逸事に富み、その畫格も決して陋しくはなく、

彼は櫻井雪館の塾に通つて畫法を學んだ。增上寺の學寮では妙譽定月大僧正から殊遇をうけた。定月大僧正は增上寺の第四十六世で伊勢二見の出身であつたが、當時貴名の高德で毎に列侯貴紳が、僧正の許に輻輳したとのことである。彼の月僊なる雅號は定月僧正の一字を頂いたもので、僧正の推擧で大名諸侯にも交遊の途を得たとの

ことである。その後京都に移つて洛東小松谷に幽居し、圓山應擧について技を磨き、自ら支那元明の古畫に法ひ、蕪村や雪舟にも參じて、遂に一新機軸を出すに至つてゐた。その頃、知恩院は第五十七代の檀譽順眞大僧正の世であつたが、月僊は檀譽順眞大僧正から非常な愛顧をうけた。時に伊勢の宇治山田の寂照寺は、無住荒廢に委せられてゐたが、檀譽大僧正はこれを歎いて月僊を薦め、寂照寺の住持とし自ら金襴の袈裟を贈つて、その再興を懇囑せられた。月僊三十四歳のときである。

寂照寺山門

寂照寺に來住した月僊は、檀譽大僧正の恩命を畏んで、常に一室に端居して修禪と讀經と繪畫に精進し、日夜畫筆を運ばせて潤筆料の蓄積に餘念がなかつた。かうして彼は山門、本堂、庫裡等一切の改築を成就し、更に經藏を建てゝ一切經を收め、彼自らの畫稿の料を以て、よく寂照寺の復興を完成し、寺門の内外は全く面目を一新したのである。のみならず寂照寺の永代維持のために金五百兩を奉行所に預け、尙内外二宮の貧民救恤の資金にと金壹千五百兩を官に供托し、その他道路の開鑿、橋梁の改修、火災の救護、盲人の愛愍など、幾多の社會公共事業に奉仕して、文化六年の正月十二日、寂照寺でその生涯を終つてゐる。世壽六十九歳、法臘五十四で、本年は滅後百二十八年に相當する。

落涙で描く

月僊は生まれながらに畫をかくことが好きであつた。關通上人の許へ參じたのが七歳であつたが、暇さへあれば畫をかいてゐると風で、流石の關通上人も愛想をつかされ、佛道修行の戒めにと、ある日境内にある觀音堂に月僊を幽閉せられたのである。ところがお畫時になつても一向騷ぐ樣子もない。上人が靜かに足音を忍ばせて、堂内を覗いて見られると、豈計らむや、月僊は佛前の花立を倒にして、その水で板の間に上人が拂子を振り上げてながら、自分を追ひ驅けてゐられる戲畫をして、夢中になつてゐたとのことである。ま

た或時は上人が懇々と訓誡されてゐると、彼は椽側に手をついて首をうなだれ、初めの間は殊勝に涙を流しながら、師言に耳を傾けてゐたが、いつしか落涙を指先にうけて牛の畫をかいてゐたといふ。かやうな次第で關通上人も遂には彼に畫道を許されたとのことだ。

片手で屏風一双

關通上人の許を辭して、江戸に出てからは正式に畫道にもいそしんだが、後に京都に移つて小松谷に幽居の頃である。彼の三十歳頃の話と思ふが、美春と共に妙法院の眞仁法親王からの御懇望で屏風を揮毫した。一日漸く完成をつげて薄暮幽居に歸ると、折から一人の來客が彼の歸坊を待つてゐた。さうして妙法院の屏風と同構圖の揮毫を懇望したのである。ところが月僊は卽座に快諾して、直ちに左手で燭を乘りながら、一氣呵成に書き上げて、その人を唖然たらしめたとのことである。

扇子で寺を建てる

月僊が大變健筆家であつたといふことにこんな挿話がある。彼はよく芝居見物に行つたが、幕の間には拵へて來た白扇へ次から次へと筆を走らせて、歸途には澤山な扇面を仕上げて持戻るといふ風で、現に扇面の遺作が澤山ある。また寂照寺の本堂再建の折など、彼は賃金はすべて其日拂で勘定したが、夕方作事の終る頃になると、自畫自讃の扇子と鳥目を兩方に並べておいて、どちらでも好い方を持つて行かしやれと云ふと、大抵の者はお金を持つて歸つたが、中には偶々扇子を持つて行くものもあつた。ところが扇子はすぐ賣れて行き、しかもそれが賃金よりも値がよく、これを傳へ聞いた京阪地方の書畫屋がやつて來て買ひ取るといふ始末で、後には誰一人として金に目をくれるものはなく、扇子ですべて事が足つたといふ。毎日晝食頃になると、月僊は親しく普請場を巡見して、大工の手傳に御苦勞々々と勞ひながら、扇子かな、もう書けたよ、納は皆の仕事を半日で濟したぞと云つて、呵々大笑したとのことである。

伊勢詣りのお土産

寂照寺は伊勢參宮者が遊樂の書入地として、昔から有名な古市の華街の中央にあつた。彼は畫の間は專心に揮筆を揮ひ、夕方になるとその作品を弟子達にもたせて、諸國から來る參宮者を旅宿に訪れさせて、一枚二百文宛で賣り歩かせた。當時彼の畫はかなり評判が高くよく賣れ、それ等が各國に土產として持ちかへられては、更に持てはやされ方々から註文が來るやうになつた。また年々初多に全國各地に派遣される伊勢の暦賣りの進物用にも、彼の畫が澤山頒布されたとのことである。ところが彼は畫筆に渾身の勇を鼓する一面には、內心に秘むる大願の果遂があつた。それがためには彼は毀譽

褒貶を外に、只すら畫稿の料を蓄積するに餘念がなく、人から依頼をうけると先づ畫料をとり定め、その多寡に依つて粗密大小等を區別したが、その差別が餘りに巧妙なので古市の人は誰でも彼の畫を一見すれば、これは何程の畫だとすぐ評價したとのことで、かうした事柄は彼の世評に決してよい影響を齎さず、貪慾坊主、銅臭畫家、乞食月僊、と惡罵が浴せられるやうになつたのである。

丹精の畫が遊治郎の褌に

月僊の挿話中尤も人口に噲炙されてゐるものであるが、或る時古市の遊女から畫を依頼された際、潤筆料のことになると、遊女は何程でも價格はいとはぬから充分入念にとのことであつた。彼は直ちに金百兩と約束をして、丹精をこめて頗る細密なものを描き上げ、いそいそと自らこれを遊女の許に持參に及んだのである。折から遊女のところには某大盡が遊

飲中八仙（月僊筆）

興の眞最中で、かねて月僊が金錢のためには奴隷のやうだといふ惡評を聞いてゐたので、遊興の座敷に月僊を引見した大盡は、早速百兩の金包を投げ與へると共に、無遠慮にも素裸になつて、自分の纏うてゐた褌を床間に掲げ、月僊の持參した出來上つたばかりの彩畫を腰間に着けて、「雅軸を得ずと雖佳裩を得たり」とて、口を極めて罵倒したのである。しかし月僊は默然として一語も發せず、平然として金包を懷中に納めてその場を立去つたといふ。いかに他日の聖業完成のためとは云へ、かうした大なる侮辱に對しての忍受不悔の態度には、涙ぐましい尊さが感ぜられる。

かくして彼が日夜心血をそゝいだ畫稿の料は、粒々辛苦の蓄積を得て、遂に寂照寺は眞に輪奐の美を整へて、檀譽大僧正の懇囑は立派に達成せられ、尚且つ救世利民の聖業がなし遂げられたのである。

今より百二三十年前に於ける人相學の大家水野南北先生の『相法極意の自序（摘要）』によれば、

『予多年觀相を業とせり、而も食事の貴きことを知らず、唯相貌のみによりて吉凶を辨せり、故に富貴長命の相を具へながら貧窮短命の者あり、貧窮短命の相ありて實は富貴長命の者もありて、判斷の明白を缺くこと少なからざるを遺憾とせり、一旦豁然として食事の貴きことを覺り、人の吉凶禍福夭壽は一に飲食を愼むと愼しまざるとに由ることを明かにするに及びて後は、予はつとめて飲食の愼しむべきことを弘く衆人に傳ふることとせり、而して之を實際に試みたる人につきて驗するに、一箇年前には相貌上大難あるべかりし者にして斷然飲食を愼しみたるが爲に之を免れしのみならず、却つて吉事に遇へる者、或は生涯貧窮の相ありし者にして飲食を愼みたるが爲に相應の富貴を得、今は大に世に用ゐらるゝに至りし者多く、又年來病弱にして短命と判ぜし者にして、朝夕飲食を愼みたる爲に心身健かに長壽を保てる者亦少からず。凡そ斯くの如き類擧げて數ふべからず、爾來予は人を相するに當り、先づ飲食の模樣を聞き、之によりて生涯の吉凶禍福を辨ずるに萬に一つの誤りなきを認め、人の運命は全く飲食の如何にあるを確信し、之を以て予が相法の奥義と定めたり、且予は之を口舌の上にて人に勸むるに留めず、予自身之を率先實行し、生涯米飯を食はず、唯一日に麥一合五勺を食するのみ、酒は予の大に嗜む所なるも、之を節して一日一合と定めたり、是れ嘗予一人の爲のみならんや、世の心ある人々が此の書を參考とし、一日も速かに飲食を愼しみ、將來の立身出世と長壽を得給はんこと、予の切望して止まざる所なり』（文化九壬申年　水野南北居士謹誌）とあり。

實に飲食は人生最重要のものゝ一つであつて其の最もよきものを撰ばなければならぬのに、人は唯其の外觀と其の挑撥的又は誘惑的

味覺によつてのみ之を撰び、其の質の良否は之を等閑に附して居る。併も其の量の多きを以て良しとし、其の少なきことの良きを知らない。

其の質のよきことを云へば、我が國の玄米は質の點より云うても榮養の點より云うても實に世界無比の最優良のものであり、白米と云へば之に反し、質より見れば變質米であり、榮養の點より見ても世界最劣等の食物であることを知らない。

白米は變質有毒性のもので脂肪劣く、蛋白は變質し、ビタミンは缺亡し、アルカリー作用なく、無機分に乏しく、生命素と稱する活動性類脂體もなく誠に仕方のない食物で之を食すれば子供は小兒病になり、母親が之を食すれば子に乳兒脚氣を起し、壯年者が食すれば潜伏脚氣を起して作業能率が下り、疲勞し易く、胃腸病になり、消化力が減し、痲痺症を起し、酒煙草茶珈琲等の刺戟物を好む樣になり、神經衰弱を起し、高價の副食物を要求し、其の結果經濟に窮する樣になり、精神にも變態を起し憂鬱、悲觀、忿怒、狂態、精神異狀をも起す樣になり百惡之に伴うて來り、國家の將來、民族性の未來に想到すれば速かに玄米食に歸るべきである。

玄米は之に反し總ての養分を有し足らざる所なく餘る所なく完全無比にして母乳に宜しく、小兒に宜しく壯年に宜しく老年に宜しき食物にして美味且つ經濟的にして、小食に適し副食の簡素に適し、水野南北先生の相學の主旨に最もよく適する榮養品たること最早爭ふべき餘地なき所である。

之を炊くのには大豆小豆を煮ると思うて靜かに長く之を煮るのである、即ち始めは玄米に大豆や小豆を混じて之を煮ることである、大豆や小豆が柔かくなる迄氣長に煮れば玄米は皆柔かに煮えるのである、水は何遍も加へて好きな柔かさに炊き上げればよく、之を練習すれば後には上手に炊ける樣になる。

最も進歩したし
純正頭腦藥

頭痛で頭がワレル程カンカンしたり、眉間の邊りが針で刺される樣にチクリチクリと痛んだり、又頭痛と迄行かなくとも、何となく頭が重くてボンヤリしたり、クシヤクシヤしたりイライラしたり、或は過度の讀書、執務、裁縫、徹夜映畫、觀劇後等で心神の疲勞を感じた時等、スグに「ノーシン」を服用せられよ。今ノーシンをのんだ事さへも、思ひ出さない程キレイに痛みは消え失せて、それこそ暗闇から拔け出て來た樣に頭はハツキリと明快になり、思ふ存分、愉快に、事務勉强、讀書、家事、裁縫等を續けることが出來る。論より證據スグ試みられよ。藥價は三十錢、五十錢、一圓。全國の藥店やデパート藥品部にて販賣す。

頭痛に
ノーシン

頭痛に一番
胃腸に無害

名古屋市東區京町
製造元　荒川長太郎合名會社

信仰相談

（解答）中村辨康

心の修行

（問）臨終のことを考へつめますと、薄氷を踏む思ひにて、何となしに淋しき感じに堪へず、泰然自若として居られません。私ごとき者が臨終に際しましたら虚空を摑んで苦しむこと必然。幾度聴聞してもその時ばかり、眞の安心が得られません。だのに心の親戀しき情は寸時も忘れられず、已むに已まれぬ已が心の處置に困つてゐます。如何したら宜しきや、お聴かせ下されたく、お願申します。

（奥・若存生）

（答）信仰を話丈で獲得しようとする事はいけない事で、それでは何時迄たつても確信に到達する事は出來まいと存じます。宗教の御話を聞いたり、本を讀んだりするのは、恰度藥の功能書を讀んだり聞いたりするやうなもので、藥の功能を能く知つて居るからと云つて、それで病氣が癒る筈がないのと同じです。古來から「聞思修」と云つて聞くと云ふ事も必要ですし、思索すると云ふ事も必要ですが、最後は實行することが一番大切だと云はれて居ります。それは宗教ばかりではありません。何事でも實行がなければ實現しないものです。例へば商賣をする事にしても「擇法」と云つて何の實踐も　初め經驗ある人から大體の智識を得て、それを自分でもよく考へ、サテそれを實施して行く。實行する內に色々な經驗をも積み段々成功するやうになります。それと同じやうに信仰を得るにも「擇法」と云つて何の實踐を行ふ可きかを決定する事が最初の行き方ですから、念佛なら念佛とハッキリきめて、念佛の經驗者から指導を受けそれを實踐して行くのが順序でせう、また其實踐もちつとはかり行つて見たが、何の變哲もないからと云つて、あつちの宗教を突衝き、こつちの信仰を突衝くと云ふやうでは、異服屋をやつたが面白くないから直ぐ洋品店に替り、それも思はしくないから硝子屋をやり、それも駄目だと云ふので菓子屋を初めると云ふやうに麻胡付いてばかり居たのでは成功する筈もないやうに、やりかけたらトコトンまでやると云ふ意氣と決心とが無ければなりません。また貴君は親御様が戀しくて忘られぬと云ふ御話ですが、誠に美しい御心の程を御察し致します。誰でもさうありたいものです。然し唯だ親御様を戀しく思ふ丈では親御様も本當には喜んで下さらないかも知れません。貴君が本當の信仰に依て、折角の人生を感激と元氣とで正しく力强く生きて行く事が出來た時、親後様も嘸ぞ本當に喜んで下さることでせう。貴君がまだ定まつた實踐を爲さず、唯話を聞いて歩かれることが、若し「擇法」の爲でしたら必要な事ですから、敢て悲いとは申しませんが、それよりも一日も早く實踐に取りかかつて確信にまで到達なさるやう御祈り致します。それが一番大切な事であり、近路でも

あるのですから。さうしたら御心配になる臨終に對する恐怖心も恐らく霧が朝日にあつて消えるやうに消滅する事でせう。私も薩午ら貴君が確信を得られるやう御祈りします。

絶對の幸福

（問）私は絶對の幸福、絶對の樂と云ふやうなもの、卽ち不幸を伴はない幸福とか、苦を伴はない樂はないと考へますが、淨土とか極樂には、どうして樂ばかりの世界、幸福ばかりの世界があるのでせう。其の所をどうかお教へ下さい。（佐賀・中溝文夫）

（答）普通の常識で云ふ苦樂は仰しやる通り、相對的なもので、絶對的な樂と云ふことはあり得ません。佛敎では、かうした樂も亦苦なりと云つて居ます。夫れは所得を要求して居るからで、私達に自我觀念のある限り「無所得」の氣持にはなり得ませんからです。私達が樂を要求することは恰度波のうねりをくゞり抜けくゞり抜けするかのやうに、苦樂相交雜して果しなくそれを繰返して居る丈です。さうした相對的な苦樂を超越した世界、或は生死を抜け出た世界、若しくは煩惱の無くなつた世界、其處にのみ本當の樂があると云ふので「淨土」のことを「極樂」とも云つて居るのです。だから「淨土が樂ばかりだと云ふ事を聞いて、樂をしたいと云ふ氣持から往生を願ふならば、それは飛んでもない間違ひであります位で、相對的な要求をしない積極的な精進行爲の中にのみ絶對的樂があると申します。それは私達の現在生て居る經文もあります。だから「樂」を要求する氣持を叱りつけて、念佛に依て絶對の「無量壽」の中に我が命も預け込んで仕舞へば屹度絶對樂もあり得る筈で、其境界を涅槃淨樂の世界とも云つて居ります。但し涅槃にも有餘と無餘との區別があるやうに、有餘卽ち此身體がある以上、身體の約束としての感情卽ち苦樂を感じて行くこゝろを無くなす譯には行きませんから、何うしたつて相對的な苦樂は感じて行かねばなりません。然し之れだからと云つて、信仰ある人と無い人とでは感度の上に大變な相違がありませう。卽ち信仰なき人は相對的な樂しか知つて居りませんから苦が多いのですが、信仰ある人は「苦以て苦とするに足らず、樂以て樂とするに足らず」と諦觀し、苦樂を乘り越えた大きな樂を目指すことを知つて居るからです。

頗惱の無くなつた世界、其處にのみ本當の樂があると云ふので「淨土」のことを「極樂」とも云つて居るのです。だから「淨土が樂ばかりだと云ふ事を聞いて、樂をしたいと云ふ氣持から往生を願ふならば、それは飛んでもない間違ひであります位で、相對的な要求をしない積極的な精進行爲の中にのみ絶對的樂があると申します。それは私達の現在生て居る經文もあります。だから「樂」を要求する氣持を叱りつけて、念佛に依て絶對の「無量壽」の中に我が命も預け込んで仕舞へば屹度絶對樂もあり得る筈で、其境界を涅槃淨樂の世界とも云つて居ります。但し涅槃にも有餘と無餘との區別があるやうに、有餘卽ち此身體がある以上、身體の約束としての感情卽ち苦樂を感じて行くこゝろを無くなす譯には行きませんから、何うしたつて相對的な苦樂は感じて行かねばなりません。然し之れだからと云つて、信仰ある人と無い人とでは感度の上に大變な相違がありませう。卽ち信仰なき人は相對的な樂しか知つて居りませんから苦が多いのですが、信仰ある人は「苦以て苦とするに足らず、樂以て樂とするに足らず」と諦觀し、苦樂を乘り越えた大きな樂を目指すことを知つて居るからです。

遣唐船異聞

小島健三作

貫三郎畫

一

葉を落とした柳の枝が、楊子江の空ッ風に女の亂れ毛のやうに、縺れあつてゐた。少し前、飛びたつた水鳥が、果てもない大河の夕雲に溶けこんだ後は、暗憺とした冬空の下に、岸邊の枯草が、ざわめき立つてゐる。

日本へ歸る遣唐船が二艘、浪に舷を叩かれながら、出帆の用意に忙しい、安藝號の方は、人足や學問僧が、かけ聲勇ましく、積荷をしてゐるのに、周防號の方は、副使五位大伴古麻呂が、もう乘込んだのであらう。毛氈を持つた從者が、頻りに、甲板の位置について話し合つてゐる。

「船の檢査ぢや。暫く待てッ。誰もその場を動くなッ！」

上司らしい者が、十五六人の官吏をつれ、血相を變へて躍りこんで來た。氣の早いのは、拔刀をしてゐる。

「龍興寺の鑒眞が、乘つてゐるに相違あるまい。隱しだてすると、遣唐船を沒收するぞッ」

上役の雲つくやうな大男が、虎のやうな眼を怒らして、呶鳴つた。

だが、甲板の人々は、眉一つ動かさず、出帆の手廻りの道具を片付け、ふり顧ともしなかつた。役人らは、獵犬のやうに、甲板の道具を檢査しだした。

陽が曠野に沒してしまふと、今まで荒れ狂つてゐた風も何時やら止んで、夕闇が、刻々に河面を暗くして行く。

「何處に隱したんだ。譯語使がゐぬかッ」

唐の役人らが、こんなに立騷いでゐるのに、誰ひとり應對する者さへ出て來ない。役人らは、手荒に箱の蓋を放り投げ、布をひッ外して、楊州の大德、鑒眞を搜し出さうとした。

甲板を隈なく檢査してから、下甲板に、この一群が、旋風のやうに降りて行つた　役人が一人殘らず下甲板に降りてしまふと、今まで、檣の周圍に四五人立働いてゐた、學問僧と、副使の位置をとりきめにかゝつてゐた船事、それから空模樣を心配げに眺めてゐた知乘などが、一齊に顏を見合はせて檣のところに、吸ひつけられるやうに集まつて來た。

彼等の顏には、言ひ合はせたやうに、不安の色が漲り、口を利く者さへなかつた。亂暴に駈け廻る役人の沓音、狹い階段にぶッつかる刀の騷々しい音に、甲板の人々の眉は、刻々に曇つて行つた。

船艙のはてまで、荒したこの役人らは、副使の部屋の前に立つた。譯語使などは、役人の劍幕に驚いて、目を睜つてゐるだけである。もう殘つてゐるのは、この副使部屋だけで、唐の役人らは、意氣まいて亂入しやうとしてゐる。

だが、狹い入口に、學問僧がひとり、冷靜な眼で、詰め寄せる役人を眺めて立つた。

「どけッ！どかぬと蹴殺ろすぞッ！」

しかし、顏色一つ變えず、凝つと腕くみをして動かうともしない。

「鑒眞を秘かにこの船に乘せてゐる筈ぢや。上官の命令でとり檢べる。どけと言つたらどかぬかッ」

この時、學問僧は、組んでゐた腕を下げて、靜かに口を開いた。

「この部屋を、副使、大伴古麻呂さまと識つて檢べるのか、それ共知らずに亂入したのか、大使藤原淸河さま長安の都に客死なされてからは、大伴さまが、大使と同樣、その大使は日本を代表して來てゐるのだ。その代表者の部屋を拔刀で、脅迫するとはなに事ぢや。無禮者ッ！」

今年の新年の式に、新羅の使者と、日本の使者とが、席次のことで爭ひになり、藤原淸河が、諸國の使臣の前で堂々日本の威武を示して、最上席の位置についたことを、役人らは知つてゐた。當日頃は、默々としてゐるが、一度怒れば、なにを仕出かすか判らはい日本の使者に、役人らは內心恐れてゐたのだ。

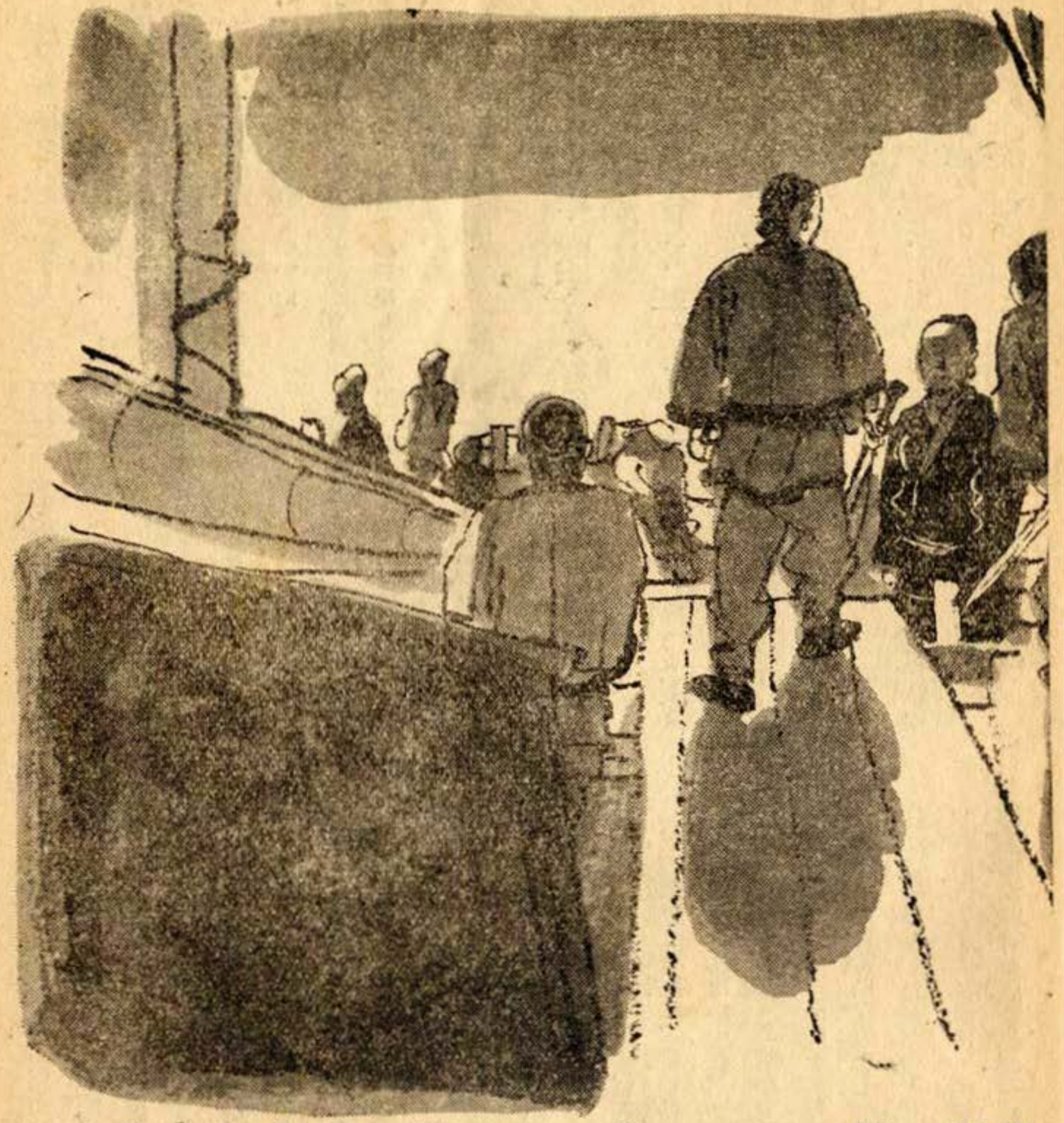
「鑒眞などこの船に乘つてはゐぬッ。たつて、檢べるといふなら、日本の遣唐船として面目が立たぬ故、長安の役所で黑白をつけやうか。一應の許しも得ず、遣唐船に亂入し、役人の職が勤まると思ふかッ。白痴めッ」

眼を怒らして叫んだのは、興福寺榮睿の弟子、淸榮だつた。

「いや、たしかに乘つた筈ぢや。見た者がゐるッ」

眉の濃い女のやうな美しい若僧だつたが、槍のやうに鋭い淸榮の氣魄に壓されて、たぢ〳〵になつてゐた役人、これではならぬと押し返へしたのである。

「それなら——この部屋を搜し、若し鑒



眞がゐない時はどうするか。それから訊かう」

清榮は、さう言ひ切つて見たものゝ、息づまるやうな憂苦が、身體中の血を、一時にとめてしもうのではないかと思つた。この時、

「清榮なにを騒いでゐるのぢや」

部屋の中から聲をかけたのは、師匠榮睿だつた。

「唐の役人が、船中を檢査てゐるのです」

部屋の師匠にさう應へて、役人らを睨めつけ乍ら、清榮は、

「大伴古麿呂さまが、こゝお出でになる。早々に立ち去れッ。話があるなら、長安の役所で訊かう。退かぬと、こつちに覺ごがあるぞッ」

火を吐くやうな清榮の言葉に、役人らは、ぶつ〳〵言ひ乍ら上陸して行つた。

榮睿と、清榮は、遠去つて行く役人

の音音を、凝ッと耳を澄まして聞いてゐた。大安寺の普照は、堪まり兼ねたか、清榮の側に駈けよつて、

「清榮、普照は、この通りぢや。有難う」

普照の眼には、感謝の泪が輝いてゐた。

部屋の一隅の毛氈が、むく〳〵ッと動きだしたとき、清榮は、靜かにその毛氈をとつてやつた。

「鑒眞さま、さぞ御窮屈でござりましたでせうもう。ご心配もありませぬ。ごゆるりとお願ひ申します」

そこへ、灯をもつて、ひとりの僧がは入つて來た。薄暗いながら大德鑒眞の顏が門に浮んで、鼓を洗ふ浪の音が、寂しく聞えて來る。

「法進、曇靜、思託、義淨など、船に乘りましたかのう」

響のある鑒眞の聲だつた。

「たゞ今箱にお入れして、運んでをります。なにか、ご用でもござりますか」

榮睿は、すゝみ出て、鑒眞の言葉を待つた。だが、どうしたのか、鑒眞は頂垂れたまゝ、

「いゝや……」

と、應へた切り默してしまつた。重ねて、榮睿が、顏を覗き込むやうに、膝を進め、

「ご用でもござりましたら、なんなりと御申つけ下さりませ」

僧の聲は、震えを帶びてゐた。

「いや……清榮どのゝ態度を、弟子たちに見せてやりたかつたのぢや。毛氈を被つて、拙僧は凝ッと話を訊いてゐるうちに、萬難を排しても日本に渡る決心をした拙僧の覺悟に誤りがなかつたことを、清榮どのが實證して呉れたやうな氣がして嬉しかつた。唐の役人らは、こゝまで踏なこみ乍ら、日本の學問僧ひとりに鑒眞を奪はれてしまふたのぢや」

高僧の顏を、寂しい陰がさッと流れた。

興福寺の榮睿と、大安寺の普照のふたりは、日本に律宗をひろめるには、どうしても鑒眞を日本につれて行かねばならないと、堅い決心でふたりは、揚州の龍興寺を訪づれ、懇願したのだが、頑として、きゝ入れなかつた。また唐としても、鑒眞を失つたら、太陽を奪はれた世の中になることを、彼自身あまりにもよく識つてゐたからだ。だが榮睿と普照は、帝の命をうけて來てゐるだけに、そのまゝ引込んではゐられなかつた。

「大和尙、もし吾々の願ひを受け入れなかつた時は、帝に對して申譯するだけです。一間を拜借願ひたい」

榮睿は、普照に眼交をして、一室にひき退つた。鑒眞は、この意氣に心を動かしたのだつた。生命を捨てゝまで、自分を日本に連れて行かうとするふたりの心意氣に、鑒眞は日本渡來を覺悟して、唐の上司に許可を願ひ出たのだが、これは許されやう譯もなく、その

日から龍興寺に役人が出張る羽目になつた。

日本の僧ぼ勿論だが、鑒眞にまで役人の眼が光りばし、高僧の一擧一動に、役人の疑の目がつきまとつた。

さうなると、鑒眞の心は、いよ〳〵日本に傾きかけ、危險を冒してまで脫出を決意し、有意の弟子五十人ほど選んで遣唐船に乘込んだのである。

その夜は、星一つない氣味惡い暗澹とした晩だつた。河口に浪が立つてか、血を吐くやうな夜鳥が、悲しい聲を投げて、船の上を曉野の方へ飛んで行く。

鑒眞は、衣の袖を寒風に飜らせながら、ぢツと故國の方を眺めてゐた。今宵かぎりに、再び見ることの出來ない故鄕の空を、あかず眺めてゐる高僧の頰を、熱い淚が寂しく光つてゐた。

あの夜から、幾日航海をつゞけたのであらう。彼等の眼に映つるものは、際涯ない大海原と、荒寥な風濤の騷音ばかりであつた。

唐僧の心に描いてゐた日本の國も、憧憬の對象も、ともすれば單調な航海に破壞され勝であつた。

彼等の仲間は、つゞいて倒れ、倒れては死んで行つた。夢に幻に描いてゐた憧憬の日本へ渡る喜悅よりも、自分の仲間のやうに、潮風や寒さのために、死んでしまふのではないかと思ふ恐怖の方が、遙に大きかつた。

鑒眞侍從の詳彥が死んで、三日目、榮睿が苦悶しだした。

「お師匠さま、しつかりして下さい」

淸榮は、堅く手を握つて、叫んだ。同じ使命で、渡唐した普照は、

「榮睿どの、帝の命をまだ果たしませぬぞ。氣をたしかに、お持ちなされッ。貴僧とふたりで、鑒眞どのを奈良にご案內申し、帝へご報告を濟ますまでは、めつたなことがあつてはなりませぬ」

だが、榮睿の身體は日ましに衰弱して行つた。

「淸榮、奈良の都が見える。招僧には、はつきりと見えて來た」

鑒をいふ師匠の手を、淸榮はぢツと離さなかつた。

「お師匠さま、こゝまでご苦辛をなされて……」

淸榮の聲は、淚に曇つてゐた。悲しいものが、腹の底からこみあげて來て、咽喉が、身體が、石になつてしまふのではないかと思つた。

「淸榮、なにを泣いてゐるのだ。普照との喜んで下され。如來さまが、この榮睿をお迎へに見えられた。みんな……みんな極樂淨土に行く榮睿を悅んで下されー」

痩せ衰へた榮睿は、眼を大きく瞬つて、今までにない判然とした聲で言ひ終つた時は、もう死の轉機をとつてゐた。

氣丈な淸榮が、人が變つたやうに、いつまでも師匠の死を嘆き、氣ちがひのやうに、師匠の死屍を抱き暮した。

屍を袈裟で、幾重にも包んでから船中總出で鄭重な供養をした。

心から悲しんでゐるのは、淸榮や普照ばかりではなく、大德鑒眞ま

で、碧い海底に吸はれて行く榮睿の屍をいつまでも〳〵見守つてゐた。

二

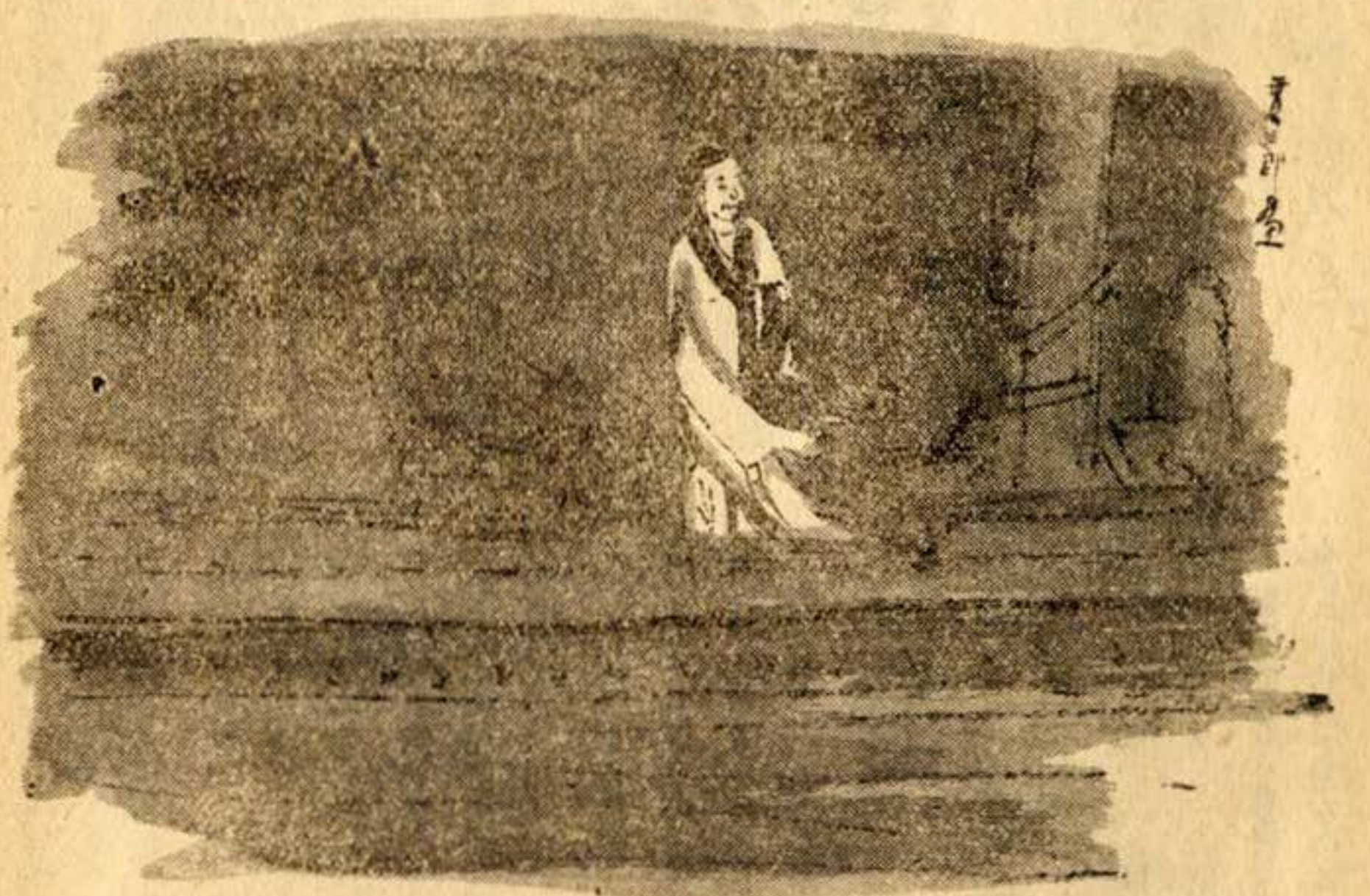
夏が來た。

さんざ燃え盛つた太陽が、遣唐船の上に、燒きついたやうに照り返へり、人々を焦熱地獄に、たゝき込んだ。

周防號も、安藝號も共に、方向をまつたく失ひ、風と浪に運命を託して、夏の海を、もがき苦しんだ。

だが、流石は、驍將だつた。十人の戒師と、教授師と、羯磨師を調まして、壯嚴な律宗の式を、幾度とたく擧行した。

日本に渡る希望を失つた高僧たちの態度は、常日頃と少しの變りもなく寧ろ死を前にして悲壯な式だつた。



榮睿の死ぬ前から、眼を病つてゐた鑒眞が、この日、弟子たちの前で、思託を呼び、

「思託、皆よくやつてゐるかのう」

呟くやうに言つた師匠を、思託はぢつと眺めてゐたが、彈きかへされたやうに、

「お師匠さま、……お眼が……」

思託の聲に、人々は高坐の鑒眞に眼けつけて行つた。

「お師匠さま、お眼が見えませぬかッ」

泰然と坐した高僧の周圍に、人々は平伏して言葉を待つた。

「拂僧は、眼界を失ふた——」

「お師匠さま——思託です。思託が見えませぬかッ」

「軍法力でございます。お師匠さま、軍法力がお見えになりませぬかッ」

たゝみかけて、弟子たちは鑒眞につめよつた。だが、長い間瞑想されてゐた潮風のために兩眼の明を失つた師匠は、空虛な眼を大きく開いて、

おう聲だけは、よう判る。拙僧にかまはず式をつゞけて臭れ。そちの達の姿は見えぬが、心だけは、今までよりも、もつと判然と拙僧の心眼に映つて來た」

師匠鑒眞の眼を失つて、なんの日本に渡る希望があるのだ。弟子たちは平伏したまゝ顏もあげ得なかつた。唐の高僧鑒眞は、眼を失つた——弟子たちは、聲を限りに叫んで、なに者かにこの悲嘆を訴へたかつた。若し唐の人たちが知つたら、いや、世の中の凡ての人が。鑒眞のこ[illegible]有樣を知つたら、どんなに悲しむことだらう。

しかし、大德鑒眞は、平然として、少しもとり亂してはゐなかつた。

「嘆くでない。榮睿どのを失つた淸榮どのをそち達は考へて見るがいゝ」

冷然として口を切つた鑒眞の前に、人々は泪をのんで耳を傾けた。

「些細の苦難に心を動ずるは、修業の足らぬ證據になる。吾々の道には、身を滅するやうな辛苦が、次から次と降りかゝつて來る事を覺悟の管ではなかつたか。燒けるやうな炎熱はいゝ試練ぢや。迅く式をつゞけなされ」

師匠の聲に、思託をはじめ、弟子たちは、それ〳〵の位置について、律宗の式がつゞけられた。

大海原の浪に飄弄される船から、佛名をとなえる。弟子たちの聲は、長く尾をひいた海空に消えて行つた。

三

天平勝寶六年一月二十一日、鑒眞一行を乘せた遣唐船が、松浦潟に着いた。恰度、婆羅門僧正菩提仙那が、大佛開眼のご盛典を行つた翌年だつた。

一行の航海が、長かつただけ、一同の悦びも大きかつた。多くの歡迎者に導かれながら、奈良の都に、鑒眞一行が堂々ねり着いたのは、四月二十八日であつた。

唐の人々の想像もしなかつた靑葉若葉に燃える山々が、夢のやうに連なり、陽の光を孕んだ靑草が、新酒のやうな香を漂はせ、みながらの極樂淨土だつた。

十幾年目で歸つて來た淸榮は、大地に足うらをつけ、若草のつゞく限り走りつゞけて見たかつた。力一ぱい兩手を空にあげ、あらん限りの聲を張りあげて、叫けんで見たかつた。

「おゝ、奈良だ。奈良だッ」

淸榮の血潮は、欣びに沸立つた。

安宿王の率ゐる多くの公卿、僧侶は、まづ羅城門前に聖旨を傳達した。鑒眞大一行が、笛や太鼓の音もゆるやかに、東山東大寺に、仰々しく送りこまれた。

洋々たる靑榮は、休む時もなく、諸寺の梵鐘高らかに響き渡り、人々を法悦の世界に導いて行つた。

纖草山一帶の新緑は、晩春の陽に輝き、青葉若葉の交響樂は、見あぐる大盧舍那佛の鶏尾の光りに反響して、佛德を讃歎させた。

街々には、異國高僧歡迎、佛德讃仰の彩旗が、風を孕んで心地よくひらめき、同じ色に染められた、衣を纏つた天平の善男善女は、衣の袖を薫風に翻らせながら、式場へと、雪崩こんだ。

大佛殿前の廣場は、ほとんど僧尼で埋められた。牛成の三百二十尺の七重の塔が、中門外側の左右に突ッ立つてゐた。

廣場に設けられた、伎樂の大舞臺の四隅には、金色燦然とした寶樹が、美しく輝き、破陣樂や入陣樂や胡飲酒などの林遊樂は、しばし引きも切らなかつた。

雨のやうに降る天花は、場内に繽粉として、みち渡り、旌旗や、旛や、笛や太鼓が、幽遠な音律を流して、群衆の心を、まつたく酔はしてしまつた。

五節の舞、久米舞、林邑樂、跋頭、一つとして彼等の心を極樂淨土に、導かないものはなかつた。

殊に鑒眞一行が、日本固有の五節の舞の前に立つた時、彼等は、恍惚としてゐるばかりだつた。

唐の風物に心酔して來た清榮にとつて、自分の生まれた國に、こんな優美な舞があつたのに、今更のやうに眼を見張つた。

それから、群衆を押わけ〳〵鑒眞一行が、ねりこんだ。群衆の波のうねり行くやうに、鑒眞の過ぎるところに、佛名を稱へて、讃歎した。そして、一同が、五丈六尺の大盧舍那佛の前に、ひざまづいて、金色に輝く圓滿具足の御佛のお袖に縋り、常樂我淨を願つた時、清榮の胸は、一ぱいになつて、感激の涙が、頬を傳つて流れ落ちた。

「このご盛典を、たゞ……一目、お師匠さまにお眼にかけたかつた……」

「清榮、拙僧は、かうして式場に臨むことは、身を切られるよりも苦しいのだ。榮睿に、この盛儀を見せてから死なしたかつた」

ふたり心を一にして、日本を出帆し、身命を賭して、鑒眞を招聘したのに、中途で死んで行つた榮睿を思ふと、普照は口惜しくつて堪まらなかつた。

高鳴る鼓子のひゞきが、長く尾をひいた、殿内から消えると、鑒眞が、透徹した伽陀にはじまつて誦經した。

この式場で、誰よりも喜ばなければならない、この世の歡喜をひとりで背負つてゐる筈の鑒眞が、兩眼の明を失つてゐることに、氣づいた人々は、息づまるやうな憶ひに頂垂れてしまつた。

「この莊嚴な式場を、鑒眞さまが、ご覽になれたら……」

群衆は、ついに嗚咽してしまつたのだ。

壯重な空氣の中に、據然とした大盧舍那佛の金色、鋭く人々の眼を射て、ひとりとして仰ぎ見る者さへなかつた。

清榮は、釘づけにされた像のやうに、動かなかつた。（をはり）

これは『千手觀音』と題する小說の前編を爲すものである。期を得て後編を發表し首尾を一貫させたいと思つてゐる。——作者

大衆歌壇

與謝野晶子選

○　山形　森谷善治郎

照り光り御顔安けしまさしくも
千年を經たるみ佛にして
童顔におはしますかなわが拜む
推古のみ代の觀世音佛

○　大阪　小山　文二

何となく心さびしくなりぬれば
誦しもこそすれわが好む歌
打ちつづく灰色の夢あぢきなし
われに與へよむらさきの夢

○　姫路　内海　一音

泣かじとて抑ふる涙こぼれけり
師の病む樣を母に語れば
旅に居て師のおん病憂ふればわ
れ眠りえず不吉なるかな

○　滋賀　福島　武子

姥捨ての山にあらねど老の身の
子にはなるるは悲しかりけり
美しきものに觸れても子の戀し
ごと抱く楫の燃ゆる爐

○　靜岡　富岡　知人

緣山の石のきざはし上りゆく御
練の稚兒に花吹雪する

○　香川　横江　史枝

水仕する兒の手はひびに荒れは
てぬわれこの冬を病みてこもれ
は

○　新潟　植本須賀子

はらからが一つ心に祈れるを天
もききませ病む母のため

○　滋賀　本間　秀道

隣音の巷に立ちて求むなる眞實
の家はるかなりけり

○　福井　飯塚八代比

朝夕に經あげ給ふ父母の靡すが
しけれ老い給へども

○　山口　竹原　明惠

松露かく姥あり瀨戸い冬晴れて
千珠島濃き植者の松原

○　上原　抱地

亡き大人とともになされし先生
の旅の記を讀む古雜誌かな

○　滋賀　佐々木白鷺

世を隔てては語るすべなし

○　埼玉　青野　智惠

かかること何かあらんと自らを
責めつつ膝に涙ながるる
苦しみを誰に語らん術もなく屋
上に出で白き雲見る

○　靜岡　一向　山人

み佛の光のなかにつつまれて世
に生くる甲斐知りそめしかな
今は唯何も思はず明暮に佛おろ
がみねぶつするのみ

○　大阪　沖　清高

母上を思へば戀しふる里の春の
山さへ眼に浮びきて

○　福島　佐藤　海陽

桂月の歌の碑立てりかごば瀧岩
間のつつじ燃えて咲く中

○　長野　田中　廣司

小雪ちる信濃高原家ごとに花の
物乎ひの佇む門に音立てて山の
雪解の春の水行く

○　廣島　川田　信嶺

思ひては日毎に戀しふるさとの
み寺の桐の紫の花

○　小倉　益田　慧光

大空の光春めき身に沁めば待ち
えしごとく街に出で行く

○　岩手　藤原貞二郎

雪いまだ消えず岩手の寒けれど
若葉摘む子らはや出でて摘む

○　廣島　上原　抱地

病床の我れにも香を焚けと云ふ
母は念佛に涙かくして

○　山口　長岡　健一

久しくも鶏を飼はざり初鶏は遠
き方にて啼き出でにけり

○　東京　三野輪香雪

美談よみうれし涙に眼鏡ふく二
の涙もて世をば清めん

○　北海道　花田　順往

さめあ後なほ慕はしき夢ながら
色香ゆかしく咲ける花園

（本文）舍利弗、於汝意云何、何故名爲一切諸佛所護念經、舍利弗、若有善男子善女人、聞是諸佛所說名及經名者、是諸善男子善女人、皆爲一切諸佛、共所護念、皆得不退轉、於阿耨多羅三藐三菩提、是故舍利弗、汝等皆當信受我語、及諸佛所說（念佛利益の二面）

（字解）諸佛所說名＝阿彌陀佛の名

阿耨多羅＝無上、「此の上もない」と云ふこと。

三藐三菩提＝正等正覺又は正偏知、即ち眞正にして偏く一切の眞理を知る智惠

正しい信仰は

＝佛說阿彌陀經講義（其六）＝

中村辨康

（一四）一切から承認されて居る

天地一切から包まれて居る感じ。

信ずる者を中心にして其處に天地全體の念ひが集注され、一切諸佛の色とりどりの人格的な光明が、幾重にも幾重にも其人を攝め入れて離すことなく、スッカリ抱き取つて呉れて居ると云ふ感じ。

こんな感じは唯だ念佛する者の主觀だけなのだらうか。

此の阿彌陀經では念佛する者を一切諸佛が護念して居ると云つて居る。

護念の經もあるが、護念の內容は「此上もない正しい覺りの智惠」から退くことなく、ますます進展があるばかりであると云ふのである。　加之、此「得不退轉菩提」と、も一つは私達の永遠の生命に關する決定としての「淨土往生」が獲られることを繰返へして云つて居るのである。

のこと。簡單に云へば「正しい覺り」のこと。

（和譯）

舍利弗よ。御前は何う思ふか。なぜ、此の經を「一切諸佛所護念經」と名付るか。それは次の如き理由があるからである。舍利弗よ。若し善男子善女人が此の諸佛の稱讃して居る阿彌陀佛の名を唱へること、及び其の事を說いた此の經典を聞いて、その通りに實行するならば、此人達は皆な悉く現在に於て一切諸佛に護念せられ、「此上もなく正しい覺」から退くことがないであらう。だから舍利弗よ。御前達は皆な私の言葉及び諸佛の證言を信受し「淨土往生」の方は「執持名號」者の主目的であるから、當然なこととも云はれるであらうが、特に二度も繰返して「得不退轉菩提」と云ふ事を云つて居るのは、一體何うした理由なのだらうか。

一般に佛敎で「成佛」を「得菩提」の結果として云ひならされて居る。して見ると、此「得不退轉菩提」とは結局「成佛」を云つて居るものである。つまり「往生」と「成佛」とは言葉こそ違へ、其内容としては均しいものであると見て居るのである。

しかも其「往生」よりも「不退轉菩提」の方を先決條件として居るのだから、一般佛敎の通念と違つて、一應「菩提」と「往生」とを同等にしながら、更に一歩を進めて菩提を退轉せさる者を往生の資格者として「往生」を高位に置いて居るのを知るのである。

また法然上人は此一段を次のやうに云つて居られる。

『念佛する者は諸佛に護念せられるから、信仰が益々堅固になり增進するので、菩提を得ることが必然的である。卽ち此の「護念」と云ふことと必然的に「菩提」を得る爲めの「不退」を得ると云ふことと、二つが現在の利益で、菩提を得ることと淨土に「往生」することとの二つは未來の利益である。』

として「得」の字は「不退轉を得る」ことゝ「菩提を得る」ことの二つに掛けて居ると見て居られる。また惠心僧都は、

『一には現在に諸佛に護られ、二には現在に不退轉を得、三には將來に大菩提を得べし。』

と云つて「菩提」と「往生」とを同じ意味に見て居られる。之等の解釋から見ると、護念と不退轉とは現在の上に於ける相互的に關係して居る利益であり、「往生」と得菩提卽ち「成佛」とは將來に於ける利益の兩面觀察と見て居られることが判る。

なければならぬ。

（本文）

舍利弗、若有人、已發願、今發願、當發願、欲生阿彌陀佛國者、是諸人等、皆得不退轉、於阿耨多羅三藐三菩提、於彼國土、若已生、若今生、若當生、是故舍利弗、諸善男子善女人、若有信者、應當發願、生彼國土。

（念佛利益の三面）

（字解）

已發願、今發願、當發願＝過去に願ひを起し、現在願ひを起し、未來に願ひを起す。

已生、今生、當生＝已に極樂に生じたであらうし、現在生私るであらうし、未來に於て生ずるであらう。

しかも此經で「得菩提」を先に云つて「往生」を後に云つて居るのは、あまり常識的な考へではあるが、成佛は個人個人の上に見たものであり、往生は「淨土」と云ふ場所即ち社會生活に就て云つて居るものであるから個人的條件が具備して始めて「淨土」入國を許されると云ふ關係からであらう。

こんな風に見て來ると、諸佛の「護念」と云ふことが現實的には私達の信仰の增進に就て重大な役割をして居るものであることがよく判るのである。

即ち淨土を獲得するには「菩提」を得ることが條件とされて居り、その完全な菩提を得る爲には現在に「不退轉」を得ることが約束され、其の不退轉を得るには諸佛の「護念」が重要であり、しかも其諸佛の護念は「執持名號」者には必ず與へられるものであると云ふ次第を云つたものであらう。

誠に一切から護念され攝受されて居ると云ふ氣持程、私達のやうな亂れ勝な人間をして心から安らかにして吳れるものはない。これは極めて重要な氣持である。然かもそれが單に感情的な獨斷でなく、先例的にも然るべき事が容認されて居るものであるから全く以て氣强さの限りである。

智德併び行はれる「兩足尊」たる一「佛」を念じて、其無量壽と無量光とを獲得せんとする「念彌陀法」こそは、印度支那日本の佛教學者の錚々たる幾多の人達が、佛教の高遠な理論を學び盡くして其思想の圓熟して來た晩年に到り、遂に此の結論として且つ實踐せざるを得なかつたもので、云はば宗教の極致とも云ふべきものである。

佛教に於て「道を求める」ことは、佛を求める事であり、佛を求めることは、常に佛を念頭に置くことであり、佛を常に念頭に置く人は、其日常生活の動作の上に於て常に佛と離れないことである。

身體に於ては佛の名を呼び、心に於ては佛を念願することは、佛を求め行く人の必然的な行爲心狀である。戒律に依て生活を正しく守る人も、坐禪に依て心を禪めて行く人

(和譯)
舍利弗よ。誰でも阿彌陀佛の淨土へ往生しようと云ふ願ひを過去に起し或は現在起し又は是れから後に起して阿彌陀佛の名を執持するならば、皆な、此上もない正しい覺から、退轉することなく、其阿彌陀佛の國へ若しくは過去に於て生れ、若しくは現在生れ、若しくは未來に於て生れるであらう。だから、舍利弗よ。そして一切の善き人人よ。此の言葉、及び諸佛の證言を信ずるならば、是非、彼の國へ生れんとの願ひを起すべきである。
滅罪＝罪とは　現在になしたるも、學問に依て佛の內容を知らうとする人も、押しつめて考へれば皆な底い意味の念佛心の上から爲す「求道法」に外ならない。

さうして見れば他の一切の戒行よりも一番直接して居るものは、此阿彌陀經に於て釋尊が懇ろに勸めて居られる「執持名號法」であるべきことは云ふ迄もないことである。

かゝる簡單明瞭な、そして何んな人にも實行され易い「念佛」こそは、誠に佛教實踐法門中の最易最勝、最大利、最大福、最大德のものであると、此阿彌陀經が云つて居るのも「成程」とうなづける筈であるが、それと共に一切から是認され、一切から獲念されて居ることはむしろ當然過ぎる程當然なことである。是認の出來ることである。

かくて支那の淨導大師は此の念佛に關する利益を五つに分けて居られる。

一、滅罪增上緣(煩惱や罪が淸められる)
二、護念增上緣(天地一切から護られる)
三、見佛增上緣(佛がよくわかる)
四、攝生增上緣(永遠の生命が約束される)
五、證生增上緣(淨土への往生が保證される)

之を阿彌陀經で云へば、證生は「往生」と「臨終來迎」とに當り、護念と滅罪とは「一切諸佛護念」に、見佛は「現在其前」の來迎に當る。

これ等は何れも現在に於て實證し若しくは約束されることであるが、其實證し約束されることが、現實的な信仰の感じとしては、天地一切から包まれてスツカリ攝め取られつゝ安心し切つて、此の日常生活を充實しようとすることである。眞實なるものは誰にも是認され愛好されるものであると共

現在の利益
將來の利益

滅はこれが清まること。
攝生＝攝とはおさめ取ること、生とは私達の生命　證生＝證とは保證すること、生とは淨土へ生れること。
增上緣＝最も强い力。

（本文）
舍利弗、如我今者、稱讃諸佛不可思議功德、彼諸佛等、亦稱說我不可思議功德、而作是言釋迦牟尼佛、能爲甚難希有之事、能於娑婆國土、五濁惡世、劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁中、得阿耨多羅三藐三菩提、爲諸衆生、說是一切世間難信之法、舍利弗、當知我於五濁惡世、行此難

に、永遠に易ることなき眞實の光りであるからである。
その天地に輝く光。この光こそは阿彌陀佛の無量光であり、一切諸佛の護念光である。そしてそれは獨り念佛する者のみの味ひ得る現實生活への光である。

（一五）人の中での人と選まれて

正しい願ひを起し得る者は幸福である。願ひなくしては何事も成就はしない。
然かも人間の望みの最も正しく最も高いものは人格的な無量壽と無量光とへの願望である。
物質欲の中に入り浸つて居る私達としては、餘程の好因緣なくしては、かゝる高潔な宗教的求道心の起りやう譯がない。
一般的には「宗教宗教」と騒ぎ廻つて居ても、大概物質的問題を中心として居る丈で有限の泡の如きものを、夢の中に追つて行くやうなものに過ぎない。例へば病氣が療ると云つたとて、氣を病んで居る神經衰弱症が輕くなるから、療つたやうな氣がするまでである。無論元氣が出れば白血球の活力が盛んになり、黴菌が蠶食されて漸時健康になると云ふ事は有り得る筈で、かゝる意味でなら、何も宗教の神秘を振り廻さなくとも理論上當り前なことでもある。然かも其問題は一時的なもので、永遠の生命には何の關係もありはしない。
また金がもうかると云ふ事が、正しい努力に對する結果なら別に大した問題ではないけれども、何もせずに唯だ信心だけして居ればと云ふなら、結局懶惰な氣持を養成するだけであつて、畢竟亡國思想に外ならない。そんな宗教は盛んになればなるだけ、國の活力を失ひ國を亡ぼす禍因ともならう。そんなものが存在することは百害あつても一利はないものである。

事、得阿耨多羅三藐三菩提、爲一切世間、說此難信之法、是爲甚難、

（釋迦諸佛互讚）

（字解）

希有＝貴い。

娑婆國土＝忍耐すべき世界と云ふこと。

劫＝時代。

見＝邪見、我見、など。

煩惱＝貪欲、瞋恚、愚痴など。

衆生＝人々。

命＝生活。

濁＝正明ならざること。

難信之法＝念佛のこと。

（和譯）

舍利弗よ。私が今、六方の諸佛が阿彌陀佛の不思議功德を讃めてそれを信ずることを勸めたところのその諸佛の功德を讃め遣べたが、諸佛も亦た

考へるまでもなく掛引で相手を胡魔かしたり、暴利をむさぼつたりするやうな我利的な氣持を改めて、正しく明るく出來る丈相手方の利益になるやうに商賣するのが、本當の宗教的な商業である。商賣は信用を中心としなければならぬことは誰でも知つて居るけれども、事實問題としては仲々さうばかりも行かず、良心的には一寸困り乍ら、舊來の因習に引きづられて、明るい商賣が出來ないのを、信仰に依て敢然として之を行ふ時、其處に白道擴々と開け行くものがあることは、幾多の實例のあることで、其永遠の繁榮は決して偶然ではない。信仰に依て一切の者が明るく正しくなつたら、何んなに住みよい世の中になるであらうか、想像する迄のことはないのである。それを神樣を拜めばこちらの方は改めなくとも、神樣の不思議力で儲けさせて呉れるなどと云ふのは、全く飛んでもない神樣があつたもので、如何に正しい信仰が一般の人に理解されず、惡魔的信仰のみが世の中を我がもの顏にのさばるか、誠に慨歎に堪へないものがある。

さればこそ、此阿彌陀經では現實生活を「五濁惡世」と云つて居る。五濁惡世とは、

一、劫濁（時代の惡いことを總體的に云つたもの）

二、見濁（事物の見方が間違つて居ること）

三、煩惱濁（見方が間違つて居るから、夫から起す行爲は皆な間違つた我欲から行はれること）

四、衆生濁（見濁、煩惱濁の爲に人間が惡くなつて居ること）

五、命濁（人間が惡くなつて居るから隨て其生活も總體的に間違つて居ること）

卽ち時代的にいけないのは凡ての人の生活が正しくないからであり、凡ての人の生活が正しくないのは皆んなの素質がいけないからであり、皆んなのそしつのいけないのは其行爲が物質欲に引きづられていけないからであり、其の行爲のいけないのは事實に對する見方が正しくないからであると云ふの

私の功徳を讃めて云ふやうには、「釋迦牟尼佛は、よくもこのやうな極めて困難な（話そのものは困難ではないけれども人々をして正しい信仰を得せしめると云ふ事は困難なので）そして希有な仕事をなしたものである。」と云ふのは此の娑婆と云ふ世界は五つの濁りに充ちて居り、自我中心の利欲には直ぐ飛びついて來ても、正しい事を好まず、正しい生活をなし得ない人々の集合して居る時代的濁流の中に於て、此上もない正しい覺りを得て、其體驗の上から大勢の人々の爲めに此の一切の世間人の信仰し難い御法が、此の「五濁惡世」と云ふことである。

隨て此五濁惡世に於ては物質欲を滿足せしめるやうな卑板をかけたインチキな信仰には飛びつく人は多からうとも、自分を改造して高潔な人格となるべく、常に佛を念じて、如來慈光照鑑の下に、正しく明るく素直に生活し修養しようとして、正しい宗教を理解して居る人の尠いのは寧ろ當然かも知れない。

永い浮世に短い命である。太く短かく仕たい三昧の事をして、面白可笑く暮してそれで死んで仕舞へば本望だと、デカタン主義の人ばかり殖えたら、嘸ぞ社會がよくなり國家が興隆することであらう。かう云つたデカタンの飛んでもない思想が、たとへ無意識的にもしろ、根柢深く私の頭の中に潜んで居るから、インチキ宗教も繁昌するのである。實に情けなくなつてしもふ。こんな事で何うなることとか。思へば我國の前途も誠に暗膽たるものがある。

然しインチキな信仰は決して外にばかり有るものではない。佛教の中にだつて隨分有る。曲歪された御祈禱佛教など皆んな同類項でしかない。イヤイヤ一ばし正しいやうなことを云つて居る私自身の中にさへ思ひもよらぬ迷信的要素を多分に持つて居ることを反省しなければならぬ。

釋尊が口を酸ばくして「難事である」「難信である」「甚難である」と云ひ乍らも「信ぜよ」「發願せよ」と、諸佛を引合ひに出したり、諸佛と自分との讃め合ひを語つたりして、一生懸命に私達へ正しい信仰を勸められて居るのも畢竟は「五濁惡世」の物質慾のみなぎつて居る世の中だからである。

さるにても私達が今ま此阿彌陀經を聞き得て、釋尊の慈悲深い御心根も判り、一生懸命に勸めて下さる「念阿彌陀佛法」の内容もほゞ知り得たことは、誠に人多き人の中にも、特に因緣の深い「選

を説いた事である。是こそ本當に釋迦牟尼佛の不可思議功德として稱讃せずには居れないことである。御前よ。御前は舍利弗よ。御前はそれを是認することが出來るであらう。私は本當に此の五つの濁りの滿ちて居る惡い世の中で、此の困難な事をなしたのだ。此の上もない正しい覺りを得て、宗教的實踐法に就ては委しく知つて居ればこそ、一切世間の人々の爲に、此の普通では信ずることの困難な御法を說いたのである。この事こそ最も困難な事なのだ。せめて御前丈でもこの氣持を知つて呉れよ。

（以上正宗分格）

ばれたる人」としての感慨深いものがある。まして之を信じ之を實行して行く信仰心こそ最も幸福な人であると云はなくてはならぬ。

觀無量壽經の中には、「人間の中での白蓮華である」と云ひ、大無量壽經の中には、「此經を聞いて念佛を信じ行ふことは「難中の難」である、之に過ぎたる難きことはない」と讃めて居られるのでも判る。

いささらば！　私達は釋尊の勸めに從つて眞摯な「發願者」となり、濁りに染まぬ白蓮華の如く、念佛の信仰に依て五濁の逆流に溺れぬ大丈夫となりたいものである。

（一六）おことはり

以上で大體阿彌陀經の正宗分即ち本文の大綱丈を御話したつもりである。六回で滿了するやうにした爲め、無理な書き方をしたり、且つ云はねばならぬ處を割愛したところもある。特に淨土の內容に就て云ひ足りない箇所の多かつたのは、幾重にも御寬恕を御願ひしたいものである。

佐藤春夫氏も云つて居られるやうに、此阿彌陀經の叙述は立體的に組立てられて居て、極めて香りの高いものである。淨土三部經の中でも一番まとまつた不純物の交らない信仰的經典として、此經に上越すものがない丈に、唯だ文字の表面丈見たのでは、其味ひを知るのに困難である。餘程信仰深くならなくては其奥深い味は判らないであらう。隨て私の如き信仰淺き者にはまだまだ判らないところが多い筈であり、却て講義をした爲に此經典の價値を低下させた恐れもある。

唯だ願くは之を機緣として、幾分でも念佛の信仰を知らうと志す方が、一人でも二人でも出來たらほんとに嬉しいことで筆者としては望外の喜びである。（完）

編輯後記

◇この冬は稀にみる寒さでしたが、やつと春らしくなつて來ました。春に臨んで先づ第一に讀者諸賢の御活躍を祈ります。

◇先月號は望外の好評を博してスッカリ賣切れましたが、今月號も刷新された編輯部の全能力を發揮して、目新しい充實した編輯で讀者にまみえました。

◇總べての讀者を滿足させる——これが編輯部のモットーですが、御覽の樣に今月は誰でもが讀みたい「人生の荒波を超えて」の特輯物で飾りました。人生の荒波を乘切つた男二人に女二人、然も、事業家、名人、學者、舞踊家とならべたヴァライティーは本號の壓卷として編輯子の自信タップリのものです。

◇また、佛教界に王座を占むる高楠順次郎博士、矢吹慶輝博士、梅原眞隆氏の慈味溢れる玉稿を掲載したのも本誌ならでは出來ぬ豪華版です。

◇眞野正順氏の「身を捧げゆくもの」は前號からの續きですが近來の快作として好評嘖々たるもの、又、中村辨康氏の「阿彌陀經講義」は愈々絶賛裡に完結致しましたが、來月號からは更に筆硯を新にして「法然上人法語抄」の名講をものせられる筈です。刮目してお待ち下さい。

◇其他　江藤澂英氏が益々雄健な文筆を揮つて本號を飾り、劇作家岡本綺堂氏　前東京市立駒込傳染病院長二木謙三氏の好讀物等々、本號は誰でもがとびつきたい程の充實ぶりです。

◇編輯上に就て御希望があつたら、遠慮なく御知らせ下さい。「淨土」は皆さんの雜誌ですから（東）

◇本誌も今月で一年間の歩みをとゝのへたわけである。いまのあわたゞしい世相の中にはさまつて、地味ですこしもパッとしない宗教雜誌を出してゆくことは、かぎりない忍耐と根氣に俟つほかない。しかしさいはひ號を追うて增してゆく愛讀者の方々の御支援によつて、この一年の間よろこんで仕事をさせて戴いたことについても今更のやうに佛恩のありがたさを感じる。

◇淨土宗管長岩井大僧正の生ひ立ちの記を載せたことは、さういふ記念の意に添うたものと思つてゐる。

◇路は未だしい。本誌の發展もこれからである。（佐賀）

淨土　四月號
昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
昭和十一年三月二十日印刷納本
昭和十一年四月一日發行
（定價金十錢）
編輯兼發行人　眞野正順
印刷人　赤尾光雄
東京市牛込區市ケ谷加賀町一ノ三
印刷所　大日本印刷株式會社
發行所　法然上人鑽仰會
東京市芝區芝公園明照會館內
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定
一部　定價　金十錢（送料一錢）
一ケ年　金一圓（送料不要）
右の一ケ年金壹圓は法然上人鑽仰會の會費です入會申込みと同時に一圓御納めになれば、「淨土」及び月刊新聞「法然鑽仰」が一ケ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

佐藤春夫著・小杉放菴挿繪並裝幀

法然上人別傳

掬水譚

△限定出版　壹千部
△定價　四圓五十錢・送料廿二錢
△七八寸特製ノート型・天金・十二ポ總振假名・約三百頁・美麗函入
△放菴畫伯に依る……裝幀、見返し、六十四葉挿繪（玻璃版）
△兩大家一致の想になる豪華・絢麗版

名篇！遂に出づ!!

文豪佐藤先生の流麗圓滑の文と畫壇の雄小杉畫伯の枯淡風雅な挿繪になる昭和に生きた法然上人傳！

宗教文藝の精髄・千載に光彩を放つ。

過般大毎東日兩紙に連載し、百萬の讀者を魅了したるもの。俗に媚びず、難に墮ちず、作者自ら淨土の信仰を掴み、一篇一篇悉く念佛の溫床に育成された宗教文學の最優なる創作。

◎著者署名の特典　特に記念の爲め、法然上人鑽仰會への直接註文に限り、著者署名す。

一部を備へて家寶とせられよ

發行所　法然上人鑽仰會

昭和十年五月廿五日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十一年三月廿日印刷納本　昭和十一年四月一日發行

淨土　第二卷　第四號

定價金十錢（送料一錢）

之ぞ斷然優秀の消炎鎭痛貼布藥

一、皮膚に貼つたまゝ入浴差支へなし
一、貼り換へず共一晝夜藥効を持續す
一、綺麗故不快の貼りアトを殘さず
一、藥臭もなく惡性のかぶれも起さず
一、何れへ貼つても柔軟伸縮自由自在
一、ロートエキスを含む最新の威力

佳人の膏藥

マーブラスター

適應症

神經痛　肩のリウマチスの痛む所
運動に因る筋肉並關節痛
勞働に因る筋肉並關節痛
打撲挫捻胸痛
手足背腰の痛む所
乳腺炎齒痛靴擦痛
氣腫物整傷

愛讀者御優待

御住所氏名明記の上大木合名會社宛御申込下されば本誌讀者に限り見本贈呈

各藥店にあり　十錢　二十錢　五十錢　一圓

大木五臟圓本舖

大木合名會社

東京市神田區鍛冶町三番五〇壹壹表代田神話電